

# ダークネス・ストラト ス

金欠生首

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは・・・一つの可能性の物語

『IS』の世界に『ウルトラマンベリアル』とその部下『ダークネスファイブ』が訪れる。

彼らはISの産みの親である『篠ノ之 束』とコンタクトをとり交流を深めた。

そして、彼らが自分達の宇宙に帰る時にベリアルはこう言った。

「次にここに来た時はお前の作ったそのISとやらに乗せる」

そう言つて、彼らは自分達のいる宇宙に帰つていった。

それから10年の歳月が経った。

そして・・・そこからこの物語は始まる・・・

IS×ウルトラマンベリアル&ダークネスファイブと言う異色にして異端作！  
『ダークネス・ストラトス』・・・スタートです！

# 目次

## プロローグ

プロローグ1 宇宙を目指す兎と宇宙から来た5人と1匹 ————— 1

プロローグ2 完成するI S、そして

未来に続く約束 ————— 6

## 第一章 戻ってきた皇帝と部下

第一話 10年ぶりの再会 ————— 20

第二話 午後からの転入&買った喧嘩

————— 39

第三話? 『二人の初ゲーセンと三人

の女体化練習』 ————— 58

第三話 『反逆』の力 ————— 73

第四話 『世界最強』と『宇宙最強』

89

第五話 学生なので勉学を ————— 102

第六話 テスト相手はロシア代表

117

第七話 『反逆』VS『淑女』、完全決着

! ————— 131

第八話 転校生は和・洋・中?

144

第九話? 『マスゴミ』? いいえ『黛』で

す ————— 158

第九話 クラス対抗戦 ————— 171

第十話 機械人形をぶっ壊せ!

184

第十一話 インペライザーの驚異！

197

第十二話 決着！ インペライザー！

206

第十三話 我が名は『■ ■ ■』

220

？？？

亡國の黒き女

番外 黒と黒

番外 新旧集合

第十四話 襲来、四人目と戦士、それと

……

249

第十五話 兎の群れは王に仕える

253

第十五・三話 髪留と極

259



プロローグ

プロローグ1 宇宙を目指す兎と宇宙から来た5人と1

匹

それは…宇宙空間での活動を想定し作られたマルチフォーム・スーツ『インフィニット・ストラトス』通称『IS』が発表される一年前に遡る…

「うーん…何で上手くいかないかな」

そう言いながら頭を掻くのは後にISを世に送り出しながらもコアを中途半端な数だけ作り行方不明となり全世界で指名手配される事になる『篠ノ之 東』博士本人だった。

「やっぱりここかな？それともこっちかな？」

そう呟きながら東は一つのワードスーツの様なものを弄る。

これこそが後にISと呼ばれる機体の一号機…そして、後に英雄とまで謳われる事になる『白騎士』である。

ここは東がISを完成させる為に自らの発明で家から少し離れた山に掘った即席の

ラボである。

そこにはいろんな機材が置かれている。掘った穴は束が通る時以外は外から見えない様に束の発明でカモフラージュされている。

「やつぱりここをこう弄って……ここはこうして……」

ぶつくさと思いを巡らす束であったが突如聞こえた足音と声に思考を止めて警戒し始めた。

「陛下、本当にここであつてんすか？」

「俺様が知るか！スライ、本当にここなんだろうな」

「ハイ！地球人には分かりにくくなってはるようですが私はわかりましたよ」

「全く……我輩が見つけたと言うのに。なあ、相棒」

「ギヤアアアアオオオ」

「ゴオー」

束の耳に入ってきたのは多種多様な声だった……五人の声と一匹の動物と言つて良いのか分からない獣の鳴き声だった

束は入り口に目をやりながら頭をフル回転させて考えた。『ここから今すぐ逃げる？それとも逃げずにこの未完成のISで立ち向かう？』そんな考えが頭を駆け巡る途中で声が聞こえた。

「中にいるのは一人……つまり篠ノ之 東、本人ですな」

東はその声に跳び上がりそうになるのを抑えて声を出した。

「そうだけど、そう言う君達はいったい誰なんだい？夜分遅くにレディの部屋に大人数で来るのはどうかと思うよ」

そう言い返すとさっきの声と同じ声で反応が返ってきた。

「そこは申し訳ありません。しかし、東博士の作る発明を東博士本人と共に見たいと思いいこんな夜分に来てしまったのです」

その言葉の後にしばらく沈黙は続いた……そして、10分がたったであろう頃に根負けして先に口を開いたのは東の方だった。

「はあ……君達には東さん負けたよ。開いてるから勝手にどうぞー」

そういうと東は作業に戻ろうとした……その時、先程から会話をしていた人物の声がこらう尋ねた。

「ありがとうございます。……ところで東博士、我々はこの姿でいいでしょうか？それとも人間の姿になりますでしょうか？」

そんな不思議な問いに東は冗談だと思い冗談で返した。

「別に宇宙人だろうと何だろうとどんな姿でも構わないよ、逆に宇宙の技術も勉強出来るかもしれないしね」

そんな東の声を聞いた後に扉は空いた……一応、ここが分かったのがどんな人間なのか気になった東は後ろを振り向いた……そして、言葉を失った。

扉から入ってきたのは日本人でも無く外国人でも無かった。

最初に入ってきたのは銀色に青いラインの入った鎧を着た黒い体の生物

次に入ってきたのは青くて固そうな表面を持つ生物

その次は銀色の装甲を全身に纏ったかの様な生物

さらにその次は小豆色の体で出っばっている部分は白い骨の様な印象を持つ左腕と左手が肥大化した生物

その次に来たのは凶暴そうな見た目をしながらも何処か愛くるしさを漂わせる獣

そして、その四人と一匹が入った後にその四人と一匹は左右に分かれて跪いた。

その跪いた彼らによって作られた扉からこちらに向かう道を通ってきたのは黒い体に紅の線を持ち胸に紫に輝く光球を持つつり目の生物だった。

東は、他を圧倒するかの様なその威圧感溢れる登場に魅了されながらも頭から離れない一つの答えを呟いた。

「……本当に宇宙人だったんだ……」

その呟きを聞いた後に目の前の黒い体を持つ生物は口を開いた。

「こんな夜更けにすまねえな……俺の名は『ベリアル』だ。よろしく」

ここに・・・ISの開発者である『篠ノ之 束』と元銀河皇帝の『ベリアル』そして、『ベリアル』に忠誠を誓う『ダークネスファイブ』・・・決して出会う事の無い人物達が出会った。

## プロローグ2 完成するIS、そして未来に続く約束

あの奇妙な出会いから数分・・・篠ノ之 東とベリアル、そしてダークネスファイブはと言うと

「へえくベークン達は別の宇宙から来たんだ。マルチバースかく昔の本で読んだことあるけど本当なんだ。興味深いね。東さんゾクゾクしちゃうな」

「ベ・・・ベークン？何処かの食い物みてえじゃねえか。まあ、それは置いて。そんなに興味があるなら来るか・・・生きて帰ってこれる保証はしねえけど」

「・・・なら、いいや。東さんはもつと生きていたいからね」

こんな風に和気あいあいと会話を楽しんでいた。

今は、ベリアル達のいた宇宙と多次元宇宙《マルチバース》論について説明していたようだ。

ちなみに東はベリアル以外の四人と一匹についても覚えたようだ。

何故ならのベリアルの自己紹介の後に跪いていた四人と一匹も立ち上がり自己紹介を始めたからで他に理由は無かったりする。

「東博士、少しいいですか？」

白い鎧を着た黒い生物、メフィラス星人『魔導のスライ』は手元にある端末を操作しながら束に声をかけた。

「んん？ 何だいスークくん？」

「ここなんです、ここをこうしてみても如何かと」

そう言いながらスライは端末を弄りながら束に見せた。

「なる程！ この構造を弄ってこうしたらこうなつて・・・スゴイね、スークくん！」

「いいいえ、何せ私の種族は私達のいる宇宙でも指折りの頭脳を持つ種族ですから」

そう言つてスライは誇らしげな顔をしていた・・・と、言つても感情のわからない顔なので声色で感じるしか無いのが現実である。

「この装甲・・・我輩の体よりは脆いが人間の作った物としては中々強度があるな」

「ギヤアオオオオオ」

そんな中、青くて固そうな表面を持つ生物Ⅱテンペラー星人『極悪のヴィラニアス』は相棒である『暴君怪獣タイラント』を撫でながらそう呟きタイラントも同じ事を思つていたのか鳴き声を返した。

「それは仕方ないのだよ・・・何せまだ未発表だから資金も降りないのさ」

そんな、現実的な問題をぼやいているとラボの扉が勢い良く開き、そこから二人の青年が現れた。

「陛下！頼まれた物、買ってきましたぜ！」

二人の青年の内、一人は青いジャケットと黒のジーンズを着用しており青みがかつた銀髪をしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう一人の方は赤のジャケットと黒のジーンズを着用しており小豆色の様な髪をしていた。

二人は右手に一つずつ袋を持っていた。

一瞬、誰か分かんず考えだした束だったが今のラボにいない二人を思い出し、目の前の二人の青年を見た後に分かったと言わんばかりに手を合わせた。

「なくんだ、デーちゃんとグツくんか〜」

「ちえ〜、バレちゃったのかよ」

そう言うのと銀髪の青年はその場で回転しながら銀色の装甲を全身に纏ったかの様な生物Ⅱグローザ星人『氷結のグロツケン』に戻っていき最後『どじゃあああん』という言葉と共に回転を止めた。

「グオオオオ・・・・・・・・」

小豆色の様な髪をしている方の青年も既に元に戻した左腕と左手で顔から下へと移動させながら元の小豆色の体と白い骨を着た様な生物Ⅱデスレ星雲人『炎上のデスロー

グ』へと姿を戻した。

「そりやくここにいないのと髪の色を見れば天才の束さんはピンとくるのだよ」

そう言いながら胸を張る束をよそにベリアルは彼らの持つて来た袋を物色し目当ての物を取り出した。

「お！あつたあつた。お前らよく買えたな、見た目的に駄目だと思つたんだがな」

「特に支障はありませんでしたぜ、陛下。身分証明も喧嘩を売つてきた奴らから借りたんで平気でしたぜ……最後に『兄貴』つて呼ばれたのは意外だったな、デスローグ」

「グオオオ……」

そう暢気に答えていたが実際にガラの悪そうな二人組が絡んで来たので叩きのめした後に身分証明できそうな免許証もその二人組のを借りたの変わる事のない事実。

そして、使用後はちゃんと返却もして少しばかりのレンタル料として少しのお金（彼らの感覚）つもりで万札を渡したら『兄貴』と呼ばれて懐かれたのも事実である。

「そうか。それは大変だったな」

そう言つてベリアルは目当ての物である飲み物の封を開け一気に飲み干した。

「くっっ！地球のビールという物は美味しいと聞いた事があるから飲んでみたかつたんだぜ！」

そう言いながらビールを飲み干したベリアルは未だ議論を続ける束とメフィラスに

近づき投影されているディスプレイを眺めて呟いた。

「宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツ    Infinite Stra  
tos . . . 《無限の成層圏》 . . .」

「へ . . . 陛下?」

「ペーくん . . . どうしたの?」

ディスプレイを見つめるベリアルに気付いたスライと束が声をかけるがベリアルは黙って真剣にディスプレイを見つめていた。

そして . . . しばらく見つめた後に口を開いた。

「束 . . . お前はコイツで宇宙に行きたいか?」

「もつちろん! 今はゴツゴツしたものを着ないといけないからね。いつかはこんなので宇宙に行きたいなく。その手で宇宙を掴め!」

ベリアルの質問に束は暢気そうな声で答えたが顔は決意に満ちていた。

「 . . . そうか . . . ククク . . . クフフフ . . . フハハハハハ! 」

そんな答えにベリアルは笑いを堪えていたが途中で堪えるのを諦めて笑い出した。

「何で笑うのさ! 束さんは怒り心頭だぞ! 」

そう言いながらポカポカと言う擬音が付きそうな感じで束はベリアルを殴って . . . 正確には叩いていた。

「フハハハハ……すまねえな。余りにも真面目な顔をしてたからつい笑ってしまったぜ」  
「むう〜」

そう言うベリアルという言葉に束はむくれてそっぽを向いた。

「まあ……そう言う夢を持った奴は嫌いじゃないがな。笑った詫びだ、ISの作成……  
手伝ってやる」

そう言いながら束の頭を撫でるとむくれていた束はむくれるのをやめて振り向いた。

「本当！手伝ってくれるの！」

「ああ。ただし、俺達の宇宙の技術は使わないからな」

「別に構わないよ！よし、さっさと終わらせよー！」

そう言う束は空中のディスプレイを増やして作業を始めた。

「お前ら……構わないよな？」

「「ハッ！全ては我等が陛下の仰せのままに」」「グオオオ！」」「ギヤアアアアオ！」

ベリアルの呼びかけに全員が答えて作業は始まった……

そして……夜も明け始めようとしている朝4時……

「で……出来たあああああ!!」

最初の I S . . . 後に『第零世代』と呼ばれる I S 《白騎士》が完成した。

「東博士、完成おめでとうございます」

「うむ . . . 中々いいフォルムだ」

「くっつ！中々クールなデザインじゃねえか」

「 . . . . . 」

「ギャオアアア」

完成した I S 《白騎士》を見ながらダークネスファイブ達は東に労いの言葉をかけていた。

ちなみに順番はスライ、ヴィラニアス、グロツケン、デスローグ、タイラントの順である。

デスローグは喋っても伝わらないので無言で拍手をしている。

「東、お疲れ」

そして、ベリアルも東に労いの言葉をかけながら飲み物を渡した。

「皆もありがとうね♪さーて、次はこれの起動実験だ」

飲み物を飲みながらそう言う東にベリアルは一つの提案をした。

「なら、今から飛ぶか？」

「へ? . . . 本当に?」

ベリアルルの急な提案に東は間拔けな声を出して尋ねた。

「別に構わないぜ。俺達もそろそろ元の宇宙に戻るからそのついでだ。お前らも文句は無いよな？」

「ハッ！ 我等が陛下の仰せのままに」

ベリアルルの呼びかけにダークネスファイブの代表としてスライがそう言う残り3人と1匹も肯定の意を示した。

「よし・・・じゃあ、いゝ「ちよーつとストップストップ」・・・はあ、何だ？」

ベリアルルが行こうとする直前に東がそれを遮った。

「いやゝ東さんも色々あるからねゝ少しだけ待ってて欲しいなゝって」

「はあ・・・なら、早くしてこい」

東の意見ももつともなのでベリアルル達は少し待つ事にした。

ちなみに今日は日曜日で東の通う学校は休みなのは東本人から聞いていた。

そして・・・30分後

「皆々おつまたせゝ・・・にやい!？」

暢気な声と共にやってきた東にベリアルルは拳骨を一つ入れた。

「遅い・・・あまりイライラさせるな」

「スーくんゝ、ベーくんがいじめるゝ」

「自業自得ですよ、東博士」

「うわーん、スーくんもいじめる」

静かに怒るベリアルに拳骨を入れられた東はスライに助けを求めたがスライにも助けられなかったので悪ふざけで泣き真似をしていた。

「大体、この天才東さんの頭に拳骨して二つに分かれたらどうするんだー」

両手を上げて「フッシャー」と言っている東の質問に彼らは個々に答えた。

「そうなたら二つの脳で別々に物事を考えられる様になるな。よかつたな」

「天才……うぬ。地球の中ならでの話だな」

「死なないならいいんじゃないのか？」

「いや、人間はもともと右脳と左脳に分かれていますから」

順番的にベリアル、ヴィリアニアス、グロツケン、スライの順である。

デスクローグとタイラントはその言葉を受けて隅っこで体育座りをし始めた東の両肩を軽く叩いてた……俗に言う『肩ポン』……なのか？

「はあ……さつさと行くぞ、東」

「あーちよつと待って！」

「何だーこのやり取り二回目だぞー！」

再び行こうとする時に呼び止められて、ベリアルは半ば苛立ちながら声をかけた。

「せっかくだからさく写真撮ろうよ、写真！」

「はあ・・・撮るならさっさと撮るぞ」

東の提案に了承したベリアルは全員で写真を撮ろうと白騎士の前に並んだ。

そして、セルフタイマーを東がセットしている間にスライがベリアルにある提案をしてきた。

「・・・ほう、面白そうだな」

そう言うのとベリアルは目配せで東以外の全員に提案を伝えた。その提案に頷いたあたりで東が戻ってきた。

そして、シャッターが切られた後に東が後ろを振り向くとそこには5人の青年とタイラントが立っていた。

その内、二人はグロツケンとデスローグだと直ぐにわかったが後の三人が分からず考えていると黒髪で切れ長の目をした執事風の青年が口を開いた。

「フフフ・・・東博士には流石に難しかったですね」

そう言うのと執事風の男はスライの姿に戻った。

「ぬう・・・流石に難しかったか」

そう言うのと次は濃紺の和服を着た少し髪の高い青年がヴィラニアスの姿に戻った。

「フツ・・・俺達を待たせやがった罰だ」

そういうと黒い服に赤いマントを羽織ったカリスマ溢れる青年がマントを翻すとベリアルに姿に戻った。

「むう、人間の姿の状態で撮るのは面白くないからもう一回！次はそのままだね！」  
「はいはい、さっさと撮って宇宙に行くぞ」

その答えを聞くと束はもう一度セルフタイマーをセットし戻ってきた。

そして、しばらくしてシャッターが切られた。束はベリアル達がまた人間の姿になつてない事を確認して写真も確認した後にISスーツを着て白騎士に乗り込み外に出た。

「さーてと、宇宙にしゅっぱーつ！」

「はあ・・・やっとか。お前ら、行くぞ」

「二」ハッ！」「三」グオオオオ！」「ギャアオオ！」

そう言うで一筋の白い光と5つの緑の光、そして一つの赤き光が空に飛んでいった。

そして、あのラボの外から空に向かった数時間後しばらく飛行を続けていると成層圏ギリギリで白騎士から警報が鳴り始めた。

「あつちやゝ・・・ここまでかゝ」

そう言う束は成層圏で白騎士と共に静止した。

「どうした?・・・もしかして限界か?」

ベリアルの声が耳に聞こえたので前を見るとベリアル達も空中で静止していた。

ベリアルの問いに束はそのまま通信で返した。

「うん。どうやら束さんも白騎士も限界みたいだよ・・・残念だなあ」

残念そうにつぶやく束にベリアルはある約束を思いつき束に声をかけた。

「束」

「ん?何だい、ベークン?」

「俺達はまたいつかの未来にこの世界に戻ってくる!その時もISで宇宙を目指したいなら手伝ってやる!」

ベリアルの思いついた約束・・・それは、再びこの世界に戻って来ると言う約束だった。

「本当!嘘じゃないよね!」

「ああ!本当だ!だから、次にここに来た時はお前の作ったそのISとやらに乗せろ!」

「勿論!皆の分の専用機を作って待つてるからね!」

そう言う束は白騎士の拳を前に突き出した。ベリアルもその意図がわかったのか白騎士と拳を合わせて少しずつ上昇を始めた。

「東！これは俺のサインだ、こいつは俺達と東の絆の証だ！覚えておきな！」

そう言つて飛んでいくと東の乗っている白騎士のモニターにZの最後の線を伸ばし、その線に三本のラインが入つて赤い文字が浮き上がった。

「それでは東博士、また会う日まで」

スライは一礼するとベリアルの後を追うように飛んでいった。

「次に会つたらその機体と一度手合わせしてみたいものだな」

「ギヤアオオオ！」

そう言いながらヴィラニアスは鉄球の付いた方の手を振るタイラントと共に後ろについていった。

「グオオオ」

「こいつも『またいつか』だつてよ！じゃあな、東！」

そう言うどグロツケンとデスローグの二人も空へと戻つていった。

そして、成層圏には東だけとなった。

「はあ……とりあえず、戻つたらベリアル達の専用機の作成と白騎士のメンテナンスだね……じゃあね、ベリアル……皆」

そう言うど東の乗った白騎士は高度を下げていった。

東は自分が誰かをあだ名で呼ばず名前と呼んだ事に気づかないままラボに戻り……作

業に戻った

そして、I Sの産みの親『篠ノ之 束』と『ベリアル』、そして『ベリアル』の部下『ダークネスファイブ』達の奇妙な出会いは一端幕を閉じるのであった

# 第一章 戻ってきた皇帝と部下

## 第一話 10年ぶりの再会

あの出会いから10年・・・『白騎士事件』や『第二回モンド・グロツソ』での公表されていない誘拐事件。

他にも世界でIS関連の事件が色々起きた。

産みの親である『篠ノ之 束』も三年前に忽然と姿を消し世界中から追われるようになった。

束は現在、自分の発明である移動用ラボ『吾輩は猫である《名前はまだ無い》』を思い出の場所に構えその中で1つのISを弄っていた。

そのISは現行の第2・第3世代機とは異なり全身装甲《フルスキン》タイプの機体でそれぞれ容姿が違った。

黒き装甲の所々にガーネットの線の入ったISで妖しい色気の様子を感じさせた。

そのISは10年前に束が会った彼らの姿を基にした5機のISの内1つだった。

「う〜ん・・・この子も依然動かずか〜」

1体のISを弄りながら10年前の事を思い出すと束の顔が少し笑顔になる。

「また皆に会って話したいな〜」

そう言うとき東はISを弄る手を止めて胸元の開いた服から一枚の写真を取り出した。

そこにはISを発表する前の若き頃の東と5人と1匹の星を超えた友人が白騎士の前に並んで写っていた。

「はあくあれから十年か〜。 いくくんやちーちゃん、箒ちゃんには住みにくい世界にしちやつたな〜」

東は昔から仲の良かった友人やその弟・・・そして、自分の妹にとって居心地が悪い世界に作り変えた事に罪悪感を感じてしまっていた。

自らと彼らで作ったISの性能の素晴らしさを実証する為に起こした『白騎士事件』

望まぬ形で進んだISの兵器開発競争・・・その各国のISの兵器としての強さを決める場になったIS世界大会『モンド・グロツソ』

その『モンド・グロツソ』の第一回で優勝したが為に第二回で弟である『織斑 一夏』を誘拐された東の友人『織斑 千冬』

自分がISを発表したが為に政府の重要人物保護プログラムで各地を転々とさせられた上に自分が 失踪した事で執拗な監視と聴取を繰り返された妹の『篠ノ之 箒』

妹である箒が執拗な監視や聴取にあっていると知った時は自らの手で関係者に血を見せた。

だが、東にとっては身内と認識した人物と彼ら以外は道端に落ちている石ころと変わりないので殺した事を後悔しなかった。

そして、最も東が気に食わなかったのが『ISを男に使わせたら本来の制作意図とは違う意図でしか使われない』と思ひ『女性だけがISを使える』という設定にしたことで生まれた『女尊男卑』の風潮

他の人間はどうでもいいのだが『織斑 一夏』がその風潮の所為で苦勞してるかもしれないと思うと少しばかり胸が傷んだこともあった。

それでも東は発明家の性なのかこうして新しい理論を基に先程の1機以外に白騎士とは違う白き装甲を持ったISの調整もしていた。

そして・・・作業を繰り返して続けてその日は夜になったがそれでもISを作る腕はとめてなかった。

すると、昔・・・彼らと出会った頃と同じく遠くから土を踏む音が聞こえてきた。

彼らが来たのかと思ひ心が踊る東だったが足音が止まり聞こえてきた声に失望した。

『東博士、貴方は既に包围されています。どうか我々にご同行をお願いします』

そう言う道端の石ころに等しい女の声に殺意を覚えながらもラボごとこの場から撤退しようとする東の耳に懐かしい声が聞こえてきた。

「まさか一発で当てるなんてな・・・まあ、この場所は俺達にも縁があるからな」

「ですね。ここはこの世界での思い出の場所ですからね」

「懐かしいな……10年前だったか？　なあ、タイラント」

「ギャオアア」

その声は昔……自分と共に最初のIS『白騎士』を作り、そして共に空に行きその空で再会の約束をし宇宙に帰った遠い友の声だった。

「な!?!　男が三人に見た事のない獣!?!」

「お……落ち着きなさい!　所詮は男よ!　それに私達はISを装着しているのよ、負けるはずが無いわ!」

「……ですね、隊長。さて、その男達!　さつさと去りなさい!　さもなくば撃つ!」

「全く……何で大事な仕事の前に男の相手をしなくちゃいけないのかしら、腹立たしい!」

「と言う訳よ。わかったらさつさと男共は去りなさい」

遠い友の声の後に5つの石ころの音が聞こえたが束は無視して考えていた。

(さつき『タイラント』って……まさか本当にベージュ君達!)

そんな事を考えてる間にまた声が聞こえてきた。その声は石ころの声と遠い友の声だった。

「俺様もお前らに用は無い．．．消えろ、俺はその後ろの扉の奥にある束に用がある」  
「貴様．．．構わん！ 全員、発砲を許可する！ 眼前の男共と獣を排除しろ！」

「了解」

そう言うのと銃の発砲音が幾重にも重なって聞こえてきたが束は心配をしておかなかった。  
聞こえてくる発砲音は普通の人間や動物なら簡単に絶命する音だ．．．そう、普通の人間や動物なら．．．

「な．．．何!? 銃弾を獣が．．．腹部で吸い込んで食べている!?!」

「よくやった、タイラント。ご苦労」

「ギョオアアアアア！」

「さてと．．．私達に銃を向けたと言う事は覚悟はしてるんでしょね？」

「う．．．腕からブレード!? まさかIS!?!」

「そんなわけは無いわ！ ISは女しか使えない筈．．．各自、『葵』で攻撃！」

「了解」

どうやら銃からブレードに切り替え攻撃するつもりだろう。束は会話から石ころ達  
が使用しているISは『打鉄』という事を理解した後には作業に戻った。

最初に考えた撤退計画も最早頭から消えていた。

そして……しばらくして外の喧騒が止んだ後に入口の扉が開いた。

「動くな……首から上が床に落ちると思え……」

「その通りです……我々と共に来てもらいましうか、東博士」

そんな声と共に足音が近づいてくるが東は作業を止めなかった……そして、遠い友の名を口にしながら振り向いた。

「久しぶりだね、ベークンにスークン」

「チツ……バレてたのか」

「お久しぶりですね、東博士」

「グオオオ……」

「よっ！こいつも『10年ぶりだな』だってよ。久しぶり、東」

「うむ、久しぶりだな」

「ギヤオオオオ」

「グツくんにデーくん、ヴィーくんやターくんも久しぶりだね、その二足歩行の蛸みたいなのは？」

「蛸!?!……私はヒツポリト星人『地獄のジャタール』だ！」

「ふうん、この蛸ってベーくんの部下なの？ 前はいなかったよね？」

「まあ・・・そいつはこいつらとは別行動だったからあの時にいなかったただけであつて一応、俺の部下だ」

「そうなんだ。よろしくねジャーくん」

一通り再会を喜んだり、あの時いなかった部下を紹介した後に皆は一つの机に座つた。

「つたく、さっきの女共はなんなんだ・・・腹立たしい」

「あゝ・・・あれは大体、この束さんの所為かな」

「「は？」」「「グオ？」」「ギヤオ？」

ベリアルルの愚痴を聞いて口を開いた束からの一言で束以外の全員が間抜けな声を上げた。

「いやゝあの後には『ISは女性にしか扱えない』って事にしたら箒ちゃんとかちちゃん以外の石ころが調子に乗っちゃって」

「で、さっきの様なクソアマが出てくるようになったって事か？」

「そのとおり！ いくくんには悪い事したな」

「なら、束博士は悪くないですよ・・・白騎士事件を起こしたのだけは悪くないとは言えませんが」

「ふえ!? 何でスーくんが知ってるの!?!」

次は束が誰にもバレてない筈の『白騎士事件』の事を言われて素っ頓狂な声を上げた。簡単な話だ。誰かの発明で事件が起きたら大体はその製作者がその性能を世に見

せつける為だ。でもって、束以外の俺達は行動を共にしている・・・つまりはそういうことだ」

「ベークンも!?!・・・て事は・・・」

そう言いながら皆を見ると全員が知っていると意味で首を縦に振った。

「ふえええ!? 皆、知ってるの!?! 何で!?! 私聞いてない!」

「・・・うるせえぞ、束」

「痛い痛い! 頭を持って宙に浮かせる事が出来るのって『ちーちゃん』だけだと思っただのに」

その場にいた全員が真相を知っている事に混乱して騒ぎ始めた束はベリアル線の琴線に触れたのか頭を掴まれて宙に浮いていた。

「その『ちーちゃん』って誰か知らねえが多分『白騎士』の二代目パイロットだろ」

「おう、ベークンって頭の回転速いね・・・で、そろそろ離してよく頭から聞こえちゃいけない音がするから」

「・・・ちっ、わーっつたよ」

そう言うのとベリアルは束を持っていた手を緩めた。束も普通に着地して頭を押さえつけた。

「うゝ．．．ズキズキするゝ」

「はあ．．．お前が煩いのが悪いんだろが。はあ．．．頭が痛えぜ」

「陛下、そろそろ本題に入りませんか？」

「あゝ．．．そうだったな。束、10年前の俺達との約束．．．覚えているか？」

「もつちろん！ ISに乗りたいたんだよね」

「でも、ISって女にしか使えねえんじやねえか？」

「そこはこの束さんがいじれば問題ナツシングなのだよ」

そう言うと束は胸を張って「えっへん」と自慢気にしていたが特に何も起きなかった。

「で、束。俺達の乗るISは何だ？ さっきのようなクソアマの乗ってた様な奴か

？」

「お待ちください陛下！ きつとISはさっきの様にたくさんあると思われます。

このスライ、既存の機体を検索して陛下のお気に召すものをお探しいたします」

そう言いながらスライは手元にある端末で検索しようとしたら束に端末を奪われてしまった。

「束博士！ 何をするんですか！」

「まあまあ、落ち着きなつてスーくん。この束さんが君達をあんな石ころの乗るような量産機に乗せると思ふかい？」

「む？ それつてどう言う意味だ？」

「ヴィーくんも察しが悪いねえ……」

「グオ、グオゴオオ」

「『つまり、専用機』……つて、マジか!？」

「デーくんは察しがいいね。そう！つまりベーくん達には専用機を用意していたのだ」

「で、それがその後ろの奴つて事か」

「む、何でベーくんは先に言つちやうかな……まあ、いいや。さあ、ご覧あれ！」

そう言いながら束は指を鳴らしたその音に反応したかの様に束の背後が明るくライトアップされ彼らの専用機になる5機もISの姿が見えた

その5機のISは現行の第2・第3世代機とは異なり全身装甲《フルスキン》タイプの機体でそれぞれ容姿が違った。

黒き装甲の所々にガーネットの線が入ったIS。右が大きな鎌、左は巨大な鉄球を持ち他のISとは違い獣の様な印象を持つIS。銀の装甲に青い線の入ったIS。

全身が淡く青みのあるパウダーブルーのIS。左腕部が右手と異なり肥大化したIS。

そのISを見ながらベリアル達が関心の声を上げ、地球人の姿をして機体を見ていると束が説明を始めた。

「この5機はベークン達の元の姿を参考にしてみました。でも、ヴィークンの機体だけはターくんを参考にしたいけどいいかな？」

「いや、むしろこっちの方がいい。感謝するぞ、束」

「いやいや、こっちも作るのが楽しかったから問題無いのだ」

そう言ってお手製のウサ耳カチューシャをパタパタさせてる時に自分の姿を基にしたであろう黒いISを触りながらベリアルは口を開いた。

「ところで、こいつらは動くのか？」

「残念ながら、今のところは動かないんだよね」

「・・・駄目じゃねえか」

そう言いながらベリアルはISの胸部に手を当てると急にISが光り出しベリアルの頭に膨大な情報が流れてきた。

「グッ・・・頭が・・・」

「陛下!?! どうなされました!?!」

「「陛下!?!」「ゴオ!?!」「ギャオ!」

「ベーク君!?! 大丈夫!?!」

その場にいた全員が驚きの声をあげ不安がる中、ベリアル頭の頭に流れてきている膨大な情報が処理され始めてきた。

(操縦方法、性能、特性、現在の装備、可能な活動限界時間、アーマー残量、出力限界：なる程、俺様の機体のスペックというわけか・・・おもしろえ)

そして、光が収束を始めた中でベリアルは一つの声を聞いた。

『「これから、一生貴方様に尽くします・・・よろしくお願ひします、マスター」  
その声を聞いた後に光は完全に消え去り頭痛も完全に収まっていた。

「陛下!?!」無事ですか!」

「ああ、大丈夫だスライ。心配かけたな」

そう言いながらベリアルは右腕に違和感を感じ腕を見てみた・・・そこにあつたのは黒とガーネットの2色が綺麗な一つバングルが腕にあり真ん中にはベリアルのウルトラサインが赤紫で刻印されていた。

「東・・・これって」

「どうやら、ベークくんが触った事で起動したようだね。コアまで落とすなんてやるね」

「最後のは聞かなかった事にしてやる・・・おい、お前らもISの胸部に手をかざしてみろ」

「「ハッ!」」「ゴオ!」

ベリアルルの命令でジャタールとタイラント以外の全員が専用機になるであろうISの胸部に手をかざした。

「うつ・・・なる程、先程の陛下の苦しみの理由はこれでしたか」

「ケエー! 頭がいてえー!」

「グ、ゴオオオオー!」

「ぬうん、これくらい・・・うつ」

四人が先程のベリアルルと同じ状況になっているのをタイラント、ジャタール、ベリアルル、東が見ている時にベリアルルは先程聞こえた声について尋ねていた。

「・・・と言う訳だ。 東、何か知らねえか?」

「うくん、東さんには聞こえないからなく。よくわかんないんだよ〜ごめんねベ〜くん」

「・・・まあ、その内わかるか」

そうして会話を済ませたと同時くらいに4人の方も光が収まりそれぞれアクセサリーをつけていた。

スライの銀に青い線の入った腕時計、ヴィラニアスのは大きくTと刻印されたパスケースの様な物、グロツケンのはパウダーブルーカラーのベルトのバックル、デスローグのは赤黒いカラーのメモリの様な物でスイッチがあり真ん中には何か書かれるのであろうが今は何も書かれておらずスイッチを押しても何も起こらなかった。

つまり、それぞれのISの待機状態になっていたを彼らは理解した。

「へー……そんな待機状態は東さんも見たことないよ〜」

「まあ、俺達自体が特殊だから……それも作用してんじやねえのか?」

「……東博士、私達の機体の事を知りたいので少しここにある物をお借りしていいでしょうか?」

「OK、OK! スーくんや皆ならここにあるのは使ってもいいよ〜」

「ありがとうございます、東博士。では早速……」

そう言うとスライは自分のISの待機状態である腕時計に無数のコードをつけた後に解析を始めた

「……機体性能は第2、第3世代とは異なってますね。武装は……右腕部から展開されるブレードでしかも光弾も発射可能ですか、私のこの鎧とほぼ同じですね。次は……」

そう言いながら解析をしていくスライはある項目で目を止めた

「名前……『NO NAME』。東博士、もしかして私達の機体って」

「スークんの考えてる通りで名前はつけてないよ。スークんたちが名付けるんだよ」

東の一言で専用機を手に入れた5人は名前を考え始めた……最初に思いついたのはペリアルだった。

「決めたぜ、俺の機体の名は『リベリオン』だ。故郷に反逆した俺様が持つ機体に相応しい名だ」

「なら、私のこの機体は『メフィストフェレス』。この星のギリシア語と言う言語で『光を愛せざるもの』と言う意味です。我々は陛下の闇に魅せられた者、光など愛する気はありません」

「吾輩はこの機体とタイラントが似ているからそのまま『タイラント』と名付けよう  
「ゴオオオ」

「へえ、『ジェノア』って名前にすんのか。俺は頭を使って考えるのは嫌いだからな、今思い浮かんだ『グレイザー』にするぜ」

そう言つて全員の機体の名前が決まった時にデスローグの持っている『ジェノア』の待機状態であるメモリに燃え盛るような赤黒い字でJが刻まれスイッチを押すと『J enoa』と鳴った。

「おお、束さんでも思いつかなかったネーミング。やっぱり皆はすごいな」

「さてと、こいつの起動がてら国を一つ二つ程度支配でもしてくるかな」

そう言いながら体をボキボキと鳴らすベリアルに束が口をはさんだ

「あ、ベークン。その事なだけどベークン達には『IS学園』に行ってもらおうかな」

「は? 『IS学園』?・・・何で俺達が学園に行くんだよ」

「それはね、束さんが作ったコアを芯にして世界中がISを作ってるって事は説明したよね?」

「・・・なる程、そういうことですか」

「スライ、どういう事だ」

「陛下、先程検索したのですが『IS学園』は日本にありながらどこの国にも属さない超治外法権区。つまり、IS学園には各国の最新機がテストとしてその国の代表候補生と共に入ってきます。ですから、入る事によって現時点での最新機の機体性能の把握が可能で後々に戦うかも知れない相手の情報を収集できます」

「スライよお。それなら別に入る事ねえんじゃねえか?」

「グロツケンの言う事も正しいですが逆に入ることでのメリットもありますよ」

「メリット? どういう事だ、吾輩には全然わからんぞ」

「メリットは分かつてるだけでも二つあります。一つはパイロットと機体の成長を間近で見ることによって対策を幾重にも張り巡らせる事が出来ると言うメリット。

もう一つは後々開発する後付け装備の実験が出来ると言うメリットです」

「ほく、スーくんはスゴイね。考えてた事以上の事を考えてるとはねく」

スライの説明を聞いた全員はお茶を飲んで一呼吸ついでから口を開いた。

「まあ、スライのおかげで分かったけど全員行くと違和感の所為で怪しまれねえか？」

「それに関してはだいじょうブイ、ちーちゃんが生をやってるから教えておいたら多分、模擬試合試験だけで行けるし最初にベークんとスーくん、その後はグツくんとデーくん、最後にヴィーくんの順で転入生って事で入ればまるつとOKなのだ」

「なる程・・・しかし、全員が男だとある意味で注目を浴びて動きにくいのでは？」

「そこはねく、皆で相談して男二人と女三人になつてもらおうかな」

束の爆弾級の一言で周囲が沈黙に包まれた・・・そして、最初に口を開いたのはグロツケンだった。

「はあ！俺達の中で三人が女になれつてか!？」

「んく？もしかして出来ないの？」

「いや、出来るけど「ゴオオオオ！」あ、やべっ」

「じゃあ、お願い！流石に男が五人だとベークん達の正体がバレかねないしバレた

ら大変だよ」

「・・・お前ら、ジャンケンで負けた三人が女な。 覚悟はいいか？ 俺は出来たぜ」

「「陛下!?」「」「ゴオオオ!」

「やるぞ・・・最初はグー・・・ジャン・ケン」

「え、ちよつ!」「待つてください陛下!」「ええい、こうなったらヤケだ!」「ゴオオオ  
!」

その後もワーギャー騒ぎながらもジャンケンは続いた。

結果は・・・

「くうく! あそこでチョキサえ出しとけばあいこで・・・」

「ゴオオオ・・・」

「ぬううう・・・」

「危なかった・・・二抜けでなんとかなりましたか」

「お前ら・・・お疲れ」

男で入るのはスライ、ベリアルの二人。

逆に女で入るのはグロツケン、デスローグ、ヴィラニアスの三人だった。

「さーと、準備は万端。 一応、皆にはこれから1週間でISの知識とISでの戦い  
方を覚えてもらいます。 あ、名前は適当に考えておいてね」

「つて事は俺とスライが入るのは1週間後か」

「まあ、私なら3日でなんとかなりますね」

「俺とデスローグ、それとヴィラニアスは擬態の練習もあるのか・・・はあく」

「ゴオオオ・・・」

「ぬうう・・・決まった事とは言え抵抗があるな」

「まあまあ、いいからいいから」

そう言つて束はISを独断・・・この場合は産みの親の視点からと言うべきであろう。

世間に毒づきながらISの説明を始めていった・・・

（しかし、学園生活か・・・あの頃はひたすら警備隊に入りたい思いで努力していたから何か新鮮だな）

ベリアルは束の説明を聞きながら初めて体験するであろう学園生活を思い浮かべて微笑かに笑っていた。

## 第二話 午後からの転入&買った喧嘩

「・・・はあー」

IS学園の昼下がり

『織斑 一夏』は項垂れていた。

《世界で唯一ISを使える男性》と言う事で半ば強制的に入学する事になったIS学園は彼にとって非常に居心地が悪かった。

『世界で唯一ISを使える男性』という事は必然的に学園の生徒は女性ばかりである。彼の親友である『五反田 弾』いわく「羨ましい」らしいが現実はちつともそうでなかった。

《世界で唯一ISを使える男性》という事で入った彼は学園中の生徒の注目の的であるが為に、時には遠目から見つめられ、またある時は質問攻めにされた。

そして、自己紹介の時にその内容の薄さ故に姉であり担任である『織斑 千冬』から鉄拳を受け、『千冬ねえ』と呼んだ時も鉄拳を喰らい2回目にそう呼んだ時は机に叩きつけられ内外共にポロポロだった。

唯一喜んだのは6年振りに幼馴染である『篠ノ之 箒』再開したくらいだろう。

「オレノカダダハボドボドダー」

机にうつぶせになりながら疲れて回らない呂律でボヤいていたがそんな事で変わる事もなく昼休みの終了を告げるチャイムが虚しく耳に聞こえてきた。

そして、I S 学園の午後の授業の始まりを告げるチャイムと共に副担任である『山田真耶』と担任の『織斑 千冬』が入ってきた。

「はーい、皆さん。 午後の授業に入る前に転入生を紹介しまーす」

副担任の『山田 真耶』がそう言うのと教室がざわざわと騒ぎ始めたのを聞きながら『織斑 一夏』は考えていた。

(初日なのに転入生？ 普通は転校生か遅刻じゃないか・・・あ、それは無いか)

「うるさいぞ小娘共、初日からグラウンドを走りたいのか」

担任の『織斑 千冬』がそう言うのとクラスは一気に静まった。

「えーと、静かになりましたね。 それでは二人とも入っていいですよー」

山田先生の一言で教室のドアが開いて二人の生徒が入ってきた。

その瞬間、クラスは少しざわついた・・・それもそのはず、何故なら・・・

「俺と同じ・・・男・・・」

その二人の転入生は男だったのだ・・・

くスライ side く

「はい、転入生のお二人を紹介します。『メフィルク・スライ』君と『クライム・ベリア』君です。では、それぞれ自己紹介をお願いします」

「メフィルク・スライと申します。私のことは気軽に『スライ』と呼んでください。皆様、これからよろしくお願いします」

「クライム・ベリアだ。最初に言っておくが俺は女だろうが容赦はしねえ」

「陛下、もう少し言葉を足さないと周囲に誤解を生むだけです」

「・・・チツ。とりあえず、煩いのと女尊男卑に染まった女は嫌いだし容赦はしねえ。まあ、よろしく」

私と陛下はそれぞれ偽名での自己紹介を終えました・・・陛下？ 何故に耳を塞ぐの  
でしようか？

え？ 『直ぐにわかる』・・・はあ。

「きやー！ 男子！ それも織斑くんとは違うタイプの子！」

「俺様系と執事系！ どちらもいい！」

「しかも、さつきベリア君の事を『陛下』って！」

「よし！ 今度の新刊のネタは「ベリ×スラ」よ！ 次の休み時間に連絡しておい  
！」

なる程、こういう事でしたか・・・耳を塞いでなければどうなった事か・・・それにしても耳を塞いでいてもこれ程とは。

あと、新刊つてまさか・・・いや、ここは考えないでおきましょう。

「やかましいぞ、静かにせんか小娘共！」

「うるせえぞお前ら！ 少し静かにしやがれ！」

陛下と先程の試験監督の女性が同じタイミングでキレてますね・・・しかし、彼女が『ブリュンヒルデ』の『織斑 千冬』ですか・・・東博士に見せて貰った写真の人そのものですね。

私達も試験試合で勝利したもののまさか機体に傷を付けられるとは・・・

「「「「はいー」」」」

それにしてもこの二人の一喝で教室が静かになるとは・・・やはりあの人にも陛下に匹敵するカリスマ性があるのでしょうか

「それでは、スライ君とベリア君は席についてください。お二人の席は後ろの窓際にある二つです」

「わかりました、先生」

「わーっ たよ」

私と陛下はそれぞれ返事を返し席に着きました。

「それでは、授業を始めます。テキストの8ページを開いてください」  
さてと、授業が始まりましたね。このあたりは既に束博士から教えてもらっていて聞かなくてもいいのですが一応授業ですからしっかり聞いておくと思いますか・・・陛下、せめて教科書くらいは開いておいてください。

「では、ここまでで質問のある人はいませんか？」

なる程、ここで質問の時間を取りましたか。でも、ここまでの授業の内容は既に予習済み。周りを見ても入る為に勉強したのでしよう誰も手を挙げて・・・ますね。

あれは・・・確か束博士の言っていた『織斑 一夏』でしたね。

「はい、織斑くん」

「ほとんど全部わかりません」

おっと、前後のやりとりは聞いてませんがまさかほぼ全部わからないとは・・・大丈夫なのでしょうか・・・

「ベリア君とスライ君は大丈夫ですか？」

「ええ、私は既に予習済みなので特に問題はありません」

「その馬鹿と違って覚えるべき知識は全て入れてきた」

やはり同じ男性ですから確認の為に聞いてきましたか・・・それにしても陛下、もう

少しオブラートに言ったほうがいいのでは

「ほう。ならばベリア、初期化から最適化までにかかるおおよその時間は「30分」・・・正解だ。しかし、テキストを開いていないのはどういうことだ」

やっぱりそこに突っ込んで来ますか・・・陛下、少しは普通にしてください。

「一応持つてきてはいるが、ここまで・・・と言うかほぼ全ての知識は入る事になる時に覚えたからな出す気が起きねえだけだ」

「ほう・・・ならば今から免除された筆記の試験でもやるか？ と、言っても一教科だけだが」

「やるなら持つてきな、この時間に終わらせてやるぜ」

あ、織斑先生が教室を出て行ってしまいましたか・・・あ、戻ってきましたね。

あの紙は筆記試験の問題でしょうね・・・陛下、少しは自重してください。

「織斑、入学前の参考書は読んだか」

あ、そう言えばこうなったのは彼の所為でしたね。確かあれは必読でしたね・・・私も陛下も軽く読んであの三人に渡しましたね。

「えっ・・・あ。あの分厚いやつですか？」

「そうだ。必読と書いてあっただろう」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

馬鹿ですね・・・で、陛下はどうしているのでしょうか。もう三分の一は終わって  
ますね、流石陛下！

と言うか実の弟を出席簿で殴るとは・・・見た目の通りで少し怖い人なんでしょうか  
？

「後で再発行してやるから一週間で覚える。いいな」

「いや、一週間であの厚さはちよつと『やれ』と言っている・・・はい、やります」  
「では、授業を再開します。テキストの12ページを開いてください」

さてと、再開したからには聞いておきますか・・・

くスライ side ENDく

くベリア sideく

フンツ、やつと休み時間かさつきは余計な事をした所為で面倒な事をしちまった  
な・・・まあ、あれくらい楽勝だったがな。

さてと、織斑に接触でもしとくかこの学園で野郎が三人だけなのは流石に堪えるだろ  
うからな。

スライは・・・

「スライくん。 さつき、ベリア君を『陛下』って読んでたよね。 どんな関係なの？」

「ねえねえ、スライ君は中学の時ってどこに住んでたの？」

「何時、ISを動かしたの？」

「スライ君って受け？それとも攻め？」

女子に質問攻めにされてる・・・一人変な奴がいたな。まあいい一人で行くか。

「スライ、あんまり余計な事は喋るなよ」

「ハッ！ 分かっております、陛下」

「ハア・・・まあ、いいか。」

とりあえず織斑の席にでも行つて声をかけるか

「はあー・・・」

「おい、織斑」

「ん？ 何か用か、えーと・・・」

『クライム・ベリア』だ。『ベリア』でいい。何も緊張するな、ただの挨拶だから

な、この学園は俺とスライとお前ぐらいしか男がいねえからな・・・よろしくな」

「ああ、よろしくなベリア。俺は『織斑 一夏』。『一夏』って呼んでくれ」

「・・・だが、断る」

「えー何でだよ。自分の名前は名前呼びにしといてそりやないだろ」

「俺は親しい奴ぐらいしか名前と呼ぶ気がねえからな。織斑でいいだろ？」

「まあ、それならしようがないな。 とりあえず、よろしくな」

「ああ、よろしくな」

とりあえず握手もしたし挨拶はこれくらいでいいだろう。・・何か新鮮だな、こういうのは

「ちよつとよろしくて」

「ああ?」「んあ?」

「まあ、何ですのそのお返事。 私に声をかけられるだけでも光栄なのですから、それ相應の態度というものがあるのではないかしら」

「悪いな。 俺、君が誰だか知らないんし」

「俺も午後から来たからお前らの自己紹介は聞いてねえから知らねえんだよ」  
とりあえず名前がわかるまでは・・カルテットコロネでいいな。 コロネみたいな

髪型してるしな。

「私を知らない!? セシリア・オルコットを!? イギリスの代表候補生にして入試主  
席のこの私を!」

「あ、質問いいか?」

この馬鹿、まさか『代表候補生って何?』とか言うんじゃねえだろうな。・・

「ふん。 下々の要求に答えるのも貴族の務めですわ。 よろしくてよ」

それにしてもこのセシリア・コロネットだっけか？　イライラさせる野郎だな．．．  
「代表候補生って何？」

言いやがったよこのアホ。　周りの子どももコケてるじゃねえか．．．スライも呆れてやがる．．．俺もだけどな。

「あ．．．あ．．．」

コロネも呆れて何も言えてねえ．．．当然だろうな。

「あ？」

「信じられませんわ！　日本の男性と言うのはこれほど知識に乏しいものなのかしら。　常識ですわよ、常識」

「で、代表候補生って？」

「国家代h y『国家代表 I S 操縦者』その候補生として選出された俗に言う所の『エリート』って奴らの事だ。　単語から想像したら分かるだろうが．．．」

「そう言われればそうだな」

「そう、エリートなのですわ。　本来なら私の様な選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡。　幸運なのよ！　その現実をもう少し理解していただけ」

「そうか。　それはラッキーだ」

「ケツ、そんなので幸運なら世も末だな」

「なんですかその態度・・・まあでも、私は優秀ですから、貴方達の様な人間にも優しくあげますわよ。わからないことがあれば・・・まあ、泣いて頼まれたら教えてあげても宜しくてよ」

・・・この金髪カルテットドリル女、俺様を見下してやがるな。　その本当の馬鹿はどうでもいいが俺様をコケにするとは・・・腹立たしい！

「何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？　俺も倒したぞ、教官」

「はあ!？」

「とは言っても突っ込んできたのを躲したら壁にぶつかって動かなくなっただけだな。　あ、ベリアはどうなんだ？」

「俺か？　俺も一応は勝ったが一撃入れられたから負けと同類だ。　ついでに言えば

スライも勝っているぜ」

「呼びましたか、陛下？」

「ん、ようやく解放されたのか？」

「まあ、そんなところです」

「わ・・・私だけと聞きましたが・・・」

「『女子だけでは』ってオチじゃないのか？」

「ま……まあ、貴方達の試験官が無能だったことですw「ほう、オルコット。この私を無能扱いとはいいい度胸だな」……織斑先生!」

「ち、千冬ねえ!?! あだつ!」

「織斑先生だ。オルコット、その二人の試験官は私だ。その私が無能だというならお前はもちろんその二人より早く私を倒せるのだろうな?」

「えーと……それは……」

フン、返答に困ってるようだな。実際は俺の手でシメようと思ってたがこれはちよ  
うど良い……? キーンコーンカーンコーンノ

チツ、授業開始の合図か

「……まあいい、授業を始める。各自、席につけ」

つたく、あと少しだったのによ。あ、『少し自重してください』だと? あの金髪カ  
ルテツトドリルから突つかかって来たんだ。俺は知らん。

「さて、授業を始める前にクラス代表を決めておこうと思う自薦他薦は問わない、誰か  
いるか?」

クラス代表……まあ、クラス長みたいなもんだろ。俺はメンドクセえからパスし  
たいがこのパターンだと物珍しきで俺様とスライ、それに織斑の誰かだろうな。

「はい、織斑くんを推薦します。」

「私もそれがいいと思います」

ほら、早速予想通りだ。

「え、俺？」

「他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「じゃあ、私はスライくんで」

「私はベリア様で」

やっぱり俺たち三人か・・・って、待て！ 誰だ！ 『ベリア様』って言った奴は!?!

「なら、三人から一人えr」納得がいきませんわ!」

・・・金ドリイイ!! またお前かああああ!!

「そのような選出認められませんわ。男がクラス代表なんていい恥晒しですわ。このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか？ 大体、文化としても後進的な国に暮らさないといけない事自体、私にとっては耐え難い苦痛で・・・」

この金ドリ、少しは頭を使ったらどうなんだ？

後進的とは言ったがそんな国からISをもらっているのが現実だ。

それに大方が日本人のこの学園でそんな事を言えば孤立するのは目に見えている筈だ・・・ドリルに知識でもとられてんのか？

「イギリスも対したお国自慢無いだろ。世界一マズイ料理で何年覇者だよ」

「美味しい物もたくさんありますわ！ 貴方、私の祖国を侮辱してますの！」

「どっちもどっちだろう・・・くだらねえ」

「なんですつて！」「何だと！」

「陛下！ 少しは抑えてください」

「うるせえ、少し黙ってろスライ。大体、先に他人の祖国を侮辱したのはテメエだ、

金髪ドリル。 それに乗った織斑も大概だがな」

「な、なんですつて！ 私のどこがドリルですつて！」

「ベリア、お前どっちの味方だよ！」

「どっちの味方でもねえ、大体お前らは自分の立場は分かってんのか？ それと金髪

ドリルはISの知識も乏しいらしいな。 スライ、説明してみな」

「ハッ、かしこまりました。 まずはオルコットさん、ISは誰が開発したのですか

？」

「それは『篠ノ之 東』博士ですわ。 これくらい常しき・・・」

「どうやら気づいた様ですね。 そう、東博士は日本出身。 貴方が後進的で暮らす

のも苦痛と言ったこの日本ですよ。 そんな日本の女性が作ったISに乗っているの

によくそんな事が言えますね」

「・・・」

フン、金髪ドリルは何も言えなくなつたか。ただの弱者が

「正論すぎてぐうの音も出ませんか。次は織斑さんの番・・・いえ、オルコツトさんも関係ありますね」

「え、俺も何かあるのか?」

「当たり前です。大体、男でISを使える数少ない人材なのですよ。そんな貴方がする発言は日本の男性、ひいては世界中の男性の言葉とも取られる可能性があるのです。これは代表候補生も同じ事が言えるでしょう」

「まあ、そういう事だ。スライ、ご苦労」

「いえ、陛下のお手を煩わせるわけにはいきません」

「まあ、織斑もこれからは気をつけな。そうでもしないと後ろからバツサリいかれるぜ」

「そんな物騒なこと言うなよ。まあ、確かに少し言いきすぎたな。ごめんな、オルコツト」

「・・・け・・・」

「「け?」」

「決闘ですわ!」

「はあ!？」

「金ドリ・・・お前は馬鹿か？　馬鹿なのか？　馬鹿なんだな？」

「はあ・・・少しは落ち着いたらどうですか、オルコットさん」

「馬鹿馬鹿うるさいですわ！　先程言いましたがそれほど強くなさそうなIS操縦者が男と言うだけでクラス代表になるといいうのが可笑しいと言ったのですわ！　仮になつたとしてクラス対抗戦ですぐに負けてしまわれたら学園のいい笑いものですわ」

金ドリ・・・この俺を仮にも弱い奴と決めつけやがったな。確かにゼロの野郎には負けたけどよ・・・

「と言う事で決闘ですわ！」

「ああ、いいぜ。　四の五の言うより分かりやすい」

織斑、お前もか・・・全く、頭がいてえ

「で、貴方はどうしますの？」

「俺に振るな。　興味もないしやる気もねえ」

「私もです。　時間の無駄ですからね」

「そんな事言つて、お二人とも私に負けるのが怖いのでは」

よし、こいつは俺の手でぶつ潰す！

「誰がテメエみたいな金髪ドリルに負けるだど！　いいぜ！　その喧嘩、俺も買った

「！」

「言っておきますがわざと負けたりしたら私の小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」  
「ああ、いいぜ。 奴隷にでも何にでもなつてやるぜ。 なんならスライと一緒に新刊とやらのモデルになつてやつてもいいし、それでも収まらないなら在学中はこの学園全員の執事でも何でもやつてやるぜ」

「へ、陛下!?!」

「フン、貴方も大変ですわね。 こんなポンコツの主人に忠誠を誓っているなんて」

「なる程、私のみならず陛下まで侮辱するとは……その高慢な態度を貴方の I S 共々打ち砕いてあげますよ」

「フン、まるで忠犬ですわね。 まあ、貴方達が勝つても何も無いというのもおかしい話ですわね。 もし、私に勝てたら機体のデータを差し上げてでも宜しくてよ」

「嘘じゃねえだろうな」

「ええ、祖国に誓つて嘘ではありませんわ」

これでコイツの機体データが入るのはほぼ確定だな……アイツの機能にまた一つデータが貯まるぜ。

「よし、金髪ドリル……絶対ぶちのめす！」

「織斑先生、よろしいですよね」

「そうだな、スライ。それなら勝負は次の月曜、第三アリーナで行う。織斑にオルコット、それにベリアにスライはそれぞれ準備をしておく様に。異論はないな？」

「勿論、ありません」

「ええ、ありませんわ」

「全くの無問題だ」

「陛下と同じく、問題ありません」

来週の月曜か・・・どうやっていたぶってやろうか今から楽しみだぜ。

「ククク・・・クフフフ・・・」

「ベリア君・・・顔が怖いよ」

「そうか。すまないな」

おっと、顔に出てたか。気を付けねえとな

「さて、授業を再k? キーンコーンカーンコーン／・・・はあ、今日の授業はこれで終わりだ」

ブリュンヒルデ・・・今回ばかりは同情するぜ。原因の一部は俺にもあるけどな。

「スライ、戻るぞ」

「ハッ。かしこまりました」

さてと、来週の月曜は金ドリの絶望に歪んだ顔が拝めるだろうな・・・フフフ・・・

「フ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ!!」

### 第三話？ 『二人の初ゲーセンと三人の女体化練習』

セシリア・オルコットとの決闘騒ぎから数時間後

ベリアルはベリアの姿でスライもメフィールークの姿で街に出ていた。

ちなみにIS学園は全寮制なのだが転入が急な事で部屋が用意できなかったらしい。

「はあ、初日から濃すぎるだろ・・・頭がいてえ」

「私もあれ程とは思いませんでしたよ・・・濃すぎます」

二人はボヤきながら大型シヨツピングモール『レゾナンス』を散策していた。

一応、IS学園の生徒とバレて騒がれるのが面倒なので二人とも着替えていた。

ベリアは黒いジーパンとワインレッドのシャツの上から前を開けた黒いレザージャケットというファツション。

スライは至つてシンブルな黒のフォーマルスーツを着ていた。

二人が並ぶとそれぞれ違う雰囲気か漂っていたがその雰囲気はどちらも男女問わず振り向くほどであった。

ベリアからは荒々しくありながらも何処か気品漂う妖しい色気を感じさせ、何処かの世界の金髪の吸血鬼を連想させるかのようなまさにカリスマ的な雰囲気。

逆にスライからは常に主の為に命を張る執事の様な滅私奉公さと騒ぎもせずただ静かに平穩に暮らしたいと思わせる静かな雰囲気をつけていた。

「それにしてもあの金髪。この俺を弱いと決めつけやがって……絶対にぶちのめす。精神的にも肉体的にも苦痛を与えて絶望に顔を歪ませてやる」

「陛下、少し落ち着いてはいかがですか。丁度、ゲームセンターもあるので気晴らしでも」

そう言うときスライは目の前にあるゲームセンターを指さした。

「……それもそうだな。スライ、少し遊んでいくぞ」

「かしこまりました、陛下」

そう言うとき二人はゲーセンに入ってしまった。

ちなみに持ち合わせはベリアが1万円とスライが5000円である。

スライは普通に束の了解をもらって少しおろしたお金だがベリアのお金はレゾナンズに少し苛つきながらも行く途中に突っかかって来たチンピラをシメた時に入ってきたちよつとした臨時収入である。

ちなみにそのチンピラは少し苛つきが残るベリアにカツアゲをしに行ったものの苛つくベリアに返り討ちに会い、さらには空中で50を超える拳を打ち込まれた拳句に金を差し出してその場に倒れたのであった……今は絶賛入院中である。

「さてと・・・狩りの時間だ」

そう呟くベリアアはスライと共にゲーセンに入っただけだった。

「場所は変わって束のラボ 『吾輩は猫である 《名前はまだ無い》』」

「あくすつげえ暇だ」

「・・・」

「ぬう・・・この姿はやはり・・・」

「だよなあ・・・あー肩が凝るぜ」

「・・・」

「ギニャ!!? デスローグ痛い! もげる!」

「おゝエロいね。 エロだねえ」

「ここでは4人の美女が戯れていた?」

「一人は言わずと知れた『篠ノ之 束』本人である。」

他の三人は見たことが無い美女ばかりである。

「束! ヘルプ! ヘルプミー!」

一人はパウダーブルーカラーの長髪を持ち束に引けをとらない胸を持った美女

「・・・」

『デスローグ』と言われたのは美女の胸を驚掴みにしてギリギリと力をこめている背は小さめで胸は無に等しい程のまな板で銀髪の無口な美女

「えゝ私もグツク・・・いや、グーちゃんの体を楽しもうかなゝって」

「手つきが完全に・・・ヴィラニアス! 助けてくれ!」

そして、手つきが完全にアウトな束に迫られる中でパウダーブルーカラーの髪を持つ『グーちゃん』といわれた女性は今もう一人の女性である『ヴィラニアス』に助けを求めた。『ヴィラニアス』と呼ばれたその女性は濃紺の着物を纏い肩まで伸びた黒い髪を靡かせていた:胸は大きくも無く小さくも無かった。その姿は正に大和撫子であった。

「さて、タイラント。我輩達は散歩に行くか」

「ギャオオオゝゝ」

「ええええええ!!? ちよつ! マジでヘルプ! ヘルプー!」

しかし、『ヴィラニアス』は横にいた『タイラント』に声をかけて共に外に出て行つて

しまった。

「さあ、グーちゃん。逃げられないよ〜♪」

「ちよつと待った！ ジャーナルはどこ行った！」

「あ、ジャー君なら練習の時に『さてと、私は邪魔にならないように出かけてきますか』って出て行ったよ」

「あのタコ〜！ 何でこういう時に氣い使つてんだー！」

「さーて、デーちゃん！ 二人でいっくよ〜♪」

「・・・」

「え、ちよつと待って…まさかそれを…嘘だよな？ デスローグも手つきがイヤラシイし、と言うか何で笑顔なんだよ!? 待ってくれ！ 束、何所につけてんだよ！ え？ ちよつとまつて「スイッチ・オン♪」…ギニャアアア!!」

ベリアとスライがゲーセンで遊んでいる中で、何所にあるか分からない束のラボで美女の悲鳴が響いていた。

そして、ゲーセンで遊んでるベリアとスライはと言うと

「フン、あつけねえな」

「またハイスコアですか。流石、陛下でございます」

ゲーセンにあるシューティングゲームでハイスコアを出していた。

ちなみに難易度は最高難易度でコンティニューはしてないどころかノーダメージである。

何時の間にか出来ていたギャラリも拍手をしていた。

「すげえ…あれって確か《NIGHTMARE》だろ? マジかよ…」

「しかも『TRIGGER』を超えてるぜ…初めて見たぜ」

そんな会話を聞き流しながら陛下とベリアは会話していた。

「次はお前も何かやったらどうだ?」

「そうですね…ならば、先程見かけた《VIOLENCE》とかかれたゲームでもしてみます」

そう言う二人は《VIOLENCE》に向かって歩き出した。

《VIOLENCE》はその名の通りバイオレンスなゲームでプレイヤーの前方から横までの180度を筐体で囲まれており、その囲んだ筐体からプレイヤーに向けてスポンジに包まれた棒がランダムに出てくるのを制限時間限界までかわし続けると言う

ゲームである。勿論、当たればそこで終了である。

《VIOLLENCE》と呼ばれるだけあつてモード毎に難易度が上がっていき現段階の最高難易度の《VIOLLENCE》は『当たれば怪我をするのは確定』と言う程にスピードが早くてまた出てくる棒も多い。

その《VIOLLENCE》をクリアしたのは僅かの人のみでその人達は《プレイヤー》『勇敢であり馬鹿な者』と呼ばれている。

その為、《VIOLLENCE》が置いてあるゲーセンは専用のエリアが作られておりその手の人からは《VIOLLENCEゾーン》と呼ばれている。

更にクリア後に出されるスコアは難易度とよけた時の重心の移動でスコアが変わるものである。

そのスコアは全国の《VIOLLENCE》にオンラインで送られ一年間のランキングにまとめられる。

その年間ランキングで1位をとる物は当然の如く『プレイヤー』のTOPでその柔軟な動きはまるで幻想の様に滑らかと言う事で『プレイヤー』達は『LUNA』と呼ばれている。

余談ではあるが《VIOLLENCE》を作った株式会社『X』が出した《VIOLENCE》を含めた5つのアーケードゲームは各ジャンルにおいても難易度トップクラス

の為、それぞれのスコアTOPにはそれぞれ別の呼び名が付けられるらしい

・回避型スリリングゲーム《VIOLENCE》は先程の通りの理由で『LUNA』  
 ・360。を筐体で囲まれる体感型バイクレーシングゲーム《MAXIMUM DRIVE》のTOPにはその臨場感溢れる速きスピード感にも消されぬ熱き魂を称えて『HEAT』

・パンチングマシン《ARMS》のTOPはその鋼の様な闘志と重き一撃を称えて『METAL』

・シューティングゲーム《NIGHTMARE》のTOPプレイヤーはその完璧な射撃と冷静さを称えて『TRIGGER』

・体感型格闘ゲーム《HELL EXPLORATION》は永久に勝ち続けるプレイヤーのバトルセンスと圧倒的な強さを称えて『ETERNAL』と呼ばれている。

その5つの称号を揃えた者は未だに居らず現段階ではそれぞれのジャンル毎にいるTOP達の服の見た目が似通ってる事からその5人は何時しか『NEVER』と呼ばれるようになった。

その理由は彼らがTOPに立ってからは一度もその座から落ちた事は無いからで『一度も落ちた事の無いメンバー』と言う意味で付けられている。

その『NEVER』達の噂は絶えず作られており「実は開発者」等と言った噂は勿論

の事、中には『実はあの5人は傭兵集団で、訓練にちょうどいいから遊んでる』と言う少し不思議な物まである。

実はパフォーマンス集団と言う事はあまり知られてない。

「しかし、お前はどの難易度に挑戦するんだ？」

「そうですねえ：陛下が最高難易度をクリアしたので私も最高難易度をクリアするとしますかね」

「そうか。まあ、楽勝だろうな」

そんなことも知らずスライは最高難易度に挑戦すると意気込み、《VIOLENCE》に向かっていった。

そんな時・・・

「「「おおおおお!!」「」」」

《VIOLENCE》の置いてある《VIOLENCEゾーン》に既に人だかりが出来ていた。

そこには一人の赤いライン入ったの黒いジャケットとズボンに身を包んだ男性がプレイしていた。

「ううううん！ 突きが足りないわね！ もっと激しく！もっと強く！」

言動は完全にオカマだったが機動力が凄く飛び出してくる棒を難なくかわしていた。

「く〜ね〜く〜ね〜く〜ね〜く〜ね〜♪ ぬ〜る〜ぬる〜ぬるぬる〜♪」

オカマは謎の歌を歌いながら難なくかわしていき最後に出てきた棒も難なくかわした。

「ほう…なかなかいい動きですね」

「お前、何言ってるんだよ。これは難易度《VIOLENCE》だけ。しかも、あのオッサンは初代『プレイヤー』であり『LUNA』。つまり、初めて《VIOLENCE》をクリアした奴で尚且つずっと一位のスゲエおっさんだぜ」

「そんなに凄いんですか?」

「そりや凄いのなんのって。もしかして、知らないのか?」

「ええ。何せこの辺りに来るのが初めてなものでして」

「しようがねえ〜なく。ここは1つ、俺が教えてやるよ」

と言う流れでスライは隣にいたバンダナを巻いた赤毛の青年から《VIOLENCE》についての簡単な説明と『プレイヤー』について、それとおまけに話してもらった『NEVER』の説明を聞いていた。

尚、この時既にペリアは自分の飲み物を買に行っており不在である。

「と言う訳だ。分かったかい?」

「ええ。しかし、話を聴くと随分と難しそうなゲームですね」

「まあ、難易度によるな。ところでどの難易度で挑戦するんだい？」

「とりあえずは《VIOLENCE》に挑戦しようかと」

「はあ!? いきなり《VIOLENCE》ウ!?」

その驚いた声に周囲のギャラリイも驚いて振り返ってスライと青年を見つめた。

「お前、マジで言ってるのか!? やったことあんのか?」

「いえ、ありませんけども」

「お前、怪我するぞ。《VIOLENCE》はやめとけって」

「いえ、こんなにもギャラリイが注目してるんです。今更下げるなんて出来ません」

「はあ・・・怪我すんなよ」

赤毛の青年が説得を諦めて心配の声をかけるとスライは「心配には及びませんよ」と言つてオカマのいる代の隣の《VIOLENCE》に向かい投入口からお金を入れた。

「あら、いい顔してるじゃない。嫌いじゃないわ」

先程のオカマが台からこちらを見ながらそういつているのを流しながらスライは難易度《VIOLENCE》を選択した。

「あら、貴方に来るかしら〜意外と難しいわよ〜」

「心配には及びませんよ。これくらいは楽勝ですから」

「あら? 初めてじゃないのかしら〜」

「ええ、初めてですよ。 さて、始まるので邪魔はしないでくださいね」

そう言うときスライは目を閉じ集中し始めた。

そして、そのまま飛び出す棒を必要最低限の動きでかわし始めた。

「「「おおおおお!!」」」

そんなスライの動きに観客は興奮しながら見ていた。

そんな中でもスライはかわし続けとうとう最後の棒もかわし終え目を開けた。

「ハイスコアですか。 意外と簡単でしたね」

表示された文字は『HI SCORE』。 つまり初プレイで『プレイヤー』になり『L

UNA』になった証である。

「良い動きだったわね〜。 嫌いじゃないわ〜」

そう言うオカマに軽く会釈をした後にスライは『VIOLENCE』を後にした。

「スライ、お前も終わったのか」

「ええ。 ところで陛下、いったい何を飲んでいるのですか?」

「これか? 確か『ユグドラ汁ソーダ プロフェッサーレモン味』だったな。 自販機

で見かけたから買ってみたんだがお前も飲むか?」

「いえ。 それよりそろそろ帰りましょう。 彼らの事もありますし、メンテナンス

に開発もありますので」

「・・・それもそうだな。 帰るか」

そう言うのと二人はゲーセンを後にし、そこからこの世界の拠点とも言える東のいるラボに足を進めた。

その道中に絡んできたチンピラや頭の悪そうな不良はベリアにボコボコにされた。

それを見ていた人は後にこう語る。

「波紋疾走でした」「オラオラでした」「無駄無駄でした」

「あ・・・ありのまま今起こった事を話すぜ！ 『奴が目の前でチンピラを一発殴ったと思っただら 一つの間にかチンピラが俺の横を飛んできた』」

な・・・なにを言っているのかわからねーと思うが 俺もチンピラが何をされたのかわからなかった・・・頭がどうにかなりそうだった・・・

催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・」

そして・・・しばらくした後の東のラボ 『吾輩は猫である 《名前はまだ無い》』では「東博士、この武器の出力なんですが・・・」

「なるほど、確かにここをいじればエネルギー効率は上がるねえ」

こちらではスライと束が機体の調整とデータの収集をしていた。

また、こつちでは・・・

「お前ら…大丈夫か？」

「大丈夫つすよ、陛下」

「グオオオ…」

「少し人間の女性に擬態するのが疲れただけです。なあ、タイラント」

「ギャオオオオオ」

「そうか? まあ、倒れんじやねえぞ」

グツタリしている三人にベリアルが声をかけて、それを比較的疲れていないヴィラニアスがタイラントを撫でながら答えていた。ちなみにジャタールは笑いすぎて五月蠅かったので三人に袋叩きにされて再起不能中である。

「そうだ! ベークン、例の武器の調整が終わったよ!」

「やつとか。とりあえずデータは何が入ってる?」

「とりあえず皆の機体のデータは入れたよ、それに戦いながら相手の機体データを収集可能にしたよ。単一仕様能力《ワンオフ・アビリティ》は一回発動ごとに50も消費するか気をつけてね。で、出してる間は1スロット10エネルギーを表すからね。」

それとベーくんの要望は全て入れといたよ」

「成程：1000スロットだからエネルギーギアは1000か：サンキュー東」

「別にいいよ。東さんも楽しかったからね」

ベリアルはその説明を聞いた後にその武器を手に持ち微笑に笑った。

「これなら単一仕様（ワンオフ）は使わないで勝てるな：金ドリ、覚悟しておきな」  
そう言いながらベリアルはその武器を粒子変換し手にある『リベリオン』の待機状態であるバングルに吸収させた。

そして、時は流れ・・・運命の月曜がやってくる！

## 第三話 『反逆』の力

くベリア side く

今、俺は I S 学園の第3アリーナ管制室にいる。理由はあの俺様に『私に負けるのが怖いのでは』と言った金髪ドリルを完膚なきまでに叩きのめし絶望に顔を歪ませる為である。

ちなみに今は発端となった織斑弟とあの金ドリの試合を見ているが織斑弟に I S : 『白式』だったかが一次移行《ファーストシフト》を終えた時に俺はアリーナのピットに向かった。

道中で『勝者 セシリア・オルコット』と聞こえたという事はあの馬鹿は負けたか。

まあいい、俺が完全に叩き潰す楽しみが出来たという事だ。一応、俺の向かうピットにはあの馬鹿がいるから聞いてみるか。

そう言っている内に俺はピットに着いた。

中で織斑弟と山田だったか？とスライがいる。スライの説明を聞くとあの後に使い慣れてもない武装を使って自滅したらしい・・・ただの馬鹿だな。

そうこうしてる内にあの金ドリがピットを修理し終えてアリーナに出てきた。

「陛下、あまり痛めつけない様に。私の分も残しておいてください」

スライが相手の心配でもしてると思ったらそうでも無かった……まあ、スライもコケにされたもんな。

「フツ……保証はできねえぞ」

そう言う俺は金ドリを潰す為にアリーナに出た

くベリア side ENDく

く三人称 sideく

「あら、逃げずに来ましたわね……ISスーツを着ていないとはどうかしましたかしら?」

セシリアはピットから何時もの改造したコートの様な学生服のまま出てきたベリアを軽く嘲笑した。

「うるせえ。テメエこそどうした、態度が変わって気色悪いぞ」

「気色悪い!? 先程、一夏さんとの戦いで男性でも強い方はいると認識を改めましたが……貴方には負ける気はしませんわ!」

ベリアの率直な一言にセシリアは憤慨し、主力武器であるスターライトmkⅢを構えた。

「フン、事実を述べたまです。それに俺がお前に負ける?・・・フハハハハハ! 実にくだらねえな」

「な!?!・・・少しハンデを差し上げようと思いましたが、必要ないみたいですよわね!」  
そう言うのとセシリアはベリア目がけてスターライトmkⅢからレーザーを放った・・・しかし、それはいいとも簡単に躲かれた。

「は・・・外した!?! この私が!?!」

「フンツ、テメエ・・・撃つて事は死ぬ覚悟は出来たようだな。見せてやるよ、『反逆』・・・リベリオンの力を!」

そう言うのとベリアはバングルのついた右腕を顔の左に持っていきバングルの発光と同時に前を通過させて展開させた。

機体は黒を基本に所々ガーネットの紅い線が入ったフルスキンのISだった。

右にやった手にあり肩に乗せている武器は両端が五角柱になっており、その一面ごとスロットと思える所に青い光が10個・・・計百の青く輝くスロットを持つロッドのような武器があった。

「フ・・・フルスキン!? しかし、この遠距離タイプの私の機体に近接武器で挑むなんて愚かですよわね」

「御託はいい・・・さっさと来い」

そう言いながらベリアはフェイスメットを介してセシリアを睨んだ。

次の瞬間、セシリアはリベリオン越しでも伝わる殺気に少したじろぎながらも挑発された事を怒り叫んだ。

「ならば墜ちなさい！ 私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

セシリアはその声と共にB T兵器であり名前の由来でもある『ブルー・ティアーズ』を四基展開しリベリオンを狙って撃ち始めた。

「フ・・・その煩いノイズを止めてやる。ギガバトルナイザー、ショット」

雨の様に降り注ぐ『ブルー・ティアーズ』からのレーザーを回避しながらベリアは呟いた。

そして、構えた専用武器『ギガバトルナイザー』から一基のブルー・ティアーズの方を向いている部分から光弾が飛び出した。

光弾はたやすく狙っていた一基のティアーズを撃ち落とした。

「そんな!?! ブルー・ティアーズが!?!」

「近接武器と甘んじたテメエの愚かさだ。ギガバトルナイザー、デスサイズ」

ベリアはそう言いながらギガバトルナイザーに手をかざし左に手を滑らすと一つの大きなエネルギーの刃で構成され、ギガバトルナイザーを軸にした大きな鎌『デスサイ

ズ』ができた。

「ゼアアアアアア!!」

ベリアは叫ぶとデスサイズで近くのビット一基を叩き斬り、そのままギガバトルナイザー《デスサイズ》をセシリア目がけて投擲した。

「!?!?!?!」

しかし、セシリアは直ぐに回避しギガバトルナイザー《デスサイズ》は空を切つてりベリオンの手元に戻ってきた。

「デスサイズ、パージ」

右手でキャッチした直後にそう嘔くとそのまま一回転しデスサイズのエネルギー刃だけを飛ばした。そして、また一つビットを破壊しエネルギー刃は消失した。

「鬱陶しい……邪魔だア!!」

苛立ちながらそう言うのと近くに静止していた最後のビットを軽く跳躍した後にギガバトルナイザーでそのまま叩き壊した。

「そんな……ブルー・ティアーズが全部……」

「フン、さっさと墜ちろ」

そう言いながら迫るベリアにセシリアは微笑んだ……そして、スカートパーツに付いている2つの円筒をベリアの方に向けて言い放った。

「かかりましたわね」

「・・・チイツ！　そういう事か！」

「その通りですわ！　ブルー・ティアーズ4機だけではありませんのよ！」

その直後にブルー・ティアーズのスカートパーツに付いている二つの円筒からミサイルが発射され、リベリオンに迫ってきた。

「何だ。　その程度か」

ベリアは呆れた声でそう言うのとギガバトルナイザーで二基のミサイルを叩き、それぞれ左右に流した。

直後、破壊された事を理解したかの様に二基のミサイルは爆発した。

そして、そのままブルー・ティアーズに迫るリベリオンは1メートル目前で急上昇した。

「な!?　何をするつもりですの!」

そう言いながら急上昇したりベリオンに釣られて上を見たセシリアは眩しい晴天に目を細めた・・・それが命取りになるとも知らず。

「・・・・・・・・」

出来た隙を逃さずベリアはリベリオンの最大出力でギガバトルナイザーをブルー・ティアーズに振り下ろした。

最大出力の振り下ろしをくらったブルー・ティアーズはセシリアの悲鳴と共に地表に高速で落ちていき地表と激突した。ブルー・ティアーズを中心に出来た小規模のクレーターがその絶大な威力を示していた。

「スライ。後どれくらいだ」

「ハッ！ ブルー・ティアーズのエネルギー残量は後12でございます陛下」

「チツ、さつさと沈んでくれればいいもんを」

プライベートチャンネルで相手のエネルギー残量を聞いたベリアは確実なるトドメをさす為にコール無しで《デスサイズ》を構築し、セシリアに迫った。

「い……いや、来ないで……来ないで！」

セシリアは迫るリベリオンに子供の様に涙を浮かべながら懇願するしかなかった。

しかし、そんな懇願を聞き入れずリベリオンはデスサイズを構えながら一步、また一步と近づいて来る。セシリアはその時、解剖実験で殺される生き物の気持ちを理解した。

「(こ……殺される……) い……インターセプター！」

殺されると思ったセシリアは唯一の近接武器であるインターセプターをコールし、投擲したがその抵抗もデスサイズで弾かれるという粗末なものに終わってしまった。

「わ……私はこんな所で負けていられませんのに……」

「負けじゃない、死だ。 決闘と言うからにはその覚悟はあったんだろ？」

「そ．．．それは．．．」

「無かったのか．．．それなら決闘を申し込んだ自分を呪いながらテメエの奏でる鎮魂歌《レクイエム》と共に死ね」

セシリアの絞り出したかのような細かい声にベリアはとてつもなく冷えた声で答えた。

バイザー越しからでも分かる殺意のこもった声にセシリアは死を覚悟した。

そして、ギガバトルナイザー《デスサイズ》を持ったリベリオンの右腕を上に掲げ、トドメをさす為振り下ろそうとした時．．．

「やめろー！ー！！」

白式を纏った織斑一夏が邪魔に入った。

リベリオンの背後から雪片式型を持って迫ったが、いと容易く躲かれ、脇腹にデスサイズの刃が無い方で強烈な一撃を叩き込まれ無様に来た道を転がっていった。

「おい！ 何すんだよ！」

「それは貴方も同じですよ．．．織斑！」

起き上がって抗議の声を上げた後にベリアとは反対の方から声が聞こえ振り向くと織斑の出してきたピットと同じピットからスライが何時もの制服姿で出てきた。

「スライ。 お前もベリアに戦いをやめるようn「黙れ！」だ．．．黙れ!？」

「貴方……何をするつもりで陛下に攻撃を？」

語尾こそ疑問形だったが声と顔は完全に怒りを表現していた。

「だから、これ以上の攻撃をやめるように言う為に入ろうと」

「……想像以上のアホですね……『メフィストフェレス』！」

スライは一夏の答えに呆れた後にメフィストフェレスをコールし走りながら展開し、そのまま右腕に装着された武器であるメフィラスブレードを展開し白式を斬りつけようとしたが雪片式型に阻まれ鏝迫り合い状態になった。

「危ねえ！ 卑怯じゃないか！」

「卑怯もラツキョウもありませんよ。 ハアツ！」

「うわああああ!!」

その言葉と共にメフィストフェレスはメフィラスブレードを除けた。 その所為でバランスを崩し胴ががら空きになった白式に強烈な蹴りを放った事で白式は更に後退した。

「クソツ！ こうなったら！」

「フン。 さっさとくたばりなさい！」

双方がスピードを上げて迫る中、その真ん中とも言えるべき地点に何か突き刺さった。

それはギガバトルナイザー《デスサイズ》だった。二人は投げられた方向を同時に見た・・・そこには案の定、リベリオンを展開したベリアがいた。

「スライ・・・下がれ、そいつは俺に用があるみたいだから」

「陛下！ しかし・・・」下がれと言っている」・・・ハッ！」

リベリオンの背後にベリアの本当の姿であるベリアルルの幻影を見たスライは言われた通りにメフィストフェレスを解除し、ピットに下がった。

「で、何の用だ？ 織斑」

「もういいだろ！ セシリアはボロボロだしお前に怯えてるじゃないか！」

「知るか。こいつから仕掛けた決闘だ。それに俺の知ってる決闘の終わり方は片方の降参または敗北、そして・・・『死』だ」

「だけどー！」

「それにこの場における敗北条件はシールドエネルギーを0にする事。あいつはまだ残っている、だからこそ完全なる止めを刺す」

「止めって・・・これは戦争じゃないんだぞ！」

「それが兵器を乗り回す人間の言う事か？」

「はあ？ 何言ってるんだ？」

一夏の間拔けな発言に痺れを切らしたのかベリアはリベリオンで白式を蹴り倒し上

から踏みつけた。

「ぐああああー！」

「痛いかな？ 痛いだろうなあ。絶対防御があればIS同士でも簡単には簡単に人を痛めつける事も出来れば殺す事も出来る、その時点で立派な兵器だ」

「ぐ……でも、アラスカ条約で軍事及び兵器への転用は禁止されてるだろー！」

「そんなものは勝手に偉ぶってる奴らが決めた事だ。その気になれば条約も無視出来るし兵器転用も軍事転用もできる。もしかしたら何処かでISを使ったテロ組織が出来ている可能性だってあり得るだろうなあ」

「そう言うとベリアはリベリオンで先程よりも強い力で白式を踏みつけた。

「ぐああああー！」

「本来の用途も忘れた貴様らはそんな兵器を競技の道具か何かと勘違いしている、そして今の世の中が出来た。あの女もそんな風潮と考え方に染まってるだろう。

だから、俺がこうして教えてやったんだよ。お前達が遊び感覚で乗り回す物は簡単に命を奪える兵器だと言う事を！」

「それでもここまでする必要は無いだろー！ それにお前もそんな武器を積んでる時点で本来の用途から外れてんだろー！」

「丸腰で交渉に行く奴なんている訳ないだろ。さて、無駄話は終わりだ。オ

ラアアア！」

リベリオンは踏みつけていた白式の足を持ち、ブルー・ティアーズの横に放り投げた。「さあ、終わりだア！」

ベリアはそう叫ぶとリベリオンでギガバトルナイザー《デスサイズ》の刃を飛ばして二機とも仕留めようとした。

「嫌……嫌あ!!」

「セシリア、危ない！　ぐわあああああ！」

パージされたデスサイズの刃が二機に迫る時、セシリアの叫びを聞いた織斑は痛む体に鞭を打って白式でブルー・ティアーズの前に飛び出しデスサイズをくらった。

結果、白式のエネルギーは尽き白式は解除された。

「ち……仕留め損ねたか。　まあいい、今度こそ終わりだ」

「嫌……来ないで……嫌あああ！」

セシリアの叫びを聞かずリベリオンはデスサイズを展開しながら一歩、また一歩と迫ってくる。

そして、ギガバトルナイザー《デスサイズ》を持ったりベリオンの右腕を上に掲げ、トドメをさす為振り下ろした。

今回は邪魔する者もおらず、振り下ろされたデスサイズはブルー・ティアーズを捉え

残りのエネルギーを奪っていきブルー・ティアーズも解除された。

『勝者、《クライム・ベリア》』

「フン、他愛もなかったな」

アナウンズと共に空中に投影された結果を気にもせずにベリアはリベリオンを待機状態に戻し、着ている改造したコートの様な制服を風に靡かせてピットに戻っていった。

誰も声を出さなかった。まさか、ISで女性に勝てる男がいると思わなかったのにそれが覆されただけじゃなく圧倒されたのだ。その事実を受け止めるのに精一杯で声を出せなかった。

その様子を管制室で見ていた織斑千冬、山田真耶、篠ノ之箒はゆつくりと口を開いた。

「・・・ダメージ0。流石、私を倒しただけはあるな」

「感心している場合じゃないですよ織斑先生！これは酷すぎます」

「そうです！一夏が・・・」

「陛下・・・まだ遊んでましたね」

何時の間にか管制室に戻っていたスライがそう呟いた時、全員がスライの方を振り向いた。

「ええ!? そうなんですかスライくん」

「そうか・・・やはりな」

「織斑先生まで!？」

「千冬さん!？」

「篠ノ之、『織斑先生』だ。そこにいるスライと先程まで戦っていたベリアは私の知り合いからの紹介でその為、戦闘試験をしたのは私だ。しかも、その時に私は負けている」

「それもあります。陛下は《ワンオフ・アビリティ》を使用していません。それに、その気になれば一分もかからずに決着がついたでしょうね」

「そんな・・・」

「千冬さんでも勝てないなんて・・・」

「そういう事だ。スライ、後でベリアと共に寮長室に來い。聞きたい事がある」

「はあ・・・分かりました」

「そう言うとスライは管制室を出て行った。」

「山田先生、二人の回収を頼みます」

「はい、わかりました」

「私も一夏の所に」

「今は駄目だ。ダメージがどれだけあるか分からないからな。許可が下りるまで」

は禁止だ」

「はい・・・分かりました」

そう言うのと篠ノ之も管制室から出て行った。

アリーナでは山田先生が手配した救護班により織斑一夏とセシリア・オルコットの両名が担架に乗せられ運ばれていた。

「一夏さん・・・貴方、どうして私を庇いましたの・・・」

「そんなの、助けたいと思ったからに決まってるだろ。しかし、痛いな・・・ハハハ」

「一夏さん・・・私の事は今度からセシリアで構いませんわ」

「そうか、よろしくなセシリア」

「ええ、こちらこそよろしくお願い致しますわ」

その頃、第三アリーナの観客席では・・・

「フフフ♪ ベリア君と『リベリオン』ねえ〜。なかなか面白そうじゃない」

そう言うのと女性は手に持っている扇子を開いた。

開かれた扇子には達筆な字で『興味津々』と書かれていた。

「さ〜と、まずは準備準備っ」と

そう言うとき女性は軽やかな足取りでアリーナを後にした。

こうして・・・激動の第三アリーナの決闘は幕を閉じた。

## 第四話 『世界最強』と『宇宙最強』

「スライ。寮長室って何処だ？」

「地図によるとここからへんなのですが・・・あ。ありましたよ陛下」

「・・・やっとか」

時は、セシリア・オルコットと織斑一夏の兩名をベリアがISバトルで完膚なきまでに叩きのめした日の夜。

スライとベリアは「寮長室」と書かれた部屋の扉の前に立っていた。

詳しい理由は聞かされておらず、スライはただ『聞きたい事がある』と言われて呼ばれた。

ベリアも呼ぶように言われていたのでベリアもいるのである

「失礼します。メフィールーク・スライとクライム・ベリアの兩名ですが先程の件により参りました」

ノックした後に礼儀正しくスライは必要な要件だけを話し、中からの反応を待った。

「やっとか来たか。入れ」

中から寮長であり二人を呼んだ『織斑千冬』による了解の声が聞こえた。

「では、失礼します」

「邪魔するぜ」

二人もその声を聞き中に入った。

寮長室は割とこじんまりしており生徒寮の部屋と大差は無かった……落ちている缶がビールの物でなければの話だが。

「まあ、少し散らかっているが適当に座ってくれ」

千冬は何時もの黒のスーツではなく、白のジャージを身に纏っており、その右手には落ちていた缶と同じ品種のビールの缶を持っていた。

「よつと。あ、悪いが俺にも貰えるか」

「未成年は駄目に決まっているだろう……と言いたい所だが、バレなければ問題無いだろう」

そう言うと千冬は備え付けの冷蔵庫から同じ物を取り出しベリアに投げた。

「教師とは思えないですね……いいのですか?」

「スライ、細かい事は気にするな。それに」

「それになんですか、織斑先生?」

「ある人は言った『バレなきや犯罪じゃ無いんですよ』とな」

そう言って千冬は手に持っているビール『THE BEER』のプルタブを起こし飲み

始めた。

「エエー・・・そんなんで良いんですか」

「いいんじゃないか？」

「陛下まで・・・」

「ところで、聞きたい事って何だ？ まさか酒盛りしたいが為に呼んだ訳じゃねえよな」

『THE BEEL』を飲みながらベリアは脱線していた話を本筋に戻した。

「おっと、そうだったな。では、単刀直入に聞こう。お前達はどうやって束から専用機を貰った」

千冬は真面目な顔をしてスライとベリアに質問を投げかけた。

その目は先程の様な目でもなければ学園で教師をしている時の目でもなかった。

只々、行動の真意を掴めぬ昔からの友を警戒している目だった。

「フン。どうやって何も、普通に貰っただけだが」

「正しくは『私達の為に造られたのを貰った』と言う方が正しいですね」

「何!? それはどういうこと？ 嘆キノ壁ハ積ミ上ゲラレテ♪／・・・出たらどうだ」

ベリアとスライの言葉の真意を聞こうとした時にベリアの持つている黒とガーネットの2色の携帯から着信音が鳴った事に話の腰を折られたのか出るように促した。

「すまねえな。俺d『もしもしく〜ベーく〜ん?』・・・束、もう少し静かにしろ」

「何!? 東だと!」

「うるせえ・・・ああ、お前の好きな『ちーちゃん』もいるぞ。そうか・・・ほら、東がお前に代われだつてよ」

ベリアは少し話した後にそう言いながら千冬に携帯を渡し、それを受け取った千冬は電話の向こうにいる友の声に耳を傾けた。

「やつほく、ちーちゃん元気い〜」

「ああ、元気だ。ところで一つお前に聞きたい事がある」

「なくに、3サイズ?・・・ああ! 切らないでちーちゃん!」

久しぶりに聞く友の冗談に電話を切ろうとしていたのだが今回は聞きたい事があるのでそのまま流す事にした。

「そうじゃない。ベリア達の事だ。東、あの専用機は本当にベリア達に譲渡したのか?」

「そうだよ。何せ、ベークン達の為に作った5機だもん」

「5機・・・ああ、そういえば5機あったな。残りの3機も既に渡したのか?」

「それは内緒だよ。ところでちーちゃん、この世界は楽しい?」

何時も不思議な事を唐突に聞く東だが今回は唐突なのは仕方ないとして真面目な声で聞いてきた質問に千冬は少しの沈黙の後に返事を返した。

「一概には言えないな・・・だが、楽しくもありつまらなくもある・・・それが答えだ」

「そっか．．．ちーちゃんは昔から変わらないね。あ、ベークんに代わって〜」

「分かった。たまには顔を合わせて話したいものだ．．．じゃあ、代わるぞ」

そう言うのと千冬はベリアに携帯を返した。

「ああ、わかった。なるべく早く戻る．．．そうか。じゃあ切るぞ」

ベリアはその言葉と共に通話を終了させると千冬の方を見ながら『THE BEEL』を飲み干し、話を始めた。

「と言う訳だ。分かってもらえたか」

「ああ、東が言うなら本当だろうな。それと、私を二度と『ちーちゃん』等と呼ぶな」

「なら、『白騎士』とでも呼びましょうか、織斑先生？」

「．．．お前達、どこまで知っている」

スライが言った言葉に千冬は顔を険しくしながらスライに聞いた。

「どこまで知ってるかって？ 全てだ、二代目白騎士」

「二代目．．．どういう事だ」

「言葉のままだ。安心しろ、バラしはしねえ」

「陛下の言う通りです。だから、そんなに怖い顔しないで貰えますか」

「そうか．．．すまなかったな」

ベリアから告げられた二代目と言う言葉を理解した後スライから言われた一言で

千冬は警戒を解いた。

「ところで、お前達はその力で何をするつもりだ？　この世界を壊すのか？　それとも守るのか？」

「さあな。俺は今までこの手で色んな壊してきたからな、一つだけ言える事はこいつを本来のあるべき姿に戻す。その為に破壊し、守る・・・それだけだ」

　　そう言いながらベリアはリベリオンの待機状態であるバングルに視線を落とす。

「そうか。スライ、お前はどうか？」

「私は陛下の御心の従って動きます。それが貴方達から見ても『悪』であっても・・・それが私達なりの別の『正義』です。

『皆が幸せならば、自分が犠牲になってもいい』なんて言う弱者の自己満足な綺麗事を嘲笑いながらね」

　　スライは笑顔でそう答えたと共に立ち上がった。

「陛下、そろそろ帰りましょう。東博士からも電話でそう言われたのでしょうか？」

「そうだな。邪魔したな、ブリュンヒルデ」

「『織斑先生』だ。そう呼べ」

「・・・チツ。わーったよ、織斑先生」

「それでは、失礼しました」

そう言うのとスライとベリアは寮長室を後にした。

「全く・・・束の奴。次は何をするつもりだ」

一人になった千冬はそう呟いた後に缶に残っている『THE BEEL』を飲み干した。

〈保健室〉

ベリアとスライが寮長室で話している同刻、保健室では放課後の激闘後に担架で運ばれたセシリア・オルコットと織斑一夏が寝ていた。

「嫌・・・来ないで・・・嫌・・・」

そんな中、セシリア・オルコットは悪夢にうなされていた。

悪夢は先刻の第三アリーナでの試合の様だ。

『わ・・・私はこんな所で負けていませんのに・・・』

『負けじゃない、死だ。 決闘と言うからにはその覚悟はあったんだろ?』

『そ・・・それは・・・』

『無かったのか・・・それなら決闘を申し込んだ自分を呪いながらテメエの奏でる鎮魂歌《レクイエム》と共に死ね』

ベリアの乗るリベリオンからのバイザー越しからでも分かる殺意のこもった冷たい声

悪夢でその冷たさは更に強まりセシリアを恐怖に包む。

「嫌……嫌……」

悪夢にうなされているセシリアは只々その言葉だけを繰り返し口にする。

次に見たのはアリーナの真ん中で白式を踏みつけているリベリオンの姿、そしてハイパーセンサーで断片的に聞いた二人の会話

『ぐああああ！』

『痛いかな？ 痛いだろうなあ。 絶対防御があれどIS同士でも簡単には簡単に人を痛

めつける事も出来れば殺す事も出来る、その時点で立派な兵器だ』

次に見たのは先程よりも強い力で白式ごと踏みつけられ更に悲鳴を上げる織斑と踏みつけながら話を続けるリベリオンに乗ったベリアの二人。

『ぐあああああ！』

『本来の用途も忘れた貴様らはそんな兵器を競技の道具か何かと勘違いしている、そして今の世の中が出来た。 あの女もそんな風潮と考え方に染まっているだろう。 だから、俺がこうして教えてやったんだよ。 お前達が遊び感覚で乗り回す物は簡単に命を奪える兵器だと言う事を！』

(……確かにベリアさんの言う通りですわ。 そんな簡単な事も失念していたなんて……)

私は)

次はパージされたデスサイズの刃が二機に迫る中でセシリアの叫びを聞いた織斑が痛む体に鞭を打って白式でブルー・ティアーズの前に飛び出しデスサイズをくらった光景。

その光景を見ながらセシリアはその時に織斑に重なるはずも無い人の影を重ね、呟いた。

(お父様……)

女尊男卑の風潮が始まる前から母に対し頭が上がらなかつた事で彼女の中での男性への偏見をより強くさせた人物……そんな頼りない父の幻影を見た。

(お父様はこんなに強く凛々しくありませんでしたわ。なのに……何故……)

そんな、答えの見えない迷路の様な問いに答えを探している内にセシリアの悪夢はクライマックスに入った。

『嫌……来ないで……嫌あああ!』

セシリアの叫びを聞かずデスサイズを展開しながら一歩、また一歩と迫ってくるリベリオン。

そして、上に掲げ、トドメをさす為振り下ろされたりベリオンの右腕に握られたギガバトルナイザー《デスサイズ》。

邪魔する者もおらず、振り下ろされるデスサイズ。

そして、身を切り刻まれる錯覚

「嫌・・・嫌ああああ!!」

そんな悪夢に耐え切れずセシリアは声を出し、叫んだ・・・

「怖い・・・嫌・・・嫌!」

「・リア!・・・セシ・・・セシリア!」

「・・・はっ!・・・ここは、IS学園」

うなされるセシリアに誰かが呼びかける声が聞こえ目を覚ました・・・そして、ゆっくりと現状を理解した。

「セシリア、大丈夫か? 随分うなされていたけど?」

「・・・一夏さん」

さつき聞こえてきた声の主である一夏は心配そうにセシリアを見ていた。

「大丈夫ですわ。なんの問題もありませんわ」

「でも・・・お前、泣いてるぞ?」

「え?」

その一言を確かめる為にセシリアは右手で目尻に触れた。

・・・一夏の言葉通り泣いていたのだろう、目尻は少し濡れていた・・・涙で

「泣いている・・・私が・・・」

「あく変な事かもしれないけどさ・・・泣きたい時はさ、思いつきり泣いてスッキリすればいいと思うぜ」

「一夏さん・・・」

優しく微笑む彼にセシリアはまた父の幻を見た・・・何故、彼に父の幻を見るのかはまだまだ理解できないが見えてしまう父の幻。

「俺に見られるのが嫌なら後ろ向いてるし聞かれたく無かったら耳塞ぐからさ」

「いえ・・・そんな事はありませんわ。ただ・・・」

「ただ？」

「胸を・・・貸して欲しいですわ」

「胸？　まあいいけど」

その言葉を聞くと共にセシリアは一夏の胸元に顔を埋めて泣き出した。

「う・・・うう・・・」

「・・・俺の知ってる歌にさ、こんな歌詞があるんだ。『泣いてもいいよ、また笑えればいい』つてさ・・・だから、今日は思いつきり泣いて明日からまた笑顔でいれればいいと思うぜ」

「うう・・・一夏さん」

自分の胸で今だ泣き続けるセシリアの頭を一夏は只々、無意識に撫でていた。こうして……保健室の夜は過ぎていった。

くく某国のある森く

ここは某国のある森……そこには東と例の三人の女性、そして6機の破壊されたISとその操縦者であつただろう者達がいた。

「……クツ！ 何だそのISの性能は！」

「教えてやるわけねえだろ。 さっさと眠っちまいな」

そう言う例の『グーちゃん』と呼ばれていた女性は鳩尾に強烈な一撃を決め、操縦者であつただろう女性を気絶させた。

「ふいっ。 東くこっちは終わったぜ」

「……こっちも終わった」

「我の方も終わったぞ」

「おう。 グーちゃんにデーちゃんそしてヴィーちゃん、お疲れ。 で、どうだった？」

東は三人に労いの言葉をかけた後にそれぞれのISの実践での使い心地を聞いた。

「少し『グレイザー』の能力の調整がムズイな……危うくISごと冷凍保存する所だったぜ」

「え、束さん的には全然OKなんだけどな。デーちゃんはどうだった？」

「・・・『ジェノア』の左手が防御にも使えるから問題は無かった」

「ふむふむ。そんな使い方があったのか。ヴィーちゃんは？」

「うむ、『タイラント』の実弾やエネルギー弾の吸収はなかなかによかったぞ。出来る事ならハンマー部の飛び出している所とハンマーをつなぐワイヤーでもつけて投擲可能にして欲しいな」

「なる程、拘束にも使えそうだね、分かった。IS学園に入る前には完成させるね」

一通りの感想を言い終えた後に4人はその場から姿を消した・・・

## 第五話 学生なので勉強を

「ほう・・・意外と美味しいな。今度から利用するか」

「ですね。ラツキヨウも美味しいですし」

二人はＩＳ学園の食堂の窓際の円形テーブル席で朝食をとっていた。

いつもはラボで簡単な物を交代制で作っているのだが今日は材料が無かった為、こうして食堂で摂っているのである。

ちなみにメニューはと言うとベリアは『モーニングセットA』でスライはカレーに追加でラツキヨウを3割増にしている。

「だな。あ、単一のテストしてねえ・・・」

「機体召喚の事ですか？ 別に大丈夫でしょう。それに使う程、強くもなかったでしょう？」

「それもそうだな。まあ、次の時にテストするか。お前もテストしないでいいのか？」

「領域操作の事ですか？ あれもそのうちテストしますよ」

「そうか。まあ、使う機会があればだろうがな」

「ですね」

そう結論つけて食事を再開する二人に3つ人影が迫っていた。

「あのくベリアくんのスライくん？」

「ん？」「何ですか？」

「駄目なら良いんだけど。席、一緒でもいいかな？」

「別に構わないが？」「私も構いませんよ」

「本当！　ありがとうね、二人とも」

そう言うところの3人の女子がベリア達と同じ席についた。

周りからは彼女らを羨む声が聞こえた別にどうでもよかった。

「そういえば、ベリア君。あの戦い方ってどこで習ったの？」

「私も思った！　カッコいいよね」

「確かに、ズバーンでドーンでバリバリくだもんね」

「あれか？　あれは全部独学だが？」

「本当!!　だとしたら凄いや！」

「そうか？」

「そうだよ！　国家代表にも勝てるんじゃない？」

「さあな。ところで名前を覚えてくれこっただけ知られてるのも面白くねえ」

静かに食事をする二人に彼女達は昨日の試合の感想を述べていた。

が、そんな事はどうでもよきげなベリアはまだ名前も知らない三人に名前を聞いてみた。

「私は鷹月 静寐。同じ一年一組だよ」

「私も一組、谷本 癒子。よろしくね」

「私はね〜布仏 本音だよ〜。よろしくね〜」

「鷹月に谷本、布仏か・・・まあ、よろしく」

「陛下共々、私もよろしくお願いしますね」

三人の自己紹介の後に二人も返事を返し再び朝食を摂りながら談笑を楽しんでいた。話の内容は趣味や授業のことなどと他愛のないものだった。

「あ、そろそろ授業だ。私達、先に行くね」

「じゃあね、二人とも」

「教室で会おうね〜。メファイメフィ〜にベリベリ〜」

「何だその痛そうなアダ名は・・・まあいいけど」

「メファイメファイですか。アハハ・・・」

布仏の独特の呼び方にそれぞれ違う反応をしながら三人を見送るとベリアはブラツクコーヒー、スライは水を飲み干した。

その時の二人にとって何気ない動作が実に上品なものだったのでそれに魅了された

女子生徒が多数いたのと言うまでもない。

「さて、行くか」

「かしこまりました、陛下」

二人はそれぞれのトレーを返し食堂を出ると教室に向かった。

「え〜と、織斑君とオルコツトさんは今日は欠席です」

? エエ〜ナンデ〜 / ヤッパリ、キノウノ〜? / ザワザワ・・・

「うるさいぞ小娘共。他人の心配の前に勉学に集中しろ。嫌ならISを背負ってグラウンドを10周させるぞ」

朝のホームルームで山田先生の連絡を聞きざわつくクラスを織斑先生が何時もの様に沈めた。

「え・・・え〜と、これでホームルームを終わりますね。皆さん、授業の準備をしてくださいね〜」

山田先生の一言の後、皆は授業の準備を始めた。

ちなみに今日の授業は

・1限 国語

・ 2 限 世界史

・ 3 限 自習

・ 4 限 家庭

↳ 昼休憩↳

・ 5 限 IS 講義

・ 6 限 IS 講義

の 6 限である。

「はあ・・・退屈じゃなけりやいいんだが」

「そればかりはどうにもなりませんよ、陛下」

そして、授業が始まる。

↳ 1 限 国語↳

「ここまでで大体俳句の決まりは掴めたと思うから・・・スライ君。今から出すお題で俳句を作ってみて。お題は『蝉』と『七日』よ」

「蝉の目に 七日輝く 陽の光」

「うん。急なフリながらも見事な句ね」

「ありがとうございます」

「じゃあ、次は〜」

〜2限 世界史〜

「ここまでで言った様に、歴史が始まるには、人類が誕生しなければなりません。どのように人類が誕生したか。今でこそ進化ということは常識になっているけれど、この考えが発表された当時は大きな抵抗がありました。では、その理論と唱えた人物は誰ですか・・・布仏さん」

「え〜と〜・・・進化論と〜アーウオン！」

「理論は合ってるんだけどね〜残念だったわね〜」

「え〜違うの〜」

「そういう事。じゃあ、代わりにベリア君」

「進化論で唱えたのはダーウィンだ」

「正解！教科書も開いてないのによく覚えていたわね」

「お〜ベリベリすごい」

「その痛そうなアダ名は確定なんだな・・・はあ」

〜3限 自習〜

『教卓の課題をしておく事。後で回収します』

「・・・(机の機能を使ってリベリオンの簡易メンテ)

「メファイメファイ、ここ教えて〜」

「別に構いませんよ」

? : スライクン、ワタシモー / ? : ア、ズルイー。ワタシモー /

「はあ・・・なら、前で説明しますね」

?? : ヤッター / /

「・・・(簡易メンテ中)

「ですから、ここがこうなってここの答えは・・・」

〜4限 家庭〜

「スライ、ソースはどうだ」

「今の所は問題ありません」

「そうか。布仏、スープの味は」

「問題なく美味しいよ〜」

「全部飲むよ。鷹月、鮭の下ごしらえは」

「ばっちり出来てるよ」

「よし、なら渡してくれ。谷本は皿の用意」

「アイアイサー」

・・・3分後・・・

「さあ・・・SHOW TIMEだ」

カチツ、ボオオオオオオオ

「おおくブランドーだ。初めて見た」

「違うよ本音。フランベだよ」

「そうそう。でも、すごいよね」

「ふう・・・出来た。谷本、盛り付け頼めるか」

「いいよ。ソースをかけるのはスライ君に任せるね」

「分かりましたよ谷本さん」

「私も手伝うよ」

「布仏はつまみ食いしそうだから大人しくしてろ」

「え」

「鷹月は使い終わった器具の片付けを手伝ってくれ」

「わかったよ」

教師&クラスメイト（（女性として負けてはいけないもので負けた気がする・・・））

とまあ・・・色々あつて昼休み

「・・・ふあく。スライ、午後はなんだ？」

「5限6限ともにI Sの講義でございませ、陛下」

ベリアはスライに午後の授業がなんだったかを聞きながら屋上でユグドラ汁ソーダ『ディーラーチェリー味』を飲んでいた。

「あくあれか、俺達は別に聞かなくても大丈夫だがよ・・・山田に泣かれそうな顔で授業を聞いているか聞かれると何故か可哀想になるんだよな」

「ですね。あれで生徒より年上とは・・・どちらかと言うと年下に見えますね」

「全くだ。・・・で、その野郎は何時まで俺達を見てるつもりだ」

「害がないから放置しておきましたがいい加減、イライラしてきましたよ」

そう言うのとベリアとスライは入口に視線を飛ばした。

そこには誰もいなかったがしばらくすると一人の女性が出てきた。

「あらら〜バレちゃったの？ いったい何時から気付いてた訳？」

その女性は外ハネした水色の髪をした女性で手に持っている扇子を開くとそこには『解答求ム』と達筆で書かれていた。

「何時からって、テメエの尾行が始まったこの昼休みの頭からだか」

「ところで貴方は誰なんですか？ 敵なら容赦はしませんか」

二人はそう言うそれぞれで I S の待機状態であるバングルと腕時計を淡く輝かせながら構えていた。

「大丈夫♪ お姉さんは敵じゃないわよ。生徒会長をしているただの可憐な女子生徒よ」

「本当に可憐な奴はそんな事言わねえよ」

「陛下、生徒会長と言えば生徒最強との情報が」

「そうそう♪ お姉さんは生徒最強の生徒会長『更識 楯無』よ。よろしくね」

「で、その皿屋敷が何の用だ？」

「陛下、更識です」

「用事なんてなくんにもないわよ。昨日の試合を見て興味を持ったから近づいてみたっただけ」

楯無は言うのと再び扇子を広げた。そこには『興味大アリ』と書かれていた。

「で、その結果がストーキングか？」

「嫌ね〜ストーキングだなんて。せめて愛の追跡っていって「スライ、帰るぞ」「かしこまりました」嘘々！「冗談よ〜」

「・・・頭がいてえぜ」

「はあゝ」

「ところで二人とも、放課後に私と一試合どう？」

「はあゝ」

さつきから巫山戯ている様にしか感じられない楯無からのいきなりの試合の申し込みに二人は素つ頓狂な声をあげた。

「だからね。興味を持ったのと実力を見たいから放課後に一戦どう？つて事」

「くだらねえ・・・戻るぞ、スライ」

「ハッ」

そう言つて二人は教室に戻る為に扉へと歩を進めた。

「もしかして、負けるのが怖いのかしら」

「あゝあゝ」

横を通り過ぎた時に楯無の囁いた一言にベリアは反応した。

「だって、一年生で強いって言つても生徒最強の私に勝てるわけないでしょ？ だから

負けるのが怖いのかなゝつて」

笑顔で言う楯無、開かれた扇子には『不戦勝』の字。ベリアを苛つかせるには十分

過ぎる要素だった。

「・・・まあいい。楯無、今のISは何だ？」

「先輩をつけて欲しいな。そうねえ・・・一応、表向きは競技用マシンって事だけど見るからに兵器なのよね」

楯無からの答えを聞いたベリアは苛立ちを沈めスライに目配せをした。

スライも意図を察したのか、頷き返した。

「よし。さっきの試合の話、乗ってやろうじゃねえか」

「で、ルールの方はどうするのですか？」

「そうねえ。セシリアちゃんや織斑君の時の事も考えて危なくないように勝利条件はエネルギー切れ、もしくは相手の戦意喪失でどうかしら？」

「別に構わねえぜ」

「私も問題ありませんよ」

「じゃあ、決まり♪ 放課後の6時、第3アリーナでね。バイバイ」

決まった試合の時間と場所を言うと楯無は軽やかな足取りで屋上を後にした。

「・・・陛下、さっきの方は意外と考えがしっかりしていたようですね」

「どうでもいい。さっさと戻るぞ」

ベリアは歩き始めるととも近くの空き缶入れの方に飲み干したユグドラ汁ソーダ『デューラーチェリー味』の缶を蹴って屋上を後にした。

その缶は放物線を描きながら空き缶入れに吸い込まれていきベリアが屋上の扉をくぐるのと同じくらいに空き缶入れの中に入った。

く5、6限　IS講義く

5、6限のIS講義は5限に専用機持ち同士の試合を見てもらい6限にそのレポートを書いて提出してもらおうというものだった。

尚、模擬戦をした専用機持ちはレポート提出を免除される。

「スライ、ベリア。模擬戦をしてみせろ」

管制室からの千冬の指示を聞いてベリアとスライは前に出てきた。

「はあく。スライ、加減を忘れるなよ」

「分かっております。陛下の方も加減してくださいよ」

この会話だけ聞くと手加減のことだと思いが実際はそうではなくてちゃんと見ている女子がしっかりとレポートを書けるように速度を落とすと言う意味の加減だった。

実際、セシリアと織斑との戦いでも相手が人間と言う事もあってベリアは本気の十分の一で戦っていたのだ。

本気の半分を出さずとも束製の無人ゴーレム5体を僅か5分で殲滅したのだ。

「準備はいいな・・・始め!」

その声と共に二人は自分の専用機の待機状態を輝かせ走り出した。

・・・50分後・・・

?キーンコーンカーンコーンノ

「よし、そこまでだ。」

管制室から聞こえる千冬の指示で二人は展開している『リベリオン』と『メフィストフェレス』をそれぞれの待機状態に戻した。

「スライ、ご苦勞」

「陛下こそ。流石でございませう」

それぞれ勞いの言葉を掛け合っていると観客席から千冬の声が聞こえてきた。

「では各自、次の時間にレポートを書いて提出するように。解散!」

その声と共に観客席から生徒は居なくなり千冬と存在が薄れていた山田先生は二人の元にやってきた。

「スライにベリア、ご苦勞だった。次の授業でのレポートは出さなくていいからしっかりと整備をしておくように」

「それとお二人のお部屋が用意できましたので鍵を渡しておきますね」

そう言うとお山田先生は二人に同じ番号『1212』と刻まれた鍵を渡した。

「ありがとうございます、山田先生。しかし、諸用で寮に戻る時間が遅れる事が多いと言

う事を先に伝えておきますね」

「分かりましたよ、スライ君。その場合は先生に連絡を入れてくださいね」

「分かりました。なるべくそうします」

山田先生に連絡事項を伝えている間、千冬とベリアも話していた。

「おい、ブリュンヒルデ世界最強」

「織斑先生だ。で、どうしたベリア」

「次の授業、俺とスライは保健室に行くから遅れるとだけ言っておく」

「・・・まあいいだろう。遅れてもいいから授業には出席しろ」

「あいあい・・・了解。スライ、行くぞ」

「ハッ」

ベリアはスライに声をかけアリーナを後にして織斑とセシリアのいる保健室に向かった。

## 第六話 テスト相手はロシア代表

「はあ……スライ。保健室ってどっちだ？」

「えくと……こちらです、陛下」

「おう……さつさとあの金髪からデータをもらうぞ」

ベリアはスライに案内を任せ保健室に向かつて廊下を歩いていった。

5限に許可はとっているので別に遅刻しても文句は言われない。

「……スライ、あの更識とか言う女の情報は何か掴めたか？」

「ハッ。調べた所によりますとあの女性は現ロシア代表のようです」

「代表か……面白い、俺様の単一ワンオフの実験体にはちょうどいいな」

「専用機はモスクワグストロイ・トゥマン・モスクワエの深い霧。能力は「スライ、それ以上は言わなくていい。楽しみが減る」ハッ！……陛下、到着いたしました」

「やつとか……」

ベリアとスライは目的地である保健室に到着した。

「失礼するぜ。織斑とオルコットの様子を見に来たんだが」

「私も同じく様子を見る」

扉を開けて開口一番に要件を告げた。

保健室内は当たり前だが清潔感に満ち溢れ眩しいくらいに白かった。

薬品棚には市販の薬品やガーゼ、他にも添え木等も用意してあった。

「そう。二人ならそのカーテンの向こうよ。あまり騒がないようにね」

目の前で書類作業をしていた。保健教諭は二人の方を向きそう告げるとまた机の上の書類を処理するために机の方を向いた。

ベリアとスライは告げられた方のカーテンの方に向かって行きカーテンの向こうに入っていった。

「よう、織斑。生きてるか」

「織斑さん、オルコットさん。ご機嫌はどうですか？」

「ヒイツ!?!...だ...大丈夫ですわ」

「生きてるかって...それならもう少し加減してくれよ」

二人の来訪にセシリアは小さく怯えた声を出し、一夏はベリアの言葉に溜息混じりに反論した。

「知るか。もともと邪魔したお前が悪い」

「そりゃそうだけど...」

「そんな事より陛下。早くここに来た目的を終わらせて戻りましょう」

「ああ、そうだな。おい、セシリア・オルコット」

「は、はい」

セシリアは自分を完膚無きまでに痛めつけた人物にフルネームで自分の名を呼ばれた事に動揺してひと呼吸遅れて返事をした。

「闘う前にした賭けの取り分を貰いに来た。早く蒼い雫のデータを渡して貰おうか」

ブルーティアーズ

そう言つて右手を突き出したベリアにセシリアは一瞬、理解できない顔を浮かべたが直ぐにその会話を思い出した。

『まあ、貴方達が勝つても何も無いというのもおかしい話ですわね。もし、私に勝てたら機体のデータを差し上げてでも宜しくてよ』

『嘘じゃねえだろうな』

『ええ、祖国に誓つて嘘ではありませんわ』

「そう言えばそうでしたわね・・・」

「そんなのはどうでもいいからさっさと渡せ。早く戻つてリベリオンのメンテナンスしてえんだよ」

「おい、ベリア・・・」

「織斑さん、口出しはしないでいただきたいですね。あの時、貴方も聞いていたでしょ

う」

「・・・そうだけど」

ベリアに何か言おうとするのをスライに止められた織斑はただただセシリアを見つめていた。

見つめられている本人はその視線を感じず左耳につけている蒼いブルーティアーズ雫の待機状態であるイヤークアスを外した。

「・・・」

セシリアの胸の内では様々な葛藤があつたがやがて決心したかの様にベリアの方を見つめて差し出されている右手の上にイヤークアスをのせた。

「この子を・・・蒼い雫ブルーティアーズをお願いしますわ」

「フン、知るか」

ベリアは震えた声で言うセシリアをあしらいなから自分のリベリオンの待機状態であるバングルの上にイヤークアスをのせた。

イヤークアスがのせられたバングルは淡く光り始め、10分後に輝きが収まった。するとガーネットの部分が妖しく光った。

「終わったか・・・スライ、戻るぞ」

「ハッ」

「おっと、忘れていた。こいつは返すぞ」

そう言うのとベリアはセシリアにイヤークラスを投げた。

セシリアはそれを両手でキャッチすると今にも保健室を出ようと背を向けているベリアと未だこちらを見ているスライの方を見て口を開いた。

「何で・・・返したのですか?」

セシリアにはそれが不思議でならなかった。ISのコアは限られた数しかないと、専用機であろうと訓練機であろうとISが手に入るならそれに越したことはない。

しかし、目の前の人物は不思議な事にそれを返した。それがセシリアには理解できなかった。

「俺が欲しかったのはその機体のデータだ。それに、乗ることの出来ないISなんて邪魔でしかない」

「それでは二人とも、また明日に教室で」

ベリアはそれだけ言うのと保健室を出ていき、スライも挨拶をした後にカーテンを閉め、ベリアに続いて保健室を後にした。

「よかったなセシリア。乗れなくなったらわけじゃなくて」

「一夏さん・・・」

横で屈託の無い笑顔で自分の事の様に喜んでくれている一夏にセシリアは顔を朱に

染めながら返事を返した。

「ところで陛下……何故、蒼い雫を返してさしあげたのですか？」

ブルーティアーレス

保健室を後にし教室への道を共に進むベリアにスライは先程の行動について質問していた。

「さあな。俺にもよく分からんが別に必要ないしな」

「そうですか……」

ベリアの答えにスライは納得がいかなかったもののそれ以上の追求をやめた。

「ところでスライ。お前に頼みがある」

「ハッ。なんででしょうか陛下」

「俺とあの皿屋敷とやらが試合している時にこの世界に『ウルトラマン』があるかどうか調べておけ」

「陛下、更識です。しかし、なぜその様な事を？」

「今まで訪れた世界を見てきただろ。あの中に俺達が番組の中の存在の世界があつただろ？」

「……まさか、この世界も」

「あくまで仮定だ。もしそうなら俺達の正体が何かの拍子にバレるかもしれん。まあ、バレたらこっち側に引き込むか何かしらの手を打てばいいだろう」

「しかし、バレルる事はそうなのでは？」

「そうだが、もしこの世界でもウルトラマンが空想の産物で番組もあつたとしたら俺達の機体を見て似てると思う奴もいるかもしれん。だから、念の為に調べておけ」

「ハッ！分かりました」

そんなやりとりをしながらベリアとスライは教室に戻ってきた。

「戻ってきたか。二人の様子はどうだった」

「問題はなさそうだったぜ」

「明日には復帰できると」

「そうか。では、お前達は先ほど言った通り機体のメンテナンスをするように」

「へいへい」「了解しました」

戻って早々千冬に二人の容態を聞かれ答えた二人は先程も言われた事を言われたので席に着いた後に机にモニターを表示しそれぞれの機体のメンテナンスをしていた。

（蒼い雫・・・名前の元にもなっている遠隔無線誘導型兵器『ブルー・ティアーズ』と

レーザーライフルを持つ遠距離型の機体か。他には・・・ほう、こいつは面白い）

ベリアは機体のメンテナンス前にさつき手に入れた蒼い雫のデータを見た後にメンテナンスを始めた。

（損傷12% 消費したシールドエネルギー23%・・・まあ、このままでもあの皿屋敷

とやらを潰せるな。まあ、一応完璧な状態にしておくか」

スライも同様にメンテナンスをしておりこちらも念入りなメンテナンスで戦闘前の状態まで修復された。

そして、6限も終わり放課後・・・時刻は3時半

「スライ、まだ時間があるな・・・」

「そうですね陛下・・・ここは一度、寮の部屋でも見てきますか？」

二人は6時にある更識との試合まで暇を持て余していた。そんな矢先にスライが寮の部屋存在を思い出し、今に至る。

「そうだな・・・行ってみるか」

「ハッ。確か、『1212』号室でしたね」

「そうだ。行くぞ」

そういう事で二人は1212号室に向かった。

・・・10分後・・・

「ここか・・・」

二人はプレートに『1212』と書かれた扉の前に立っていた。

「どうやらその様ですね。意外と遠かったですね」

「だな。とりあえず、中に入るぞ」

そう言うと二人は1212号室の鍵を開け、中に入った……そこには

「おかえりく遅かったじゃない」

「どうやって入ったんですか……」

「何でお前がいるんだよ……頭が痛え」

6時に第3アリーナで戦う相手である『更識 楯無』が居座っていた。

「何でつて……暇つぶし？」

「なんで疑問形なんだよ」

「まあそんな事は置いておいて」

「いや、置かないでくださいよ」

「試合まで暇だから楽しくお喋りしようかな〜つて」

「はあ？」

二人は楯無の訳の分からない考えに只々間拔けな声をあげるしか無かった。

「だって二人ともIS適正がSで試験で織斑先生を倒したんでしょ？ 手加減して

もあの入つてブリュンヒルデよ」

「あ〜……そーいやそーうだったな」

「へ〜我々の適正つてSだったのですか」

「『へ〜』つてSランクつて『ヴァルキリー』や『ブリュンヒルデ』クラスの人たちぐら

いしかいないのよ」

「別にどうでもいいな」

「そうですね陛下。最終的には倒せばいいですからね」

「あら、随分な自信ね」

二人の反応に楯無は扇子を広げて口元を隠した。

その扇子にはいつものごとく達筆で『油断大敵』と書かれていた。

「自信しかねえよ。だいたい、まだ半分の実力も出してないからな」

「へ？」

「ですね。確か、織斑先生との試合の時もP I Cとシールドエネルギー以外は切って半

分の実力でやりましたものね」

「へ!？」

「結局一撃入れられたがな．．．一度本気でやりあってみたいものだ」

「．．．」

楯無は開いた口がふさがらなかつた。

織斑先生と言えばI S界最強『プリュンヒルデ』の称号を持つ人だ。

たとえ試験試合で手加減していたとしても勝てるはずが無いと思っていた。

しかし、目の前の二人はそれをやってのけたと言うのだ．．．しかも、本気ではなく

半分の方で。

それがやはり信じられなかった。

「ん？ どうかしたか？」

「へ？」

「そんな風に口を開けていれば私でも気になりますよ」

「あ、別になんでもないわよ。それよりまだまだ時間があるからもう少し話してましょ」

「はあ・・・別に構わねえが」

「私も別に構いませんよ」

「ありがとうね、二人とも」

その後もベリア、スライ、楯無の三人は6時まで談笑していた。

内容は至って普通なものばかりだったので割愛させてもらおう。

そして・・・約束の6時。ベリアと楯無の二人はそれぞれの専用機を展開させて向かい合っていた。

「それがモスクワグストロイ・トゥマン・モスクヴエの深い霧か・・・テスト相手にはちょうど良いかもな」

「今はそんなナンセンスな名前じゃないわ。『ミステリアス・レイデイ』、訳すと霧纏の淑女よ。いい名前でしょ」

「感動的だ。いい名前だな。だが無意味だ」

「あら、意外と酷い事言うのね。まあいいわ、始めるわよ」

「いいだろう。さあ、地獄を楽しみな!」

「お生憎様、まだ地獄は見たくないわね!」

そう言うのと二人は一瞬で距離を詰めてそれぞれの武器・・・蒼流旋とギガバトルナイザーをぶつけ合わせた。

「ほう。水の槍か、面白い」

「なかなかやるわね・・・これはどうかしら!」

楯無は不敵な笑みを浮かべながらそう言うのと蒼流旋の4つの穴から弾丸が打ち出され、何発かがリベリオンに被弾しリベリオンは数歩後退した。

「クツ・・・弾丸も出せたか」

「そういう事♪ どうかしら、蒼流旋のお味は」

「なかなか効いたぜ・・・丁度いい! コイツの起動テスト相手にはちょうど良い!」

そう叫ぶベリアに反応するかの様にリベリオンの専用武器『ギガバトルナイザー』のスロット部分が青く光った。

「フツ。丁度準備も出来たぞだ・・・いくぜ! モンスロード 機体召喚!!」

叫ぶと共にギガバトルナイザーを目の前に水平に突き出すとスロットの光が5つ消え、一つの大きな青く光る光球が現れた。

「あら、綺麗な光ね」

「それだけならいいけどな．．．行けえ！」

そう叫ぶと同時に光の中から霧纏ミステリアス・レイデーの淑女 目がけて四本のレーザーが飛んできた。

「．．．っ!？」

楯無は驚きに目を見開きながらもその四本のレーザーを回避した。

そして、収束していく光とともにどンドン露わになっっていく機体を見て驚きを隠せなかった。

「黒い蒼い雫ですって!？」

彼女の言う通り、目の前に現れたのは真つ黒な蒼い雫ブルーティアーズ。操縦者は乗ってはいないが人の形をしたものがI Sと同化していた。

「無人機．．．でもコアの反応は無いわね。もしかして、それが君の単一仕様能力かしら?」

「そういう事だ．．．さあ、最終ラウンドだ！」

「そうはいかないわよ。お姉さんも本気出しちゃうから」

目の前には織斑先生に勝利したベリアの乗る『リベリオン』と黒い蒼い雫ブルーティアーズ。

強気の発言をした楯無も少しばかり警戒していた。

硬直する3つの影．．．周囲を包む静寂．．．鴉が鳴いたその瞬間、3つの内2つの

影は動き出した。

「ゼアアアアアアア!!」

「はああああああ!!」

『クライム・ベリア』対『更識 楯無』

『元・銀河皇帝』と『生徒最強の I S 操縦者兼ロシア代表』の試合は最終ラウンドに突入する……

## 第七話 『叛逆』VS『淑女』、完全決着!

「ゼアアアアアア!!」

「はああああああ!!」

同時に叫びながら距離を縮める二つの影はそれぞれの武器を持ち確実に距離を縮めていった。

「リーチは私の方が長いようね・・・貫った!」

先に動いたのは霧纏〈ミステリアス・レイディ〉の淑女を纏った楯無で右手に持っている蒼流旋を目の前のベリア専用機『リベリオン』目掛けて突き出した。

「フ・・・それが貴様の命取りだ!」

その言葉と共にリベリオンは霧纏〈ミステリアス・レイディ〉の淑女の上を飛んだ・・・いや、正確にはベリアの本来の姿『ウルトラマンベリアル』としての桁外れな脚力で上を『跳んだ』のだ。

「つ!?!・・・しまった!」

目の前の標的を仕留め損ねた楯無が目の前に見たのが壁ならどれだけよかつた事か・・・

そこにはビット4基とスターライトmkⅢの照準を楯無に構えている黒い蒼い〈ブルー・ティアーズ〉雫

だった。

本来ならビット兵器とスターライトmkⅢの同時稼働は無理なのだがこの機体はリベリオンの単一仕様能力である機体召喚で造られた存在・・・それ故に人間では不可能な同時稼働を実現していたのだ。

「ククク・・・その機体のいい名前が思い浮かんだぜ。影の様に黒き蒼い雫・・・シャドウ・・・影 雫だ」

霧纏の淑女の上を跳躍しながら着地するまでの間にベリアは自身の機体の単一仕様能力である機体召喚で造られた黒い蒼い雫に新しい名、影 雫を与えた。

そして、着地すると共に影 雫から5つのレーザーが霧纏の淑女に向けて放たれた。

「フツ・・・甘いわね」

そう言うとう楯無は右手を前に突き出した・・・その直後、楯無に迫っていた5つのレーザーは空中で軌道が変わり2つは地面に、残りの3つは上にそれた。

「水は光を屈折させる。それはレーザーにも同じことが言えるわ。だから、霧纏の淑女から放出しているエネルギー伝達用ナノマシンで構成されている水を使って軌道を変えさせてもらったわ」

静かな声で語りながら後ろに立つリベリオンに向けて蒼流旋を振り向きながら横薙ぎに払ったがりベリオンに掴まれた為にダメージを与えることは出来なかった。

「長々しい説明ご苦労。だが、軌道を変えられたならもう一度変え直せばいいだけだ」

「そんな事、出来るわけないでしょ。往生際の悪い事」

「確かに出来ねえな・・・俺はな」

ベリアの言葉の意味に気付いた楯無は上を向いた。

そこで見たのは上にそらしたレーザーが自分に向かつてきている光景だった。

「っ!? どういう事!」

楯無は襲いかかる三本のレーザーにもう一度水での屈折でそらそうと水のボールを張った。

それを見たベリアは計画通りと言わんばかりに微笑んだ。

次の瞬間、3本のレーザーの内2本が急に軌道を変えて上からでは無く左右から襲ってきた。

「レキシブル偏向射撃!? まだ、誰も出来ない理論上の物だと思ってたのに!」

「フン。その油断が命取りだ」

ベリアの言葉とともに左右の2レーザーがガラ空き胴を穿ち、発動した絶対防御により大きくシールドエネルギーを削られた。

しかし、それだけでは終わらずその衝撃で気が動転した楯無によって上に展開していた水のボールも消え、上からもレーザーが襲いかかってきた。

そのレーザーも直撃し発動した絶対防御により更にシールドエネルギーが削られた。しかも、頭部という事もあつてかさつきの胴の時よりシールドエネルギーを消費していた。

「クツ・・・お姉さん、少しピンチのようね」

霧纏の淑女に表示されている残りエネルギーは174、対するリベリオンの残りエネルギーは942。

圧倒的に違うエネルギー残量の中で楯無は苦戦を強いられているのに微笑んでいた。「フッフ・・・お姉さん、楽しくなってきた。ここまで楽しませてくれた君には私の本気を見せてあげるわ!」

その一言と共に指を鳴らした瞬間、リベリオンと影〈シャドウ・テイアーズ〉の周囲は爆発に包まれた。影〈シャドウ・テイアーズ〉は爆発によるダメージで光の粒子になり、消滅した。

「清き熱情。霧纏の淑女から放出しているエネルギー伝達用ナノマシンで構成されている水にはこんな使い道もあるのよ」

爆発の煙を切払って視界を確保したベリアを楯無は蒼流旋で貫こうとしたがあと少しの所で掴まれた為に貫くことは出来なかった。

そして、ベリアはりベリオンのパワーで蒼流旋を真ん中辺りで叩き折り先端を楯無の腹部に突き刺した。

しかし、突き刺された楯無は苦痛に呻くどころか腹部から血を出してすらいなかった。

「分身を作るのは得意なのよ。知らなかったでしょ」

背後から聞こえた楯無の声にベリアは過去の記憶から自分が死んだ鬨いの事を思い出した。

『鏡を作るのは得意だね。知らなかったかい』

言葉は全然違うのに思い出されたあの屈辱・・・背後から聞こえる声・・・似た手に騙された自分。

ベリアを刺激するには充分過ぎた。

「・・・ククク・・・クハハハハハ!!」

「な・・・何よ」

「ハハハハハ・・・この俺が、似た様な手に騙された。それが面白すぎてな・・・そして、とても苛つくんだよ」

地獄の底から聞こえてきたかの様な底冷えした声とベリアの纏う気が変わった事に気付いた楯無はさつきと同じ様に指を鳴らしデコイの自分を使って清き熱情を再び

使った。

「さつきと同じ手が俺に通じると思うか・・・くだらねえ」

「いや、今回は違うわよ。ファイナーレへの序章みたいなものよ」

「・・・そうか、ならばテメエの断末魔がファイナーレだ！」

そう叫んでベリアアは背後の楯無を仕留める為に後ろを振り向こうとしたが振り向く事が出来なかった。

「う・・・動けん！ 馬鹿な・・・」

「沈む床〈セツクヴァベック〉 霧纏〈ミステリアス・レイディ〉の淑女の単一仕様能力・・・そして、これで終わりよ」

そう言う楯無はベリアアの周囲に先程よりも散布した水を全て清き熱情〈クリア・パッション〉で爆発させた。

その威力はかなりのもので爆発した地点の近くでは爆発の炎が残っていた。

これで完全に勝ったと思った楯無は沈む床〈セツクヴァベック〉を解除して背を向けてピットに戻ろうとしていた・・・勝利のアナウンスを聞かずに。

「ゼアアアアアアア!!」

「しまっ!!」

上から聞こえる声に気付いた楯無が上を見るとそこには瞬時〈イグニッション・ブースト〉加速で加速しながら両足を異世界の蛇を従える鏡の騎士の決め技の如く動かし楯無に迫っていた。

あの強力な清き<sup>〈クリア・パッション〉</sup>熱情は確かにリベリオンのシールドエネルギーを大きく削ったが残りが多すぎた為に戦闘不能とはならずエネルギーを492も残していたのだ。

油断した所を突かれた楯無はその蹴りを避けきれず微かなシールドエネルギーしか残っていない霧纏<sup>〈ミステリアス・レイディ〉</sup>の淑女で受けてしまった。

結果的に蹴りの衝撃でシールドエネルギーは完全に尽き地面を転がった後、霧纏<sup>〈ミステリアス・レイディ〉</sup>の淑女は解除された。

『勝者、クライム・ベリア』

15分にも及ぶ激闘に勝敗を告げる機械音声<sup>〈メカニカルボイス〉</sup>が鳴り響いた後にベリアはリベリオンを解除して楯無に近づき、手を差し出した。

「……リベリオンのエネルギーを半分以上削ったのは褒めてやる。立てるか」

「あら、意外と優しいのね。ありがとう」

楯無が差し出された手を掴むとベリアはその手を上に上げ楯無を立たせた。

「はあく。それにしても負けちゃったかく。と言う訳で生徒会長の座は君の物よ、おめでどう」

「ケツ。そんなものに興味は無いからやらねえよ。勝手に続けてろ」

「あら、じゃあ代わりにお姉さんが一つお願いを聞いてあげるわ。何がいいかしら？」  
「簡単な事だ。俺達を無意味に探るんじゃないやねえ。分かったか」

「しょうがないわね。分かったわ、聞いてあげるわ」

その一言を聞くとベリアは楯無に背を向けてピットに向かった。

楯無はその背中を見つめて考えていた。

(調べるなどは言われたけどあの強さは気になるわね……)

ベリアがピットに消えるまで楯無はその背中を見つめていたがベリアがピットの向こうに消えると楯無もピットに向かつて歩き始めた。

「イタタ……少しは手加減してくれてもいいのに……」

楯無は先程の試合で痛んだ右腕をさすりながらつぶやくとピットの向こうに消えていった。

ベリアが手加減していたという事には気付く事もなく……

「ああ……疲れた」

「陛下、今回もお疲れさまでした」

あの試合から数十分後、夕食を摂った二人は部屋に戻り寛いでいた。

「ところでスライ……例の件はどうだった」

「ハッ。陛下の仰っていた通り、この世界では我々にそっくりな者達が闘う映画や番組がありました」

「・・・やはりか」

「はい。他にも『スーパードクター』、『仮面ライダー』等も同じ様にありました」

スライが映し出した画面には色とりどりの5人の集団が敵の怪物達と戦う画像や橙色の鎧を纏う戦士が良く似た紅い鎧を纏う戦士と罅迫り合いを繰り広げる画像が映し出された。

「・・・まあいい。ご苦労だったな、スライ」

「ハッ！ 陛下がお望みとあらば何時でもお申し付けくださいませ」

労いの言葉をかけるベリアにスライが何時もの様に忠誠を誓い終わるとベリアの携帯から着信音が流れてきた。

「ああ、俺だ。・・・そうか、用意は済んでるのか？ ・・・それは何よりだ。じゃあ、お前らもボロを出さずに頑張れよ。・・・切るぞ」

電話に出たベリアはしばらくやり取りをすると電話を切った。

「陛下、今のはもしかして・・・」

「ああ。多分考えてる事そのままだろう。明日からグロツケンとデスローグがこっちに来るようだ。用意も整っていると束から聞いた」

「そうですか。では、明日に備えて今日は早めに眠りましょうか。陛下もお疲れでしょうし」

「そうだな。お休み」

「ハッ。お休みなさいませ陛下」

そう言うのと二人は布団に潜り明かりを消し静かに眠りについた。

同刻、IS学園の総合事務受付では・・・

「これで手続きは終わりです。IS学園にようこそ、フエン 鳳 リンイン 鈴音さん」

「ありがとうございます。ところで、織斑 一夏つて何組ですか？」

手続きを終えたツインテールの少女、フエン 鳳 リンイン 鈴音は手続きをしてくれた女性にお礼を言った後にそう尋ねた。

「彼は1組よ。鳳さんは2組なのでクラスはお隣ですよ。そういうえば、彼はクラス代表になったとかなくてないとか」

「はあく・・・違うのか。あ、それなら聞きたいんですけど、2組の代表つて決まっていますか？」

「ええ、決まってるけど・・・どうかしたの？」

「あく・・・良かったら代わってもらおうかなって」

照れ隠しの様に頬を掻きながら理由を話すと女性は微笑みながら「内緒よ」と付け足して鈴に話した。

(1年ちよつと振りに会うけど忘れてないでしょうね……待ってなさいよ、一夏!)  
女性の話の話を聞きながら少女は久しぶりに会う幼馴染への思いを高めていった。

更に職員室では

「はあ、次も二人か……。しかも、また私のクラスに」

千冬は二つの書類を見ていた。

そこには二人の女性の写真と名前、それと専用機の名前が書いてあった。

(氷結 吹雪にデイスファイア・ローグ……。専用機は『グレイザー』に『ジェノア』か。これも多分、例の5機の内の2つだろう。これは束の仕業と見て間違いないな)

書類の項目を見た千冬は書類を机に置きコーヒを飲んだ。

(確か束曰くあの5機のコアは特別でナンバーにもEXを振っていたな。束め……。次は何をするつもりだ)

千冬は上を向き天井を見つめていた。

それは教師の目では無く現役時代に手にした称ブリュンヒルデ号を背負った第二回モンドグロツソの試合の時の様な鋭く美しい戦士の目だった。

束のラボ『名前はまだない吾輩は猫である』では

「グツくん！ デークくん！ 明日からの学園生活、ボロを出さない様に頑張つてね！」  
「俺やデスローグを絶対ボロを出す奴みたいにな言なよ。な、デスローグ」

東は必要最低限の荷物を纏めた鞆を持ったデスローグとグロツケンの二人に笑顔で話していた。

「ゴオオ」

「え？ 『それはお前だけだ』 だつて？」

「ゴオ」

「頷くなよ！」

「まあ、この中では一番ボロを出し易いな」

「ちよつ!? ヴィラニアスもそう思つてるのかよ！」

「ちなみに東さんもそう思つてるよ」

「・・・はあ、わーつたよ。気をつけるよ」

デスローグ、ヴィラニアス、東にボロを出しそうと思われていたグロツケンはがっかりとうなだれながらも返事を返した。

「ところでジャタールの野郎は？」

「あ、ジャーくんなら『隠れ蓑となる企業でも持つておいた方がいいだろうから買収か開業してくる』 っっていつて出かけたよ」

「はあ!? なんだそりゃ!」

「ジャタールの奴、すっかりと考えていたのだな」

「ゴオオ・・・」

「だな。しくじらねえ事を祈つとくか。じゃあ東、行つてくるぜ!」

そう言うのとグロツケングロツケンは小規模の吹雪、デスローグデスローグは小規模の豪火に包まれた後にそれぞれ人の姿となつて外に出ていった。

ある者は新しく始まる学園生活への思いと陛下への忠誠を

またある者は幼馴染に再開する喜びを

またある者はこれから起こる事であろう出来事に警戒を

それぞれの思いを胸に宿した行動の始まりと共に、夜は深まっていった・・・

## 第八話 転校生は和・洋・中？

「おはよう、一夏。もう大丈夫なのか？」

「ああ、昨日も念の爲につて事で休んでただけだからもう平気だぜ」

「そうか・・・お見舞いに行こうと思つたのだが・・・」

席に着くなり箸が話しかけてので返したら何故かしよんぼりしながらぶつぶつ言つてた・・・何故だ。

それにしてもやつぱり保健室のベッドつて少し硬いから体に負担があるな・・・保健室のベッドでベッドベッド（へつとへと）・・・うん、無いな。

「また下らない事を考えてるな、一夏」

「何か下らない事を考えてる様ですわね、一夏さん」

げ、何でバレたし。まさか女子つて皆、エスパーなのか？

「そんな訳ないだろ。お前は下らない事を考えてる時、直ぐに顔に出るだけだ」

・・・マジで？ だからつて心を読むなよ。恥ずかしいだろ。

「本当ですわ。ちなみに今は『だからつて心を読むなよ。恥ずかしいだろ』つて思つてますわね」

ウエ!? マジで当たってる・・・セシリア、恐ろしい子!

「は・・・恥ずかしいだ。い、一夏! ふしだらだぞ、こんな所でそんな事を考えるなど言語道断だぞ!」

「いやいやいやいや! そんな事考えてる訳ないだろ箒! 頭の中を見られてるようで恥ずかしいって話だ! な、セシリア!」

そう言つてセシリアの方を見たら何か顔を真っ赤にして何処か上の空だ・・・どうしたと言うんだ?

「おい、セシリア・・・」

「ハッ! だ、駄目ですわ一夏さん。こんな所でなんて。出来ることでしたら、二人きりの時に・・・」

・・・どういう事? と言うか、近くから凄い殺気を感じるんですが・・・

「一夏ああああ!! 成敗してくれ!!」

「誤解だアアアア!!」

? スパアアアアン! /

「痛つてえ!」

何だ、何時の間に箒は前にいながらも後頭部を叩ける技を身につけたんだ。しかも、ハリセンで・・・ん? ハリセン?

「全く何度も呼んでるのに気付かないなんて馬鹿なの？ 死ぬの？」

なんかすげえ聞いたことあるような声を聞いて後ろをむいたら懐かしいツイインタールがハリセンを持って立っていた。

「鈴………？ お前、鈴か？」

「そうよ。2組代表にして中国代表候補生、フアンリンセン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふつと小さく笑みを漏らしながらハリセンを肩に乗せる幼馴染……何て言うか……その

「すつごく似合わねえ。だいたいカッコよく宣戦布告したいならハリセンはやめとけよ」

「んなつ!? なんてこと言うのよ、アンタは」

おお、やっぱりこつちの方がしっくりくるな。さっきのは正直、軽く引いたしな。

「おい」

「何よ!？」

バシンッ！ 聞き返した鈴に痛烈な出席簿打撃が来た——宿那鬼の登場である。

バシンッ！

「痛つてえ！」

「誰が宿那鬼だ」

「心を読むなよ千冬姉!」

バシンツ!

「痛つてえ!」

「織斑先生だ。それと鳳、もうSHRの時間だぞ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。ほら、さつさと戻れ」

「す……すいません」

「す……」とドアへと向かう鈴。そういや昔から千冬姉が苦手だったな……なんでだ?  
?

「また後で来るからね! 逃げないでよ、一夏!」

何で俺が逃げるんだよ。

「さつさと戻れ!」

「は、はい!」

二組に猛ダツシユで帰っていったな。……うん、昔のままだな。しかしなんであいつはハリセンなんて持ってたんだ?

それよりも……

「あいつ、代表候補生になったんだな。初めて知った」

なんとなく口にした・・・のが失敗だった。

「一夏！ 今のは誰だ？ 知り合いか？ 随分と親しかったが」

「一夏さん!!? あの子とはどういった関係なんですか!」

箒とセシリアからの質問責めに・・・でも、いいのか？

周りは座っているぞ。なぜなら・・・

「貴様ら・・・席に着かんか!」

バシバシンツ!

「ツ~~~~!!」

ほら、伝家の宝刀?の『出席簿アタック』(命名:俺)が火を噴いた。

「え・・・えーと。とりあえず、席についてください」

山田先生の一声で二人は席について千冬姉は黒板横の壁にもたれかかった・・・そこ、

お気に入りなのか？

「え〜今日はこのクラスにまた転入生が入る事になりました」

へえ〜また転入生って事は四人目の男性操縦者でも見つかったのかな？

でも、それだと話題になってるからその線は無いか・・・女子も騒いでるって事は今

回も誰も知らなかったんだな。

「うるさいぞ、転入生と入れ違いにグラウンドでも走りたいのか?」

千冬姉の一言でクラス中が静まった。

ここは千冬姉が教官の軍隊なのか? ……意外としつくりきた。

バシンツ!

「痛つてえ!」

「織斑、目は覚めたか」

「は、はい」

一瞬思考を読まれたかと思つたが違つたらしい。

流石に思考を読む訳がないか。

「山田先生、そろそろ」

「あ、はい。それでは二人とも、入ってきてください」

二人か・・・ベリアとスライの時を思い出すな。

「失礼するぜ」

「失礼します」

あ、やっぱり入ってきたのは女子か。

まあ、しようがないか。

一人は青みがかつた銀髪で制服も改造したのか昔に見た朝の特撮番組の主役の服に似ているな・・・確か、学園が舞台のやつだったはず。色が違って黒の所が白で中のシャ

ツが青だから一瞬わからなかったけど。

もう一人は白い髪で普通より少し長めの制服を着ていておしとやかなお嬢様のようだな。何て言うかこう・・・俺の周りにはいないタイプだな。

「では、二人とも。自己紹介をお願いします」

「へいへーい」

「分かりました」

よく見ると二人とも赤い目なんだな。って事は、ベリアとスライの知り合いか？

「じゃあ、アタイからいくか。アタイの名は氷結こおりむすび吹雪ふぶき。吹雪で構わねえぜ。よろしく

！」

「デイスフィア・ローグ。好きに呼んでくれて構わないわ」

ふむ、氷結さんにデイスフィアさんか。あの時は勉強に必死でクラスメイトの名前を覚えられなかったけど

「それでは、デイスフィアさんと氷結さんは中央列の最奥の座席に座ってくださいね」

「あゝい」

「分かりました」

氷結さん、そんなに間延びした返事だと千冬姉からのって言うまでもないか・・・つて、避けた!?

「ほう、まさか躲すとは思わなかったな。今度からは返事には気をつけろ」

「ふいふ、そんな殺気立ってちや躲すのは簡単なもんすよ。織斑先生」

「・・・まあいい。さっさと席につけ」

「あいあい。了解しましたよ〜と」

まさか千冬姉の出席簿アタックを躲すなんて・・・もしかしたらデイスファイアさんも出来るのかな。

「この後、実習を行う。各自、着替えてアリーナに集合するように。わかったな」

「はい〜」

マジか。ここから更衣室まで遠いんだよな・・・いそがねえと千冬姉の出席簿アタックなんだよな。

「おーい、ベリアにスライ。更衣室いこうぜ〜」

〜織斑 side END〜

〜三人称 side〜

あれから数分後、1年1組はISスーツに着替えてアリーナに整列していた。

ISスーツを着ていないのはベリア、スライ、デイスファイア、氷結の四名である。

「よし、全員揃ったな。今回はISによる飛行と着陸をみてもらう。織斑、オルコット、



装着した瞬間、バックルの左側からダークブルーのベルトが伸び腰に巻き付いた後に右側に接続された。

そして、氷結は両腕を交差させてしばらく溜めた後に叫んだ。

「ハアアー、変身!!」

その叫びとともに交差させた両腕を交差を解きながら下に強く振り下ろすと同時にバックルを真ん中の線から左右にスライドさせた。

『カシヤツ』というスライド音を響かせながら左右に展開したベルトの真ん中にはXの様なデザインがあり、それが発光した後に氷結は専用機『グレイザー』を纏った。

デイスファイアは手にメモリを持ち、メモリ下部のスイッチを押した。

『JENO A!!』

「・・・CHANGE」

メモリから聞こえた音声を確認すると彼女は左腕につけている黒い長方形の箱の様なものにメモリを挿入し、黒い箱についているスイッチを押した。

『JENO A!!』

その音と共に赤く光り、光が収まるとデイスファイア専用機『ジェノア』を纏ったデイスファイアが現れた。



セシリアが成功した時には感心したが一夏の墜落を見た時に氷結は爆笑していた。

「アハハハハ！ 墜落してんじゃねえか、クレーターも出来てるしよ。あく笑いすぎてお腹が痛いぜ」

「笑いすぎるのもいいが俺たちも行くぞ」

「・・・なら、最初に行かせてもらう」

「あーじゃあ、次にアタイがいくぜ！」

「なら、私は3番目。陛下が最後ですね」

「どうでもいいから、さっさとしろ」

「ハッ」

返事の後にディスプレイアは下に向かって一夏より速い速度で降りたがしつかりと10センチちようどで停止した。

その後にくくように他の3人はほとんど下降していった。氷結は頭から突っ込むもののしつかりと10センチで完全停止。

スライは普通に10センチで完全停止。

ベリアに至っては『5センチでやってやる』って宣言した後には宣言どおりの5センチで止まった。

「さて、次は武装を展開してもらおう。織斑、やってみろ」

その後も授業は続いた。

セシリアのスターライトmkⅢの展開やインターセプターのコールで織斑先生が注意をした程度で4人は完璧にできていた。

〈数十分後〉

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

その一言とともに授業が終わると6人はISをそれぞれの待機状態に戻した。

ISスーツに身を包んだままのセシリアと一夏とは違って4人はいつもの制服姿になっていた。

「そういえばベリア達のそれってさ。エネルギー使うんじゃないのか?」

「使うらしいが別に構わねえからな。なあ?」

「ええ、この程度微々たるものですし」

「それに、人前であまり着替えたくないしな。なあ、デイスファイア」

「・・・それは同感」

「ベリアとスライならわかるが吹雪さんとデイスファイアさんもそんな理由なんだ・・・」

「そういう事。じゃあな、織斑。グラウンド整備、一人で頑張んな」

「あ! ちよつと待ってくれ! 少しくらい手伝ってくれ・・・って、行っちゃった」

そんなこんなで残る午前中の授業を休み、織斑は一人でグラウンド整備に時間を費や

したのであった。

## 第九話？ 『マスゴミ』？ いろいろ 『黛』 です

一夏がグラウンド整備を終えて昼食をW幼馴染と金髪ドリルの3人と食堂で食べている頃、ベリア達といえは。

「陛下〜！ 会いたかったすよ〜！」

「うるせえぞグロツケン！ 昨日も電話で喋っただろうが」

「・・・はあ」

「デスローグ、大丈夫ですか？」

「・・・なんとか」

IS学園に入ってきた部下達と屋上で談笑していた。

既に周囲の気配を探った後なのでそれぞれを本当の名で呼んでいる。

「だって！ 俺達は陛下に命を捧げたんすよ。その陛下に会えないなんて辛いんすよー！」

「分かったから涙目で大きな声を出すな。俺様にあらぬ疑惑がかけられるだろうが」

「・・・そしたら出元を潰します・・・跡形もなく」

「俺もデスローグに同意すよ、陛下ー！」

「もちろん、私も同じ考えですよ。陛下」

「はあ・・・頭が痛てえぜ」

こめかみを押さえながらもそう言うもののベリアは何処か嬉しそうだった。

「ところで、ジャタールはどうだ? あいつだけここに来れないからな」

「あ。それなら束から聞きましたぜ。陛下」

「・・・会社を立ち上げてくるそうです」

「会社を?・・・なるほど、そう言うことですか」

ベリアの質問に氷結とデイスフィアが答えるとスライが納得したように頷いた。

「察するにこの世界での俺達の後ろ盾となるものと拠点を同時に手に入れるって事だろ。今度、何か奢るか」

IS学園に入れないが自分の役に立ちたいと思つて会社を立てようとするジャタールにベリアは少し嬉しく感じた。

「・・・陛下。束からこちらを預かつて参りました」

そう言うのでデイスフィアが制服のポケットからディスクの入ったケースを取り出し、陛下に渡した。

「ほう・・・中身が何かはわからんが後で見えるか。お前達、放課後に俺とスライの部屋に来い。多分、全員で見た方が良さそうだからな」

「ハッ」

放課後に集まる事を決めた四人はそれぞれ買って置いた飲み物を飲んだ。

「何で俺じゃなくてデスローグに渡したんだろうな？　なあ、スライ」

キンキンに冷えたお茶『プト茶ラ』をある程度飲んだ氷結は口から缶をどかしスライに話しかけた。

「多分、貴方よりデスローグの方が确实だと思ったからではないですか」

スライは『十六夜茶』を飲み干すとそれをゴミ箱に投げ入れながら答えた。

「まっさか．．．もしかして、マジなのか。デスローグ」

「．．．」

デイスファイアは氷結の問いに首を縦に振った後、再び炭酸飲料『魔術師の赤』マジシャンズ・レッドを飲み始めた。

「はあ．．．まさかそんな理由だなんて．．．はあ」

衝撃の事実を知った氷結はその場で三角座りになると地面に『の』の字を書き始めた。  
「全く．．．放課後に何か買ってやるから機嫌直せ」

「本当ですか、陛下！　マジなんですか！」

ベリアはユグドラ汁ソーダ『主任メロン』を飲みながら言うように氷結はさつきからの態度とは打って変わって子犬の様な笑顔でベリアに迫った。

「マジだからさっさと機嫌直せ。お前も役に立つからな」

「了解しましたぜ、陛下!」

氷結の頭を撫でながらそう言うベリアに氷結は勢いの良い返事をした後に心地よさに猫の様に目を細めた。

「・・・誰か来るぞ。お前ら、バレルなよ」

誰かが近づく気配を察知したベリアは氷結を撫でるのをやめ、全員に声をかけると再び、ユグドラ汁ソーダ『主任メロン』を飲み始めた。

他の面々も右手でOKサインを出すと読書を始めたり、飲み物を飲み始めた。

それからしばらくして、扉のある方向からカメラのシャッター音が聞こえてきた。

「ジャツジャッ。新聞部です。噂の4人の転校生って事で取材をしてもいいかな。ちよっ!カメラは駄目!カメラは!」

「勝手に撮ってんじゃねえよ・・・カメラ、潰すぞ」

「ごめんなさいごめんなさい!謝るから、カメラだけは!カメラだけは!」

ネクタイの色から見て二年であろう新聞部の女子がカメラで4人の集合写真を撮った・・・が、急に接近したベリアにカメラを掴まれ、カメラから聞こえる聞こえてはいない音と脅しの2つの目の前に呆気無く破れ、謝罪していた。

その謝罪を聞くとベリアはカメラを掴むのをやめて女子の方を見た。

「つたく。で、何の用だ」

「陛下。その前に名前を聞きませんと」

「あく……私は新聞部副部長『黛 薫子』よ。よろしくね」

「では、黛先輩。何かご用で？」

「えーとね。男性操縦者の君達二人とそこの彼女達を取材に来たの」

薫子はそう言うのと奥でまったりしている二人を指さした。

「え？ アタイらもかい？」

「……なんで？」

「それはね。ほら、男性操縦者の二人と随分親しいからさ……売れると思って」

4人は薫子の回答を聞くと溜息を吐いてから同じ言葉を呟いた。

「「……マスゴミ」」

「マスゴミじゃなくて黛よ。てなわけで、取材させてくれない？ やってくれればこれ

くらい出すけどどう？」

そう言つて提示された額は学生の出す額としては妥当なものだったがベリアの納得のいく額では無かった。

「これならお断りだな。お前ら、戻るぞ」

「「ハッ」」

「ま、待って! いくらなら取材させてくれるの」

「うくん。そうだな・・・スライ、こっちに來い」

「ハッ。なんでしょうか陛下」

「ちよつと頼みたいことがあつてな・・・」

ベリアはスライを呼び寄せると二人で薫子に背を向けて話し始めた。

「と、いうことだ。頼むぞ」

「・・・なる程。分かりました。では、私は準備をしてきます」

そう言うときスライは屋上を後にした。

「さてと、話を戻すか。そうだな・・・売上の7:3でどうだ?」

「7:3?・・・こつちが7?」

「んなわけあるか。こつちが7だ」

「んく・・・ちよーつと考えさせてねく。7:3か」

ベリアの提案に頭を悩ます薫子を尻目にベリアは氷結とデイスフィアの二人と会話していた。

「陛下。いいんですかい? アタイ達を取材させて」

「・・・別にお金はいらぬのでは?」

「馬鹿かお前ら。その内、嫌でも写真に撮られるんだ。ならば、今のうちに慣れとけばい

いだろ。それに、金はなくて困る事はあれど有りすぎて困る事はないぞ」

「なら、やろうぜ。Des・・・デイスファイア」

「・・・私は陛下の意のままに」

話に区切りがついた頃にスライが一枚の紙を持って戻ってきた。

「陛下。頼まれた物、用意致しました」

「そうか。マスゴミ、決まったのか？」

「黛です。まあ、メールで部長に聞いたらOKだったのでその条件、のませてくださいませよ」

「なら、この書類にサインを」

ベリアに聞かれ条件を飲むと答えた薫子はスライから渡された書類にサインした。

「じゃ、サインもしたしドンドン取材させてもらおうよ」

そう言つてボイスレコーダーを突きつけようとした瞬間、無情にも昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「え〜！ まだ何も取材できてないのにー！」

そう言つて項垂れる薫子にベリアは渋々、救いの手を差し伸べた。

「はあ・・・放課後、1212号室に來い。その時に取材させてやるから」

その言葉を聞くなり薫子は顔を上げもう一度確認すると「絶対に取材させてよね〜」

と言ひ残し、屋上から去った。

「さて、俺達も戻るぞ。二代目白騎士の攻撃は面倒だからな」

「ハッ」

ベリアの一言に全員が賛同の意を示すと彼らも屋上を後にした。

この時、彼らが空き缶入れを見ずに投げた缶は全て入ったと言う事は余談である。

↳ 数時間後

「キング・クリムゾン!!」

「陛下! どうなされました」

「・・・いや、なんとなく」

「・・・へ?」

今は放課後。彼らは1212号室で薫子が来るのを待つていた。

「お前ら、先に言っておくがヘマはするなよ」

「承知いたしております」

「勿論、ちゃんんとわーってますぜ。な、デイスファイア」

「・・・その通り」

そう言いながら部屋で食べたり飲んだりすること数分後。

「すいませ〜ん。新聞部です」

入口のドアをノックした後に聞こえてきた声に反応してスライはドアを開けた。

「お待ちしておりましたよ。中へどうぞ」

「じゃあ、お邪魔しますね」

そう言うのと薫子はスライに促されるまま、中に入っていた。

「陛下、薫先輩をお連れしました」

「そうか。ご苦労だったな。ゆっくり休んでろ」

「ハッ」

そう言うのとスライは椅子に腰掛けるベリアの右斜め後ろに立った。

椅子にベリア、その足元に氷結とデイスフィア、ベリアの右斜め後ろにはスライ。

薫子はその光景に軽く神々しさを覚えた。

ただのIS学園のどこにでもありそうな椅子が玉座に見えるくらいに。

「さっさと取材を終わらせるぞ。俺様はゆっくりしたいんだ」

「・・・あ。すいません。じゃあ、今から取材させていただきますね」

と言う訳で『薫 薫子のスーパ―取材教室』が始まった。

次からはその時の事を記事にした特集で書かれたものをのせるとしよう。

薫：では、まず最初に自己紹介をお願いします。

ベリア：クライム・ベリアだ。よろしく。

スライ：メフィールーク・スライです。よろしくお願いたします。

氷結：氷結 吹雪だ。よろしくう!

デイスファイア：デイスファイア・ローグよ。よろしくね。

黛：はい。よろしくお願致します。

Q1：ご出身はどこですか?

ベリア：覚えてないな。まず、親の顔も知らねえ。

スライ：何処でしたかね。何せ色々な所を移動してましたから。

デイスファイア：・・・暑い所。

氷結：そりや勿論、うてや・・・日本かな!

Q2：専用機はどこで貰ったのですか?

ベリア：答えられないな。機密情報だからな。

スライ、デイスファイア、氷結：同じく。

Q3：皆さん、ベリアさんとはどういった関係で? (ベリア除く)

スライ：陛下(ベリア)の部下です。

デイスファイア：主と従者の関係です。

氷結：陛下は陛下だろ?

Q4：ベリアさん、真相は?

ベリア：…昔に色々あつてな。それ以来、俺に何故か忠誠を誓つてるんだ。

Q5：今の世の中について一言言うならば？

ベリア：くだらねえ。

スライ：呆れますね。

氷結：うゝん。つまんねえ！

デイスファイア：屑の匂いが充満してる。

Q6：Q5での解答の理由は？

ベリア：I Sに乗らないと強くなえ奴らが偉そうにしているからな。

スライ：それに加えて、今の行き過ぎた女尊男卑・・・呆れますね。

氷結：気まぐれ一つで牢獄行きとかさ、バツカじゃねーの。それに抵抗も出来ねえ男もだけどさ。あ、陛下とスライは違いますぜ。

デイスファイア：結局は屑ばかり・・・その匂いのおかげで鼻が曲がりそうよ。

Q7：もしも、ベリアくんがボロボロに傷つけられたら？

スライ：ありえないでしょうが、もしそんな事があれば・・・確実にそいつを殺します。

氷結：陛下に手を出した事を後悔させる時間も与えずに。

デイスファイア：早く殺してと懇願するまでに痛めつける・・・そして、殺す。

ベリア：お前らの気持ちはよく分かったから、早く展開したISを解除しろ。

Q8：逆に、皆がボロボロにされたらベリアくんはどうする？

ベリア：きつちりとお礼をしてやる。・・・そいつの命にな。

スライ、デイスファイア、氷結：陛下！我等はずっと！陛下と共に！

薫子：おお。素晴らしい忠誠心ですね。

Q9：絵になる写真を一枚お願いします。

一枚目：果物ナイフを舐めるベリアのカッコイイ写真

二枚目：白い手袋をしてカップにコーヒーを注ぐスライの写真

三枚目：カメラに向かって満面の笑みでピースする氷結の写真

四枚目：椅子に座って読書をするデイスファイアの写真

Q10：では、最後に皆さんから一言ずつどうぞ。

ベリア：俺の発言が気に食わなかったなら何時でも相手になってやるからかかってきな。覚悟してな。

スライ：私も、いつでも相手になりますよ。

氷結：まあ、仲良くしてくれるんならよろしく頼むぜ。陛下の悪口言ったらシめるけど。

デイスファイア：とりあえず、これからもよろしくお願いするわ。

薫子：皆様、お疲れさまでした。

尚、このインタビュウの掲載された特別版の初版は高額ながらも直ぐに売り切れとなり少し値段を上げた二版も瞬く間に売れた。

発売から数日後、ベリアの下には厚い封筒を持った薫子の姿があつたとかかなかつたとか……

そして、薫子の去つた1212号室では……

『……と言う訳で、お願いね。じゃー！』

再生された映像で言っていた束の言葉に一同、ため息をついていた。

「全く、束博士……」

「まあ、そう言うなよスライ。俺達は見てるだけなんだからさ。な、デスローグ」

「……その通り」

「まあ、あの程度の玩具が壊せないようじゃ遊べないからな……ククク」

再生された映像で束が何を言ったのか……今、それを知っているのは彼らだけである。

## 第九話 クラス対抗戦

「はあゝ……鈴のやつ。あの時、なんで急に怒り出したんだよ」

一夏は誰もいない更衣室で着替えながら呟いていた。

事の始まりは数週間前に遡る……

あの日（※第八話『転校生は和・洋・中？』）の放課後、色々であった『織斑一夏クラス代表就任パーティー』がお開きになった夜の十時過ぎに鈴と二人で廊下を歩いていた時の事である。

ちなみに箒は、「明日も授業があるからな。あまり遅く起きてると明日に響くからな」とセシリアもセシリアで、「夜更かしは美容の天敵なのですわ」と言つて先に戻っているのではないか。

「いやゝ。凄かったわね。一夏のクラスメイトって個性的だね」

「ああ。2シヨットの時に皆が入ってきた時はびっくりしたな」

『結局、全員と2シヨット撮ってたよね。もうき、商売に出来るんじゃない？』

『そんな事をするつもりは無いさ。何か自惚れてるみたいで嫌じゃん？』

『まあ、そうよねゝ』

『鈴だつて撮つてもらつただろ。もし俺と一緒に撮るのにお金がいるとしたら嫌だろ？』

『あ、あたしは別に嫌なんかじゃ・・・』(ボソツ)

『ん？ どうかしたか？』

『ななな何でもないわよ！』

『？ 何でもないならいいけど。それにしても昔に戻つたみたいだな。こうやって馬鹿騒ぎしてさ。弾と数馬もいれば完璧だな』

『一夏。アンタ、自分が特殊な事例つて事を忘れてるわけじゃないでしょうね？』

『それはそうだけどさ。ベリアとかスライを見てると意外にもっと居るんじゃないかな  
くつて』

『まあ・・・それもそうね』

ここの他愛のない会話をしていた時に鈴がモジモジしながらで一夏に話しかけた。

『ねえ、一夏。あの時の約束・・・覚えてる？』

『あの時？』

『そう。あの時の約束』

『ああ、確か、鈴の料理の腕が上達したら毎日酢豚を』

『そう。それぞれ！』

『おごつてくれるってやつか?』

『・・・はい?』

『だから、鈴が料理出来るようになったら俺に飯をご馳走してくれるって約束だろ?』

『・・・』

『いやしかし、俺は自分の記憶力に感心し——』

—ゴスツ—

『うぐつ。な、何すんだより・・・ん』

鳩尾への強烈な一撃で床に伏した一夏は鈴に抗議しようと顔を上げた：

そこには養豚場の豚を見るかのように冷たい目で一夏を見下ろす鈴の姿があった。

『女の子との約束を忘れるなんて最低・・・死ねば?』

鈴はその一言だけを言うと寮の自室への道を歩いて行った。

一夏はその後、しばらくしてから鳩尾を抑えながら自室に戻った。

そこから今日までの間、一夏は鈴に出会っても避けられるか無視されるだけだった：

回想終わり

「はあ・・・とりあえず、これが終わったら謝るか」

そう結論つけて更衣室を出た一夏はピットに向かう途中に・・・

「あ、鈴・・・」

「・・・」

鈴に偶然出会った。

そして、次に出た言葉は・・・

「すまん！ 約束の事、間違ってたみたいだし・・・この通り！」

謝罪の言葉だった。

そんな想い人の間抜けな姿を見た鈴は次第に怒りが呆れへと変わっていた。

「：はあ。もういいわよ。許してあげるわ」

「本当か！ サンキュー鈴！」

「全く・・・単純なんだから」

「あ。そういえばあの約束の意味ってもしかしてプロP」

「な!? 何言ってるのよ！ バツカじゃないの！」

「じゃあ、どういう意味なんだ？」

「そ・・・それは」

「それは？」

顔を赤らめながらも意を決して約束の意味を話そうとした時

《これより、クラス対抗戦一年生の部、第一試合を始めます。選手はピットに来てくださ

い》

「げつ。やつべえ、もう始まるのか」

「ま・・・待ちなさい一夏！」

「なんだよ鈴。早くしないと始まるぞ」

「約束の意味。あたしに勝てたら話してあげるわ。ただし、負けたら昼ごはん一週間奢りね。じゃー！」

「あ、おい！・・・行っちゃまった。おっと、早くピットに行かないとな」

アナウンスに邪魔された鈴は一方的に賭けを取り付けて顔を真っ赤にしながらピットへと走っていった。

一夏も第一試合に出ることになっていたので鈴とは反対方向のピットに走った。

~~~~~

ベリア達4人はアリーナへ観戦という名目で現段階のクラス代表達の実力を見ようと移動していた所を彼らを探していた千冬に捕まった。

「ここにいたか。ベリアにスライ、それと氷結にデイスフィア。貴様らに来客だ」

「ああ。来客だと？」

「織斑先生。それは絶対ですか？」

「いや、来客との面会は生徒の自由だ。場所が場所なのでな。それと、こんなものを預かっている」

そう言うと千冬は一枚の封筒を取り出してベリアに渡した。

ベリアは封筒を手に取ると中身を取り出し、ざっと中身に目を通すとそれをポケットにしまった。

「織斑先生、悪いが俺達はこの来客の所で試合を見させてもらうがいいよな？」

「ああ、別に構わん。だが、粗相の無いようにな。この学園はいい意味でも悪い意味でも注目されているからな」

「チツ。面倒だな。行くぞ、お前ら」

「ハッ」

そう言うとベリアは三人を連れて来客のいる来賓室へと歩き出した。

用の無くなった千冬もそのまま管制室へと歩き出した。

「ところで陛下、先程の封書の差出人はいつたい？」

歩きだしてしばらくたった後、まだ着かぬ来賓室へ向かっている時にスライがベリアに気になっていた事を口にした。

氷結とデイスフィアもそれについては同じ思いなのか首を縦に降っているとベリアは歩きながら答えた。

「会えば分かる・・・ほら、着いたぞ」

ベリアは一室の扉の前で立ち止まった。残り三人も急に立ち止まったベリアより半

歩ほど遅れてしまった為にぶつかり合ったが、しっかりと体制を立て直して扉の前に立った。

企業や各国のトップが安全に観戦出来るように作られている来賓室。

毎年、クラス対抗戦を見に来る各国のトップや企業は少なく、その先にある学年別個人トーナメントで成長を見たり、スカウトをしに来る事が多い。

しかし、今年は例年とは違いクラス対抗戦を見に来る企業や国は多かった。

それは、男ながらにしてI Sを操縦できる人物の存在が大きい。

そんな数の多い来賓室の一室の前に4人は立っている。

壁に表示されているのは『Seven's Sins Corporation』の文字。

スライ達が首を傾げるなか、ベリアはドアノブを下に倒し中に入ってしまった。

「失礼するぞ。」

「これはこれはベリア様と他の皆様。よくぞお越しくできました。」

室内ではスーツに身を包み紺色のフレームのメガネを掛けた女性が深々と頭を下げていた。

「あの・・・いったいどちら様ですか？」

「ああ、そういえば忘れていましたね。私、こういうものです。」

スライが尋ねると女性は胸元にあるポケットから名刺を取り出し、スライに渡した。

「『Seven's Sins Corporation』 IS 開発部門主任兼 CEO

『銅獄どうじやく一落かずらく』・・・なる程」

「ん？ どういうことだよ。おいスライよく何かなる程なんだ？」

「・・・大体わかった」

名刺を受け取り三人がそれぞれ別の感想を抱いてる間、ベリアは一落と会話をしていた。

「一落、この部屋のカメラは？」

「全て細工を施してあります。音声は拾えませんし映像もただ普通に話している風に見える様にしてあります」

「上出来だ・・・東、お前もここにいるんだろ」

「あははく。やっぱりわかっちゃったか」

ベリアの発言からしばらくして何も無かった壁から布を持った東が現れた。

「これで予想が確証になりましたね」

「・・・右に同じく」

「・・・？」

一人、理解できぬまま首を傾げている氷結に銅獄は簡単なヒントを与えた。

「全く、これしきの事もわからないのかグロツケン」

「何で正体知ってんだ!? ん?・・・この名前・・・あゝ! お前、ジャタールか!」

「ギョポポポポ。ご名答」

やっとの事で理解した氷結が銅獄をジャタールと呼ぶと銅獄は手から液状のブロンズを噴水のように出した。

「で、何で俺様やスライ達を呼んだんだ?」

ベリアはその一言を発すると来賓室に置かれているソファアに腰を落とし、テーブルに置かれていグラスを手に取り、客人用のシャンパンのコルクを開けてグラスに注ぎ、飲み始めた。

「ハッ。隠れ蓑として設立致しました『Seven's Sins Corporation』の企業代表として形式上、契約を結んでいただきたく参りました。」

「ほう・・・見せてみる」

「ハッ!」

返事と共に銅獄は首飾りを外して机の上に置いた。

その瞬間、首飾り中央に位置する赤色の球体から空中に何かの文章が表示された。

「・・・『Seven's Sins Corporation』。見る限り、いろいろとやっているようですが大丈夫なですか?」

「スライの不安も尤もだな。本当に大丈夫なんだろうなジャタール。」  
「安心せい。私の経営に不備などない」

スライや氷結に胸を張って答える銅獄を他所にベリアはシャンパンを飲みながら何時の間にか始まっていた一夏と鈴の試合を見ていた。

そして、その横では東が同じように試合を眺めていた。

「おう。いっくん、白式の操縦が上手くなっているね」

「フン。まだまだ俺様には遠く及ばんがな」

「それはしょうがないよ。だって、素のスペックが違うじゃん」

「それもそうだったな。・・・東、『ヤツ』の用意は出来てるんだろうな？」

「もっちろん！ それと、前の動画通りに今回は何もしないでよ」

「わかっている。お前がOKサイン出すまではやらねえよ。そっちこそ、ちゃんと回収用意はあるんだろうな？」

「ヴィーくんに頼んであるから問題無いよ。」

「ならいい。面白いショーを見せてくれよ、織斑」

そう言うのとベリアは再びシャンパンに口を付けた。

銅獄がスライや氷結と話し、デイスフィアは専用機の手入れ、東とベリアは試合の観

戦。

学園の用意した来賓室の一室はIS時代最強の戦力がほぼ揃っていた

俺は必死に戦っていた。

どちらも相手のデータがない状況から始まったこの試合。実力で言えば鈴の方が有利なのは確実。でも、そんな俺も龍砲の射線を躲して攻撃のチャンスを手に入れる機会が増えてきた。

後は、零落白夜とこの一週間で身につけた『アレ』を使えば鈴に勝てるかもしれない。いや、絶対に勝つ。実力に差があるならそれを埋める勝利への渴望と意思で押し切る。

それがこの俺・・・織斑一夏のやり方だ！

「鈴」

「何よ」

「本気で行くからな」

俺が真剣な顔で鈴を見ると鈴は俺の気迫に押されたのか曖昧な表情をしていた。

「な・・・何よ。そんなこと、あたりまえじゃない。・・・とにかく、格の違いつてやつを見せつけてやるわよ！」

鈴のその台詞に合わせて両肩の龍砲がスライドした。俺は左右に少し躲した後、『アレ』・・・この一週間で身につけた技能『瞬間加速』を使った。

急激なGに意識が持っていかれそうになるのをISの操縦者保護機能で防ぎながら、同時に零落白夜を発動させて鈴に迫る。

この奇襲は一度しか使えない。失敗すれば龍砲とあの青龍刀のコンボでやられる…ならば！

「うおおおおっ！」

この一撃で決める！

鈴に刃が届きそうになつた瞬間…

—ズドオオオオオオンツ—

とてつもなく大きな衝撃がアリーナ全体に走つた。

鈴の龍砲…違う、威力も範囲も桁が違う。

しかもステージ中央から黒煙が上がってアリーナが少し暗くなっている。

どうやら『それ』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃波らしい。

「…何が起こっているんだ」

状況が分からず困惑する俺に鈴からプライベートチャンネルが飛んできた。

『一夏、試合は中止よ！ 直ぐにピットに戻って！』

そんな事は出来ない。そう言おうとした瞬間、ISのハイパーセンサーにある表示が出てきた。

—警告—

ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

「なっ——」

アリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている。それを貫通する攻撃力を有する装備を持った機体が乱入、こちらをロックしている。

つまり、ピンチというやつだ。

そう思った瞬間、一つの熱線が遮断シールドに開けられた穴へと放たれステージ中央の黒煙が晴れた。

黒煙が晴れて熱線を放った所属不明の機体を確認した時、俺は驚きを隠せなかった。

少し離れた所にいる鈴も同じ表情だろう・・・なぜなら。

所属不明機は姿からして異形だった。黒に近い灰色のスーツに肩と頭が一体化したような形に、大きくつま先より長いだらう腕。

そして、何より特異だったのがそのISがベリア達とは違って顔が完全に見えない『フルスキン完全装甲』だと言う事。

本当の戦いはまだ始まったばかり・・・

## 第十話 機械人形をぶつ壊せ！

山田先生の避難勧告を無視して戦い始めてから何回の攻撃が躲されただろう・・・その度に何度の拳を受けただろう・・・

目の前の敵は一度も傷ついていない。

攻撃の度に躲され、あの巨大な拳を喰らう。

少し離れた距離から援護してくれている鈴の龍砲も回避され、その度に腕や肩にある砲門からレーザーを放ってくる。

俺達も躲しはするものの数回は掠ったり被弾する。

その為、こつちの『S E』シールドエネルギーは確実に削られていく。

俺と鈴のS Eは既に3分の1を切っている。

その点、敵は攻撃を全て躲しているからS Eが減ってない。

それどころか呼吸が乱れる様子もない・・・呼吸が乱れていない・・・まさか!?

「あちゃー。まだいつくんには早すぎたか〜」

ただ一つ、防護シャッターの降りてない来賓室。

その来賓室で束は目の前で起きている戦闘を見ながら笑っていた。

「だろいな、束。見ろよデスローグ、また外しているぜ」

氷結は再び攻撃のチャンスを外した一夏を笑いながらデスローグに話しかけていた。

「でも、さつきとは動きが違う」

「ん?・・・そう言われてみれば、確かに」

デイスファイアの言葉でもう一度よく見た氷結はある一つの違いに気付いた。

それは、先程まで斬り下ろしや斬り上げをしていた一夏の攻撃方法が横薙ぎや雪片式型での突きを主体にした攻撃方法に変わっていたのだ。

「なる程、そういう魂胆ですか」

「スライ、貴様も気付いたのか」

「えく何々? ジャーくんのスークくんは何か分かったの?」

それを見ていたスライが何かに気づき、それに先に気づいていた一落がスライに話しかけると束は何がわかったのか聞こうと二人の方を向いた。

「ええ。彼は、自分の仮説を証明する為の攻撃をしています」

「仮説の証明?」

「あの少年は『もしかして、あのISは無人機なのではないのか?』と言う一つの仮説を

証明する為に攻撃方法を変えている」

「なる程♪ 流石、いっくんだね。じゃあ、そろそろ例のシステムのタイマーを「五分後だ」・・・へ？」

何かのシステムの電源を入れる為に空中投影型のコントローパネルを展開した束にソファアに座ってシャンパンを飲んでいたベリアが声をかけた。

「ベークン。何で、五分後なのさ？」

束の言う事も尤もである。何故、ベリアは5分後と言ったのか。それはスライ達にも分からず彼らも束と同じ質問をするつもりだった。

「織斑があれを無人機と決定づけるのに三分。あのチビと作戦を立てて実行しようとしてもらうのに一分。そして、予想外の展開とトドメに一分の計五分。その五分後に起動するようにしておけ」

「うくん・・・ベークンが言うならそうなんだろうね。じゃあ、5分後にセットしておくね」

ベリアの発言に束が頷くとコントロールパネル中央のタイマーを『5分』に設定した。

束の操作していた中央タイマーの表示の上には設定した5分後に起動するであろうシステムの名前が書かれていた。

その名は・・・『Imperializer System』

(さあ、いっくんの強さをこの束さんに見せてよね♪)

設定し終えた束は再びアリーナで戦う一夏に目を向けた。

ベリア達5人も同じくアリーナでの戦闘に目を向けている。

6人にとってこの戦いなど・・・前菜にも満たない。

「織斑君！ 鳳さん！ 応答してください！ 二人とも！ 応答してください！」

第二アリーナの管制室では麻耶がいまだに二人へ連絡を取ろうとしていた。

しかし、戦っている二人はISの秘フライベイト・チャンネル匿回線を双方のアクセスしか許可していない

為、絶対に応答することはない。

「山田先生、少し落ち着きたまえ」

「織斑先生！ 何をのんきな事を言ってるんですか！ 織斑先生は弟さんが心配では無いでs「心配に決まっているだろ！ だが、現段階ではどうする事も出来ない！」：すいません」

麻耶は自分の発言が失言と言う事を素直に認め、謝った。

現在、この第二アリーナのシステムステータスは遮断シールドレベルが4に設定され防護シャッターが閉まっており、ドアも全てロックされて出入りが出来ない。

第二アリーナは現在、出入りが出来ない閉鎖空間になっていた。

「現在、三年の精鋭がシステムクラックを行なっている。ロックが解除され次第、私は打鉄を纏って出るぞ」

「織斑先生……」

「止めようとするなよ。唯一の身内を失うくらいなら……私はこの世界を壊したつて構わん」

拳を握り締めそう言う千冬に麻耶は笑顔で答えた。

「誰も止めようなんてしませんよ。その時は、私もお供しますよ」

「……すまないな。取り乱して」

「構いませんよ。ところで織斑先生、弟さんが大事ならもう少し出席簿で叩く回数か威力を抑えてみては？」

「それは出来ん。一部の生徒だけを鼻肩していると思われたら面倒なのでな」

「他の生徒の叩く回数や威力を減らすという案はないんですね」

「当然だ。特に私たちのクラスはこれからも騒がしくなりそうだからな」

千冬の言葉にそうなる可能性を感じた麻耶は苦笑を浮かべてこの会話を終わらせた。

（死ぬなよ一夏。お前が居なくなったら……私はこの世界を破壊するからな）

胸に一つの決意をすると大きく息を吐いてから麻耶に声をかけた。

「山田先生。一緒にコーヒーでも飲んで気を落ち着かせたまえ」

「そうですね。でも、織斑先生。それ、塩ですよ」

「・・・何」

千冬は自分がカップに入れたコーヒーに砂糖と思って入れていた物質を乗せているスプーンがどの箱に入っていたか確かめた。

確かに砂糖の箱はあった・・・が、スプーンは箱に入ったまま。その代わりに砂糖の箱の横にある大きく『塩』と書かれた箱のスプーンが無かった。

箱にないスプーンは今、千冬が手にしている。

「何故こんなところに塩があるんだ」

「さあ? でも、大きく『塩』と書いてありますけど・・・やつぱり、弟さんの事が心配で周りが見えなくなつて「山田先生」ハイイツ!」

少しドスの効いた声で名前を呼ばれた麻耶は怯える様な声で返事をした。

「コーヒー、どうぞ」

「でも、それって塩入り・・・」

「どうぞで」

「だから塩い r 「ど・う・ぞ」・・・はい」

麻耶は、ずいっとコーヒー（微塩）の入ったカップを涙目になりながら受け取った。

「熱いので一気に飲むことをおすすめしよう」

「私が猫舌なのを知っていて言っていますね・・・」

「当然だ」

「うう・・・」

その呻きの後に麻耶は「フーフー」と冷ましながらチビチビとコーヒ―（微塩）を飲み始めた・・・それは正に、小動物の様に。

管制室にはほんのりとコーヒ―の香りが漂った。

「はあああ!!」

多分、合計で30回目の攻撃。攻撃は胸元への横一閃。体を反らして躲すかこの雪片式型を掴むしか道はない！これで俺の仮説か正しいかどうかが決まる！

「・・・」

その瞬間、敵は膝から上を体ごとを90度に後ろに倒して躲した。

そして、上を通り過ぎた白式目がけて腕にある武装からレーザーを放った！

織斑は、攻撃が無人機の上を通り過ぎて危険を感じた瞬間に雪片式型を自分より少し

前の地面に突き刺した！

すると、雪片式型を軸に白式は上に上がる。雪片式型と白式が一つの直線の様にまっすぐに立った瞬間に背面にあるブースターを吹かすと剣を地面から引き抜いて上に飛んだ。

そして、一夏は自分とは反対側にいる鈴に秘（フライベイト・チャンスネル）匿回線を使つて叫んだ。

「鈴!」「一夏うるさい!」わわっ、ごめん」

「で、何よ」

「ああ。あいつに人は乗つてないと思うんだけどどう思う?」

「無人機つてこと? そんな事、あるわけないじゃない。だいたい、ISは人が乗つてないと動かかn・・・」

そこまで言つて鈴の言葉が止まる。

「確かに・・・今もこうして会話している時は襲つてこないわね。絶好のチャンスの筈なのに」

「だろ。だから、あれつて無人機かもつて思つてるんだけど。一応、定義上は人が乗つてないと動かないけどその定義が覆されない確証は無いだろ?」

「確かに・・・で、それがどうかしたの」

「なら、勝算はあるつて事さ」

「はあ!? どういう事よ!」

「おおおお落ち着け鈴。無人機なら俺の雪片式型の零落白夜を全力で叩き込めるから勝機はある」

「今までに一撃でもアイツに入れた事無いくせに」

「次は入れる・・・絶対に」

「・・・はあ。分かったわよ。その代わりに失敗したら『カフェ・ド・バロン』の『バナナ・バナ・バナナ』奢んなさいよ」

「ああ、わかったよ（：あれ、高いんだよな。千冬姉の誕生日に買ったら結構したし）」  
「で、あたしは何をすればいいの？」

「俺が合図したらアイツに全力で龍砲を放ってくれ」

「いいけど・・・当たらないわよ」

「別にいいんだ。（考えがあるから）」

「ふーん。まあ、任せたんだから文句は言わないわ」

「頼むぜ、鈴」

一夏は最後にそう言うのと無人機に向かって行った。

「はあああー・・・セイハーーー!」

一夏は雪片式型で無人機に斬りかかったが無人機は垂直に上へ跳ぶ・・・そして、腕の武装の照準を一夏に絞った時――

「鈴! 今だ!」

「ええ! いつけえええ!」

上に移動した鈴が甲龍の肩部にある大型衝撃砲『龍砲』を放った。

この一撃を躲すことが出来なかった無人機は龍砲の威力に押されて地面へと叩きつけられるかのように急降下した……だが、下に見えたのは地面と白い点。

それは……白式き鎧式を纏い、剣式を持ちし戦士式

「これで……終わりだあつ!!」

その一言と共に振るわれた剣は地面に上下に分かれた無人機を産み落とした。

無人機を斬り捨てた白式は勢いを殺してから甲龍と並んだ。

「はあ……はあ……」

「お……終わったの?」

「……多分な」

「……」

「……」

いきなり生まれた沈黙……しかし、それを破るのも……

「いよつしやあああああ!」

「やったあああああ!」

二人の勝利への喜びの叫びだった。

しかし・・・勝者はまだ決まっていない。

— SYSTEM —

5分経過を確認……『Imperializer System』起動  
損傷箇所を修復……同時に右腕の変形を実行。

肩部にガンナーユニットを装備……フェイスパーツをガトリングヘッドに換装。  
……Imperializer……行動開始

勝利したと喜ぶ二人……その遥か下で無人機は静かに変貌していった。  
分断された体はコード類が互いを引き合わせ、元の形に復元された。

左右の肩からは一つずつ砲門が突き出て、顔は円筒状の物体が逆三角を描く様に突き出て、ゆっくりと回転する。

右腕は形を変えて大きな両刃剣になった。

……ギュシユイイイイイン。

アリーナに響くギアの回転が告げる第二ラウンド……

「な……」

「何よあれ……」

上空にいた二人も気づくと共に下を見ると動くISの姿を確認して声を失う。

学園にいる一般生徒でこの姿に良く似た存在を知っている者は何人いるのだろうか。かつて、子供達がTVを通して見ていた別世界のお話。

その中の一つの物語にこの機体の原点は存在する。

艶のない黒き鋼のボディに肩の砲門や顔にある逆三角の円筒。極めつけは右腕の大剣。

それは・・・ある巨大なヒーローが活躍する世界の作品の中で『無双鉄神』と呼ばれた代物

そして・・・

「ほう・・・あの鉄くずか。懐かしいな」

ベリア・・・いや、ウルトラマンベリアルやダークネスファイブ達のいる世界に存在した。暗黒宇宙大皇『エンペラ星人』の尖兵として造られた機械人形<sup>（胸）</sup>。

『無双鉄神』の異名を持つ機械人形<sup>（口）</sup>。

その名は・・・

「・・・」

インペライザー

## 第十一話 インペライザーの驚異!

「一夏・・・何よ、あれ」

「知らねえよ・・・ただ」

「ただ・・・」

「・・・ただ?」

「さつきよりピンチになったって事は言える」

一夏は、地上にいるインペライザーを警戒しながらそう言った。

地上にいるインペライザーは顔のガトリングヘッドと肩のガンナーユニットを鈍く光らせながら上を向いた。

そして、上にいる標的に照準を定めると独特の機械音を発しながら、ガトリングヘッドを高速回転させ無数の光弾を撃ち始めた。

「一夏! あたしが注意を惹きつけておくからその間に本体を叩きなさい!」

「ああ! 分かった!」

「フライベイト・チェンネル秘 匿 回 線でお互いの役割を決めると鈴は甲龍から龍砲を放ってインペライザーの注意を惹き始めた。

「さあ、龍砲を喰らいなさい！」

「……………」

インペライザーは何度か被弾すると鈴だけを標的に捉え、光弾を集中して放ち始めた。

鈴はそれを最小限の動きで回避しながら龍砲を放ち、注意を一夏へと向かわせない様にしていた。

そして、チャンスは訪れる。

龍砲がインペライザーのガトリングヘッドに直撃し、光弾の嵐が止んだ一瞬の好機。

「一夏ー！」

「おうー！ うおおおおおおお!!」

イクニッション・ブースト

瞬時 加速で超加速した一夏が零落白夜を発動させ、先程の様にインペライザーを両断した。

……………はずだった。

「よし！ やつと「一夏！ 危ない！」何だつて!?! ぐわあああ!!」

鈴の叫びと共に一夏は背後に強烈な鈍痛が走った。

「……………」

その鈍痛の正体はインペライザーの大剣と化した右腕『インペリアルソード』による

斬撃だった。

「……嘘だろ。さつき両断したはずなのに」

自分の攻撃を無かったかのように攻撃してくるインペライザーに一夏は一瞬、気を取られていた。

インペライザーは気を取られて動いてない一夏に容赦なくインペリアルソードを振り下ろした。

しかし、それは一夏の目の前に現れた一つの影によって邪魔された。

「やれやれ。敵の目の前で立ち尽くすとはよっぽど死にたいのだな。織斑」

「千冬姉!」

インペリアルソードを受け止めた影、それは打鉄を纏った織斑千冬だった。

「織斑先生だ。全く、無茶ばかりしおつて。鳳。」

「はい」

千冬は何時もの様に呼び方を指摘した後に鈴と回線をつなげた

「お前達は下がれ。後は我々教員が対処する」

「分かりました」

鈴は指示を聞きおとなしくピットに戻っていったが千冬の後ろにいる一夏は戻る気が無かった。

「織斑。お前もさっさとピットに戻れ」

「千冬姉、俺はまだ戦える」

「織斑先生だ。何度言えばわかる。織斑、お前のSEの少なさでは次に零落白夜を使うものなら白式が解除されるだろう。そうなると足手まといだ。下がれ」

「でも！「下がれと言っている！」・・・分かりました」

尚も食い下がろうとする一夏を一喝すると悔しさを表しながらも一夏はピットに戻っていった。

「さて、邪魔者は居なくなつたな。何処の間抜けが送り込んだかは知らんが・・・私の目の前で弟を傷つけた事。後悔しろ」

そう言うのと千冬はインペリアルソードの右腕を打鉄の近接装備《葵》を使って切り落とすとそのまま左腕を切り飛ばした。

「・・・・・・・・」

「これで終わりか。つまらん」

そう言うつて葵を拡張領域に収納すると宙に浮いている打鉄、ラファール・リヴァイヴで構成された突入部隊全員に開放回線を使って指示を出した。

「殺れ。機械人形に情けは無用だ」

指示が伝わると同時に打鉄操縦者はアサルトライフル『焰備』をラファール・リヴァ

イヴはアサルトカノン『ガラム』を展開すると一斉にインペライザーへと撃ち始めた。インペライザーは絶対防御が使われていない為、一斉掃射を受けるしかない。

次第に弾数は減っていき、とうとう突入部隊全ての射撃が終わるとあちこちに細かな傷が付いたインペライザーが光を失って鎮座していた。

「ふう。この騒動もこれにて閉幕ね」

打鉄に乗っているパイロットの一人がそう言うのと周囲のパイロット達も緊張の糸が切れたのか大きく息を吐いて肩の力を抜いた。

「諸君、ご苦労。この機械人形の回収を頼む」

千冬はそう指示すると近くに落ちている先程、斬り飛ばした左腕に触れた。

・・・触れた瞬間、インペライザーの左腕が粒子レベルに分解されて虚空に溶けた。

「!? 総員! 今すぐ機械人形から距離をとれ!」

千冬は虚空に溶けたインペライザーの腕に驚くと同時に開放回線で退避する様に指示を出した。

「・・・・・・・・」

その指示が全員に届ききる前にインペライザーはガトリングヘッドに再び光を灯し立ち上がった。

「チツ、遅かったか。総員、何が起こるか分からん・・・一定距離を保って注意しろ」

千冬は指示を促すと再びインペライザーに視線を向けた。

インペライザーは両手とも千冬に《葵》で斬られている為、攻撃手段はガトリングヘッドからの射撃しか無い・・・筈だった。

「・・・・・・・・」

しかし、インペライザーは肩部にあるガンナーユニットを赤く光らせると二つの赤い光弾を千冬に向かって放った。

千冬はとっさに上空へ回避したが赤き光弾は着弾し、爆発することなく上空の打鉄を纏った千冬を追って上昇した。

「追尾弾か・・・鬱陶しい！」

千冬は自分を追って上昇する光弾に苛立ちを隠さずにそう吐き捨てると再び《葵》を展開して二つの光弾を横一閃に斬り捨てた。

切り捨てられた光弾は千冬の乗る打鉄の遙か後方で爆発し、千冬に影を落とした。

軽く呼吸を整えようと大きく息を吸った千冬は突如、下から聞こえてきた爆発音に体を一瞬だが硬直させた。

「いったい、何が起こったというのだ……」

この爆発音の始まりは千冬が光弾を上空へと回避する所まで遡る……

「嘘……まだ動くの」

先程、終わったと思つて肩の力を最初に抜いた打鉄のパイロットは目の前の光景に驚きを隠せなかった。

他の操縦者も同様でインペライザーを中心に周囲は硬直していた。

「……」

そんな中でインペライザーは再び独特の機械音を鳴らすと斬られた両腕を粒子展開で再構築していった。

しかし、先程とは違つて今度は右腕のみならず左腕にもインペリアルソードを構築した。

「腕が変わつた」

その動揺が波紋の様に広がり不安の声上がる中で一人の女性が叫んだ。

「落ち着きなさい！ 焦つてしまえば隙が生まれてしまうわ！ ラファール班はシヨットガンで攻撃、打鉄班は葵で攻撃！」

この女性の名は『真島 曆』、麻耶と同じ時期の日本代表候補生の一人で千冬の次に近接戦に優れた女性で現在は四組の副担任兼実技担当である。

曆は千冬のようにこの場で最適とも言える指示を出すと自分自身も葵を展開してインペライザーに斬りかかった。

しかし、インペライザーはインペリアルソードを縦に構え、腕を横に広げると上半身を高速で回転させながら肩部のガンナーユニットと頭部のガトリングヘッドから光弾を無差別に連射する大技『バニシングサークル』によって後方へと飛ばされた。

その後もバニシングサークルによって数多の機体が撃墜されていた。

千冬の聞いた爆発音の正体はバニシングサークルが当たった時に起こる爆発だった。

「誰か聞こえるか……応答しろ。突入部隊！」

爆発の轟音が響くアリーナ上空に浮遊している千冬は地上にいる突入部隊と連絡を取ろうとしていたが繋がらない為、声を荒らげていた。

「突入部隊！ 突入部隊！ 応答しろ……くそっ！」

千冬は連絡を取るのをやめて地上に行こうとした時、自分が影に覆われていることに気付いた。

そして、その影を作った物体の正体は……

「……」

先程までバニシングサークルで数々と突入部隊を撃墜していたインペライザー……そのものだった。

## 第十二話 決着！ インペライザー！

「・・・」

「何故だ・・・さつきまで地上にいたはず」

千冬は背後に音もなく忍び寄っていたインペライザーに対して動揺を隠せなかった。

その動揺を知ってか知らずかインペライザーは両腕のインペリアルソードを千冬に振り下ろし、千冬は打鉄と共に地上へと叩き落とされた。

「お。まさかちーちゃんでも苦戦するなんて思ってたよ。意外と強いんだね、あの子」

防護シャッターの降りてない来賓室では束が感心するかの様に声を上げていた。

「当たり前だ。この世界のテレビの設定もオリジナルに近かったしな。テレポートに自己修復機能、更にはバニシングサークルに三連武装ガトリングガンと肩部のガンナーユニット・・・お前、どこまでやったんだ」

「それはねべーくん。ぜくんぶ盛り込んでからこの束さんお手製の人工知能を搭載したのだ！ 後、ヴィーくんの手伝ってもらってヴィーくんとの戦闘経験をつませているよ。えっへん！」

「……………」

東の爆弾発言に来賓室は沈黙に包まれた。

「お……おい、デスローグ。これ……あいつらが死ぬんじゃないか」

「……あり得る」

「あれ〜? グーちゃんにデーちゃん。ひそひそ話してどうしたの?」

「あ〜……東よお。一ついいか?」

「何かな、グーちゃん」

「あれ……少しは弱くしてんのか?」

そう言うのと氷結は未だにアリーナで猛威を振るうインペライザーを指さした。

「もつちろん。ちやくんとリミッターはかけてあるから。だいじょくブイ!」

「……本当なの?」

「んも〜。デーちゃんは心配症だなく。ほら、追い打ちはしてないでしょ。だから、大

丈……」

東がそう言い切る前にアリーナの千冬が墜ちた箇所にも頭部のガンナーユニットからの光弾が雨の様に降り注いだ。

「……………」

その光景を見てしまった東、氷結、デイスファイアの三人は同じタイミングで間抜けな

声を上げた。

「……どどど……どうしよう！ リミッターかけてあるけど戦闘は人工智能に丸投げしたの忘れてた！」

「おい！ ていう事は……」

「……どう行動するのか束にも分らない……つてこと」

「どどど……どうしよう、グーちゃん！ デーちゃん！」

「おおお俺に質問するな！」「同じく」

テンパる三人はガヤガヤと騒ぐ中……銅獄、スライ、ベリアは只々、土煙漂うアリーナを見つめていた。

「陛下、この感じ……」

「ああ。多分、お前の予想通りだろうな」

「ギョポポポポ。ブリュンヒルデはいい弟を持つてるようですね。陛下」

「ただのシスコン野郎だろ」

ベリアはそう断言すると待機状態であるバングルを腕ごと目の前に持つてくると目を閉じて意識を集中させた。

（リベリオン。現在のインペライザーの状況及びデータを調べろ）

（了解しましたわ。少々、お待ちを……）

ベリアは専用機『リベリオン』のコアに宿る人格と対話し、インペライザーの情報収集を命じた。

……何故だ。あんなに光弾の雨が降り注いだというのに衝撃が一切来ない。どういうことだ。

——…姉! …千冬…千冬姉!! ——

フツ…私もうとう気が狂ったか。ピットにいるはずの一夏の声が聞こえるな。

——…千冬姉! しっかりしろよ!! 千冬姉!!! ——

いや…これは幻聴じゃない…正真正銘、一夏の声だ。

「織斑…何故、ここにいる」

「それは…千冬姉がピンチだったから居ても立ってもいられなくなって…」

「エネルギーはどうした。もう尽きかけていたはずだろう」

「それは…」

この馬鹿者め。残りエネルギーが少ないのを承知で助けにきたな。…仕方ない。

「織斑。これを使い」

そう言うとは私は打鉄の右腕の一部分をスライドさせて中から小さいエネルギーポツ

ドを一夏に渡した。

「千冬姉……これは？」

「織斑先生だ。それは職員の突入部隊に使われるISに収納してある予備のエネルギーが入ったポッドだ。あまり回復はしないから注意しろ」

「ああ。ありがとう千冬姉」

「だから、織斑先生だと……まあ、説教はコイツを倒してからだな。織斑」

そう言うとは私は回復が終わったであろう一夏に声をかけながら謎の機械人形に向き直った。

「織斑……行くぞ」

「ああ！ 行くぜ、千冬姉！」

（マスター、解析完了しました。現在、インペライザーのコンディションは良好。ですが、コアに残っている命令は殲滅と破壊の二つのみです）

（そうか。次は待機させているヴィラニアスに回線を繋げ）

（了解しました、マスター）

コアからの報告結果を聞いたベリアは即座に次の指示を下し、ヴィラニアスに回線を

繋げた。

『ヴィラニアス。聞こえるか』

『ハッ。なんでしょうか陛下』

『次に爆発が起きたら遠慮はするな：確実に破壊しろ』

『かしこまりました。必ずや破壊してみせます』

その一言を聞いたベリアは回線を切り、スライに新しく注がれたワインを一気に飲み干した。

「うおおおおお!!」

「はあああああ!!」

一夏と千冬は息の合ったコンビネーションで機械人形に攻撃を仕掛けていた。

一夏が縦に剣を振るえば千冬は横に。

逆に千冬が縦に振るえば一夏が横に。

互いを知り尽くしていると言っても過言ではない姉弟だからこそ出来るコンビネーションにインペライザーは一撃一撃と攻撃を受けていた。

「織斑! 一気に仕留めるぞ!」

「分かった！」

そう言うのと一夏は零落白夜を発動させてインペライザーへと突っ込んでいった。

インペライザーはそれに反応しガンナーユニットから光弾を放とうとした。

しかし、そんなインペライザーの下に一つの影があった。

「ふん。そう来るとは思っていた……この際、利用させてもらおう！」

人間は、確かに機械には能力では劣るだろう。

しかし、人間には機械には無い力がある。

それは『巧妙に相手の裏をかく』という力。

千冬は今までのインペライザーの行動パターンから攻撃対象を一体に絞ると他の対象の認識が遅れることに気づき、実行した。

実行した事もさることながらそれをあの一瞬のアイコンタクトとやりとりでこなす

一夏も一夏であつた。

「はあっ！」

一夏はインペライザーの軌道の下がったものの自らに迫る光弾を縦に切り裂きながら迫つた。

その際、切り裂いた光弾が後方で起こした爆発のエネルギーを取り込み、先ほどより速い速度でインペライザーに迫つた。

「これで…終わりだああああ!!」

—この一撃に全てを賭ける!—

その思いを込めた一撃がインペライザーの体を真二つに斬りさ…

く事は出来なかった。

「……」

「なっ!?!」

インペライザーは一夏が迫ってくる間に零落白夜を分析し、「この一撃は危険」という結果を出し、未だ健在のワープユニットを使用し当たる直前に回避した。

そして、渾身の一撃を決められなかった一夏は千冬にぶつからないように上空へと急

上昇すると背後に現れたインペライザーが右のマシナーアームを変形させたエネルギーパイクのついた鉄球で殴られ、千冬を巻き込み地を転がった。

「くっ…大丈夫か、千冬姉」

「ああ…なんとかな」

しかし、二人とも体も機体もボロボロでそれぞれ一撃が限界だった。

「織斑…いや、一夏」

「…なんだよ、千冬姉」

「次の一撃が最後になるだろう…同時に攻撃するからしつかりと合わせろ」

「ああ。わかったぜ、千冬姉」

そして、二人が見上げた空の一点ではインペライザーが肩のガンナーユニットと頭のガトリングヘッドにエネルギーを充填していた。

「よし…行くぞー！」

「ああー！」

その掛け声とともに空に浮かぶ鉄の鉄神インペライザーに迫らんと飛び立った時にそれは起こった。

「…!?」

急に飛来した双刃がインペライザーの両腕を肩ごと引き裂いたのだった。

「な…なんだ、急に!」

「一夏……注意しろ」

目で追う二人を余所にインペライザーを3つに分断した双刃は飛来した上空へと円を描く様に飛んでいくと何も無い空間で停止し、元の鞘へと収まるかのように虚空で重厚音を立てて停止した。

「……」

そして、双刃が停止したのと同時に双刃間の虚空が揺らめき始めあるものが姿を現した。

ガンメタルカラーの機体……その内に見える黒の内部機構と中央で妖しく紫光を放つ光球、両腕の双刃、赤い目と青のヘッドランプを持つ禍々しい顔の様なフルスキンのヘルム……

「……」

ガンメタルの機体は自身を見つめる視線を意に介さず双刃を外すと同時に両手に持つと、高速でインペライザーに斬りかかった。

インペライザーも切断された腕を直ぐに粒子化し再構築、右手をマシンガン、左手をスパイク付の鉄球に換装して応戦しようとするものの、相手の高速の攻撃に対応できず一つ、また一つと体の傷が増えていった。

「……」

強烈な斬撃の乱舞から数十秒、インペライザーの体から煙が立ち始めたのを確認するとガンメタルの機体は空へとゆっくりと上昇し、空中で静止した。

インペライザーはこれを好機と踏んだのか左手もマシンガンに換装し、頭部のガトリングヘッド、肩のガンナーユニット、両手のマシンガンから一斉に光弾やエネルギー弾を連射した。

「・・・」

ガンメタルの機体は手に持っていた双刃を前方に投げると手を前に出し、双刃に手から出した光弾を当てた。

次の瞬間、光弾は双刃を包み込み光速で回転し始めるとともにインペライザーの攻撃を打ち破りながらインペライザー本体へと向かっていった。

「・・・」

迫る双刃が直撃する直前にインペライザーは先程と同じようにワープユニットを駆使用する事によって回避し背後に出た・・・が、既にその行動パターンを見切られていたのかガンメタルの機体に遠隔操作によって迫る双刃によって再び両肩を・・・そして

「リカバリーユニットとワープユニット・・・破壊」

その双刃を手にしたガンメタルの機体によってリカバリーユニットとワープユニットの存在する部分を破壊され、地面へと叩きつけられた。

「……」

もはや満身創痍とも言えるインペライザーの目下にガンメタルの機体は胸の光球を光らせて機体全体から極大のレーザーを放ち、インペライザーを完全消滅させ、周囲に甚大なダメージを残した。

「……目標の破壊を完了……」

変声装置によって中性的な声をしたガンメタルの機体の搭乗者が自分の拠点に戻らんと更なる上昇を始めようとした時……

「逃がしません（わよ）!!」

二方向からのレーザーと実弾の射撃を受け、邪魔をされた。

「その所属不明機、今すぐ止まりなさい!」

「オルコットさん。先生のセリフを取らないでください……」

その正体は、ドアのロックが解除された事により突入出来る様になったイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットと一年一組の副担任である山田真耶だった。

その他にも残りの教員や上級生の代表候補生及び代表と上級生の実働部隊を視認したものの搭乗者は『何の問題もない』と結論づけて再び上昇しようとしたものの次は爆発に阻まれた。

「あらあら。こんなに沢山の歓迎を無視するなんて酷いんじゃないかしら? お姉さ

ん、悲しいわ」

爆発の正体は生徒最強の意味をも持つ生徒会長の更識楯無の乗る専用機『霧纏いの淑女』の攻撃手段の一つ『清き熱情』だった。

呆気からんと心にも無い事を言う楯無に若干の苛立ちを募らせながら搭乗者は主に指示を求めた。

数秒もしない内に帰ってきた主の答えは『頃合いを見て戻るか思い切り暴れろ』との答えだった。

答えを確認するとガンメタルの機体は双刃を手に持ち、右手の刃の切っ先の前方に向けた。

「なる程、お姉さん達と遊びたいわけね。いいわ、遊んであげるけど・・・途中で音をあげないでよね。山田先生、指示は任せます」

「はい！ それでは・・・行きますよ！」

麻耶の掛け声とともに何人かの教員部隊及び上級生の実働部隊は一斉射撃を開始したが全て光速で繰り出される双刃の乱舞によって防がれた。

ガンメタルの機体は全ての弾丸を防ぎきると楯無へと突っ込んでいった。

「あらあら。お姉さん嬉しいわ。さあ、遊びましょうか」

「・・・」

アリーナは再び戦場となる。

# 第十三話 我が名は『』

再び戦場と化したアリーナ：

その中央に陣取るは例のガンメタルの機体《UNKNOWN》

そして、周囲には何機ものISが取り囲んでいたが今となってはたったの三機のみ：

「セシリアちゃん、山田先生。まだ大丈夫かしら？」

一機は『IS学園の生徒最強』の称号を冠する『ロシア代表』の『更識 楯無』の愛

機『霧纏の淑女』

「ええ、多少のダメージはありますがまだまだいけますわ！」

もう一機はイギリスの『国家代表候補生』の『セシリア・オルコット』が操るBT兵

器搭載機『蒼い雫』

「私も大丈夫ですが更識さんも無茶は禁物ですよ」

そして、最後の機は『現IS学園一年一組副担任』で『元日本代表候補生』の『山

田 麻耶』の使用している世界第三位のシエアを誇る、フランス『デュノア社』製の量

産型第2世代型IS『疾風の再誕』

しかし、この三機も全くダメージが無い訳ではなくある程度のダメージを受けてい

た。

そして、搭乗者たちも何度も繰り返されている攻防によって体力、精神ともに疲弊しており肩で息をしていた。

「――」  
 対するガンメタルの機体は先のインペライザー、教員部隊及び上級生の実働部隊との戦闘も含め激しい動きをこなしたのにも関わらず呼吸は乱れていなかった。

「わかつてますわ、山田先生。 さく、もう一度行きますよー！」

楯無の号令と共に再び三人は行動を開始した。

「行きますわよー！」

「撃ちますよー！」

セシリアはブルーティアーズのBT兵器を使い、多方向からレーザーを撃ち、山田教諭はライフルによる狙撃をするものの全てをガンメタルの機体に弾かれてしまう。

全て弾かれた二人に双刃を当てようと振りかぶると『清き熱情』で妨害される。

「こんなにいいタイミング、逃がすわけないでしょう！」

爆風による妨害に対して楯無の方に振り替えると楯無はあつけからんと言いつち、ミストルティンを構えて突き出した。

しかし、ガンメタルの機体は無駄の無い動きでそれを躲し、ミストルティンを掴んだ。

「小娘風情が・・・無駄な事を」

「無駄かどうかは・・・これを喰らってからにしなさい」

次の瞬間、ミストルテインから弾丸が発射され初めてガンメタルの機体《UNKNOWN》に大きなダメージを与える事に成功した。

その弾丸の一部は頭部に被弾し、フェイスカバーのあちこちにヒビを入れた。

「・・・小癩な事を」

「あら、随分と可愛らしい声をしてるのね」

「!? 変声機能が!」

「さて、お顔をご拝見♪」

楯無の言葉に危険を察知したガンメタルの機体《UNKNOWN》はミストルテインから手を離して後ろに退くが時すでに遅く、楯無と共に『クリア・パッション』の爆発に飲み込まれた。

「ハア・・・あの馬鹿が」

来賓室から様子を眺めていたベリアは苛々しく呟くとリベリオンを使い、ディスプレイを投影し、ガンメタルの機体に回線をつなげた。

「ヴィラニアス! 遊びすぎてこのザマとはどういう事だ!」

「陛下！ 申し訳ありません！ このヴィラニアス、少しばかり小娘達を軽視して  
 ました」

「御託はいい。それと、さっきの指示は取り消しだ」

「ハッ！ このヴィラニアス、どんな処罰でも受ける覚悟でございます」

「そんなのはどうでもいい。ただ一つ・・・たった一つのシンプルな命令だ・・・」

そう言うのとベリアは文字を打ち込みガンメタルの機体《UNKNOWN》に送りつけ、口を開いた。

「そこに書いてある通りだ・・・」

　　く　三機全てを撃墜しろ　　く

「その機体の単一仕様能力の使用も許可してやる。失敗は許さん」

そうして、ベリアはヴィラニアスの返事を聞かずに回線を遮断した。

「ふう・・・お姉さん、疲れちゃったわ」

『クリア・パッション』の爆煙の中で水のシールドを張った楯無は決着がついたと思い、安心して

いた。

「さて、操縦者の顔を見てみようかしら」

白煙が薄れていく中でそんな暢気な事を呟き、煙が霧散するのを待っていた。

そして、煙が晴れると視線の先に呆然と立っているだけのガンメタルの機体《UNKNOWN》がいた。

「さて、侵入者さん。詰《チエックメイト》 みよ。おとなしく地上に降りてISを解除しなさい」

ミストルティン突きつける楯無とセシリアと真耶が二方向から何時でも撃てると言わんばかりに構えており、正に普通ならば詰《チエックメイト》 みと言える状況だった。

・・・『普通』、ならば

「フフ・・・フフフ・・・フフフフフフ」

「何が可笑しいのかしら？」

「可笑しいも何も・・・これで詰《チエックメイト》 み？ 小娘にしては笑える冗談ね」

そう言うガンメタル《UNKNOWN》の機体の雰囲気が一変した。

物静かなる『静』から・・・圧倒的な『動』へと

「!? 山田先生！ セシリアちゃん！」

「わかつてます！」

「わかつてますわ！」

楯無の呼びかけに応じて二人はそれぞれの得物でガンメタル《UNKNOWN》の機体を狙い撃った・・・

が

「キヤアアッー!!」

「楯無さん!」

《UNKNOWN》ガンメタルの機体の機体はミストルティンを掴んで楯無を引き寄せるとそのまま前に突き出し、盾として利用した。

そして、二人の射撃を受けた楯無を投げ捨てるのと両腕の双刃を動揺する二人に全力で投擲した。

勿論、二人はそれを回避するが《UNKNOWN》ガンメタルの機体は双刃をコントロールし、二人を執拗に追尾した。

「セシリアさん! 私が囷になりますからその間に!」

「了解しましたわ!」

山田先生が囷となり、セシリアが《UNKNOWN》ガンメタルの機体を撃つ。

《フライングチャンネル》秘匿回線で立てた作戦通りに二人は分かれた。

《UNKNOWN》ガンメタルの機体もそれに伴い目標を山田教諭に絞り双刃を操作した。

そして、完全に意識が自分から外れたと思ったセシリアは空中で急停止し、スターライトMkIIIを展開し狙いを定めようとしたが・・・

「い・・・いいない!?!」

そこに《UNKNOWN》ガンメタルの機体はいなかった。

一向に動かずに双刃を操作していたことにより、セシリアは標的である  
 《UNKNOWN》ガンメタルの機体を視界から外していた事が仇になったのだ。

「くっ……いったい何処に行きましたの！」

周囲を見渡すセシリアだが《UNKNOWN》ガンメタルの機体はどこにもなかった。

「バキバキッ！ー」

音は、セシリアの背後から聞こえた。

それに気づいたセシリアが後ろを振り向くと彼女は息を飲んだ。

何もない空間に入ったヒビ：そして、ヒビが割れた向こうに見える赤い空……全てが全  
 て……常識を逸脱した景色だった。

「そんな……空が……割れて……」

突如として虚空に空いた赤い空に動揺を隠せないセシリアはその赤い空の向こうか  
 ら迫る存在に気付けなかった。

そして……赤い空の向こうからの攻撃に反応も出きずにセシリアと彼女の駆るブルー  
 ティアーズは地に墜ち……戦えなくなった。

地に墜ちるその時に彼女がセンサー越しに捉えたのは赤い空からの襲撃者の正体で  
 ある《UNKNOWN》ガンメタルの機体だった。

「……あと二人」

《ガンメタルの機体》の操縦者はその一言のみを発すると双刃を操作し、両手に収めると多重加速で山田教諭の駆る打鉄に死角から迫り、極悪とも言える双刃の乱舞で一気にSEを残り僅かまで削り落とした。

「・・・」

「そう簡単にやらせません！」

最後の一撃を振り下ろさんとする《ガンメタルの機体》に対して、山田教諭は瞬時加速で一気距離を取ると五個のグレネードのピンを抜いて《ガンメタルの機体》に投げつけると《ガルム》で正確に打ち抜いて爆発させた。

「はあ……はあ……」

爆煙の向こうの標的に絶えず警戒を続ける山田教諭に残っているのは手に持っている二丁の《ガルム》のみ……

これで決める…彼女がそう決意して引鉄を引こうとした時に…何かを感じ取った。

「…風が…吹いている…?」

普段、アリーナには防護シールドが常に展開されている事によつて無風を保っている中で風を感じるのには飛行の際や高速で地表に激突した時の風圧くらいしかない。

しかし、確かに今は風が山田教諭の頬を撫でている。

そして…その風が行く末は爆煙の中央…あの《ガンメタルの機体》がいる場所へと流れ

ていく。

—我は刻む…この足で—

—我は描く…この腕で—

—狂いに狂ったこの世界—

—更に更に狂わせよう—

—狂え狂え狂い咲け—

「うっ…ぎっ…か…体が！」

—狂った先に待つものは—

—今より更なる混沌か—

—それとも一つの救済か—

—それを知るのはまだ遠く—

また等しく近いだろう—

「…狂い咲け…因果断刃」  
コルキアス・スラッガー

宣言と共に双刃は妖しい紫の光を帯び始め、二が四に、四が八に、八が十六にまで増

えていき山田教諭の周りを緩やかに通り過ぎていった。

「……………（今なら……………いけます!）」

武装が無く隙だらけにしか見えない敵を見て山田教諭はありったけの弾丸を撃ち込もうと構えた瞬間に背中を大きな衝撃が襲い、大きく前のめりになった。

そして…最初の衝撃から連続してまるで砲弾でもぶつかつた様な衝撃が襲いかかった。

「あつ……………がつ……………」

そして、地に墜ちた山田教諭も戦闘不能になりアリーナで動く影は二つになった。

（…これはちとやり過ぎたかもしれないな）

目の前に浮かぶミステリアス・レイデイの下に転がる多くの量産機を見ながら考えたものの気に留める事をやめた。

（軽くあの姉弟達をあしらって撤退の予定だったのだからな…我輩、悪くない。それに我輩の慢心で陛下がご立腹だから満足するような結果を見せねば…）

「行かせない…貴方にはなんとしても所属と目的を聞かせて貰うから…」

（満身創痍でそんな事を言えるとは…中々に肝が据わっておるな。でも、もう終わらせてやろう）

「何か言ったらどうなn……………ぐっ!?!」

「ガタガタ五月蠅いぞ小娘。私の目的はあの無人機の破壊のみ、お前達が攻撃しなければ目的完遂の時点で退いておったわ」

「ど………どうかしらね……」

「所属……ディメンション・インベーター多次元侵略者>そして、機体は超越オーバー・ジェネレーション世代……暗闇の殺し屋ダークキラー」

「超越……世代」

「後は自分で探すんだな……小娘」

そう言うと地面に叩きつけてミステリアス・レイデイを機能停止に追いやりダークキラーは空を割り、赤い空間の中に消えていった。

しばらくして、何事も無いように元に戻った青空の下には……多くの量産機と二機の専用機が転がっていた。

〽  
???  
〽

あのクラス対抗リーグマッチから早2週間  
教師や専用機持ち達の身体と機体のダメージも回復し、いつもの日常が戻ってきていた。

そんな日常の放課後に…ひとつの変化が起きていた。

「はあああああああ!!」

「甘い!」

「後ろがガラ空きですわ!」

「頭上もよ!」

そこには以前よりも激しく練習する一夏とそれに付き合う箒、鈴、セシリアの三人がいた。

………が、今回はそんな彼等のお話ではなく

「「え!」」

少し先の物語にて出てくる者達の今のお話

「SKM、整列!!」

「ハッ!」

「部隊番号!」

「アインス」「ツヴァイ」「ドライ」「フィーユ」「フუნフ」:「ツェーン」

「部隊、欠席なし!」

「」は、『SKM』:『シュヴァルトツェア・ケーニヒ・ミリタリー黒き王の軍』の母艦兼基地の『デルスト』

並んでいるもちろん彼女達クルーも全員『SKM』の部隊員である。

整列した彼女達を少し高い位置から見下ろしながら黒いスーツに包まれた女性は口を開いた。

「さて、本日もあの方に代わってこの私が指示を出します。アインスからフィーユはローテーションを組んで近辺の哨戒と格闘と射撃訓練」

「了解!」

「フუნフ、ゼクスは二人一組で『L・N』の稼働訓練。ズイーベン、アハトは『D・R』で同じように稼働訓練」

「了解!」

「ノイン、ツェーンは各自自由行動」

「了解！」

「それと、アインストツヴァイの隊長は後で私の部屋に来るように」

スーツの女性は各部隊に指示を伝え終わると両足を合わせて声高々に叫んだ。

「我等、『SKM』！ あの方の創る世界を生きる者達なり！ 総員、敬礼！」

「「ハッ！」」

これが、『SKM』の毎朝である。

時はしばらく経ち、あのスーツの女性の部屋

「アインスト隊長 ラウラ・ボーデヴィツヒ、ただいま到着しました」

「ツヴァイ隊長 クラリツサ・ハルフォーフ、同じく到着しました」

「ご苦労、そこに座りたまえ」

「失礼します」

二人は再度敬礼するとソファアに腰掛けた。

「二人を呼んだのは他でもない。あの方からこんなものが届いたのでね」

彼女はそう告げながら胸ポケットから二枚の黒い手紙を取り出し、手渡した。

二人は、手紙の封を解き、中にある本題の書かれた書を読み始めた。

「私宛にも既に届いて君達の件に関して連絡は貰っている……すっかりやって来るんだ

ぞ」

「……了解」

二人の手紙にはそれぞれこう書かれていた。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ

部隊長を解任し、専用機を持って『I S 学園』への編入、ならびに俺様達の護衛を任命する』

『クラリツサ・ハルフオーフ

部隊長を解任し、専用機を持って『I S 学園』への『臨時護衛官』を任命する』

「……ベリアル様」

二人が退室した後、自分宛の手紙を読み返しながら、『この世界ではあまり知られてないベリアの本名』を呼びつつスーツの女性も微笑んでいた。

そして、その前にあるソファに三人の人影があった。

「貴方も呼ばれたのですね……てっきり、二学期からだと思っていましたよ」

「陛下が呼ぶって事はそろそろそのISとやらをお披露目と言うわけだな」

「ワレラノカワリニ、ジユウリンシテコイ。ソコヲノ、ザコニマケルナヨ」

「勿論。そこら辺の塵芥に負けるなどベリアル軍にあつてはならない。それに、貴女方達の力を借りたこの機体で敗北は……貴女方『三幹部』への侮辱になる」

「理解していれば良いのです。後輩たちにもよろしくお伝えくださいね」

「その意気だ！ 陛下に『いつでも我々も動ける』って伝えといてくれよ！」

「フザイノアイダハ、ワレラニマカセテオケ」

「ええ、お願いします。ゴーネ、アイン、ザウ」

スーツの女性は頭を下げるとデルストのに甲板に立ち、《ISであつてISで無いもの》を展開すると黒き流星となり飛び去った。

机の上に置かれたままの彼女の手紙には、簡潔にこう書いてあつた。

『リア、俺様の元に来い』

「今、参ります…ベリアル様」

# 一番外 亡國の黒き女一

「……」

暗い部屋の中、一人の女性は目の前の画面を見つめていた。

その画面に映るのはどうやって撮影したのか分からない水色の機体と黒い機体の戦い。

女はその戦いで黒い機体だけを見つめていた。

「……この姿……やはり」

見つめる女の目は熱に浮かされた様に蕩け、いつしか手を下の方へと動かし始める。

しばしの間、衣擦れと艶めかしい声が続いていたが身体を大きくしならせるとまた静寂が部屋を包んだ。

「……ベリアル様……」

息絶え絶えに何故か普通には知られてない男の名を口にした。

「あら、お楽しみ中だったかしら」

「!?……なんの用だ、スコール」

意識の外から掛けられた声に驚きこそしたものの声の主はよく知った人物の為、別段

向きはしなかった。

「身体のメンテナンスと……夜のお誘いかしらね」

「前者は了解したが後者はお断りだ……お前の可愛い可愛い子猫のオータムと盛りあつていれば良いだろうが」

「彼女は可愛く鳴いてくれるけど……オータムったら、最近はこの子との特訓にお熱なのよ」

「あの子……ああ、例のマドカとか言う戦女神の子供か」  
ヴァルキリー・チルドレン

「そう。戦力増強になるしあの二人も戦う事が楽しいみたいだからいいのだけど、夜は寂しいのよ……だから、慰めて」

金色の髪を靡かせながら流れるように服の中へと手を入れつつ、耳元で甘くねだるスコールを意にも介さずに言葉を続けた。

「寂しいのならば一人で何とかしたらどうだ？ それかオータムとマドカとやらを同時に食べればいいだろう？ 私は忙しいんだ、邪魔はしないでもらおう」

「あら。連れないわね。」

「なんとでも言え。ところでスコール、私が前に言った事を覚えているか？」

「勿論。『時が来たら私は抜ける。その時にスコール達はどうする？』って言ってたこと

よね?」

「ああ。そろそろ答えを聞こうと思つてな」

「私は勿論、貴方に付くわ。亡國企業も色々変わりすぎたわ……私の願いはもう叶わないわね」

先程とは変わつて何処か遠い彼方を見つめるスコールを女は優しく撫でた。

「ならば、私と共にベリア様に忠誠を誓おう……あの方なら今の世界とは別の世界を造つてくれる」

「あら、断言しちゃうのね。あんな子にそこまで心酔するなんて……覚えでもあるのかしら?」

「前世からあの方の事を忘れた事は無いさ。あの方は私を救つてくれた……」

「随分とロマンチックな事を言うのね。意外だわ」

「……まあいい。ほら、メンテナンスを始めるぞ」

「ええ。お願いするわ、リア博士」

―海上―

「陛下…本当にお会いになるのですか？」

「ああ。もしもこれの送り主が敵になるなら潰す…そうじゃなければその時はその時だ」

「しかし、スライよ。何者なんだろうな、その手紙の『R』って奴はよ」

「陛下だけではなく…私達の事も知っていた」

「ううむ。おまけに陛下のサインまで知っている…」

「ギョポポポポ。案外、我々のファンかも知れんな」

「「これだから蛸は」」

「ギョポー！ お前たち…事あるごとに蛸蛸タコタコと…ムキー！」

# 一番外 黒と黒一

「あそこか」

『R』から送られた座標にある島を確認し、降り立ったベリア達の方へと一の女性が後ろに三人ほど連れて歩いてきていた。

彼女達はベリア達の前に立ち、先頭のスーツの女性に至っては膝をついてから口を開いた。

「お待ちしておりました。偉大なるベリアル陛下。ならびに、ダークネスファイブの皆様。私が『R』ことリアと申します。確証が持てなかった為とはいえ、お手を煩わせた事は深くお詫び申し上げます」

「御託はいい。何故このマークを知っている。この地球では一度も使っていないぞ」

深々と頭を垂れていたリアに対してベリアは顎の下に指を入れ、上を向かせて問い詰めるようにしたがリアの目に映っていたのがベリア<sup>人間態</sup>ではなくベリアル<sup>本来の姿</sup>だった為、リアの首の後ろを掴んで立つと同時に持ち上げた。

「知ってるな」

「はい」

「何故、接触を謀った」

「ベリアル陛下に一目お会いしたくて」

「呼び出した理由は」

「先程申した確証がなかったことに加えて皆様が人の姿になっているので少数かつあまり人のいない場所だと思います」

「言いたい事は」

「陛下のしもべにしてください」

最後の言葉を聞くとベリアルはリアを下ろして5人の所へ行くとスライに二、三言耳打ちするとその言葉を聞いたスライが前に出た。

「リアさん…でしたね」

「はい。スライさん」

「……率直に言います。陛下や私達を知っている貴女を生かして置くわけにはいきません」

答えと共に一振りのロングソードを首の横に当てられたリアは回避や抵抗することもなく直立不動を維持した。

後方にいた三人は何時でも戦闘へと移行できるに構えたがリアが手出し無用と伝えると皆、構えを解いた。

「逃げなくてよろしいのですか？ 私が剣を横に振れば貴女はそれで死ぬのですよ」  
「それが陛下の為になるのであれば。この命、陛下にお仕えすると決めた時にとうに捨てているつもりです」

迷いの無い目をして奇しくも自分が陛下に言い切った言葉と同じ言葉を聞いたスライは剣を握る手に力を入れた。

「それは、この場で死ぬ事になるとしてもですか？」

「当然」

「それでは」

リアの覚悟を受け取ったスライは、手に持った剣で彼女の首と胴を切り離す為に剣を振った。

かに見えたが、劍は首の皮に当たる寸前で止まっていた。

「……合格です。ですよね、陛下」

「ああ。リアと言ったな。これからは俺様に尽くせ」

「有り難き幸せ」

亡國の黒き女は、偉大なるベリアル軍の黒き女として動き始めた。

後に、陛下の女となりベリアル軍女帝となるのはまだ先の話

## 一番外 新旧集合一

リアを部下に加えて数日後、ベリアルはリアたつての要望でベリアの姿だとある廃墟にやって来ていた。

「陛下、こちらでございます」

「おう。しかし、こんな廃墟に呼び出しやがって……本当なんだろうなリア。俺様の下僕の魂を持つ者がこの世界にいると言うのは」

「はい。過去に私が研究した際の成功例がベリアル軍三幹部の『鋼鉄將軍 アイアロ  
ン』様、『暗黒参謀 ダークゴーネ』様、『恐竜戦士 ザウラー』様でございます」

「あ、研究だと？」

「『モンスライズ計画』……死亡した怪獣や超獣、宇宙人のさ迷える魂を人工的に造り上げた肉体に憑依させ、人の身体でありながら能力や力を行使できる存在を造る……という計画です」

「なるほど」

「で、三幹部の皆様は成功したのですが『ベリアル陛下以外に従う気はない』の一点張りで、実際に処分に赴いた別チームを肉片すら残さず始末した為に危険因子と判断され、

同じく貴方様を崇拜していて尚且つ計画主任の私が亡國も知らない私専用のラボの一つを提供したと言うわけです。さ、到着しました」

二人は廢墟には似合わない機械の扉の前に立つとリアは取り出したカードキーを通し、扉を開けた。

「ベリアル軍三幹部の皆様、先日お話しした通り、ベリアル陛下をお連れしました」

「リア、本当にこいつらがあいつらなんだろうな」

扉の先にある部屋に座る三人はベリアの顔を見た途端に立ち上がり片膝をついた。

「お待ちしておりましたベリアル陛下」

「我々、ベリアル軍三幹部」

「ヒトノスガタデハアリマスガ、フタタビヘイカニチュウセイヲチカイマス」

「本当にお前達なんだろうな……誰が誰だ？」

「まずは私から。ベリアル軍暗黒参謀 ダークゴーネ。人の姿ではゴーネ・ブレヒュートと名乗っております」

「俺はベリアル軍鋼鉄將軍 アイアロン。人の名はジェネラリア・アイアンです」

「ベリアルグンキョウリユウセンシ、ザウラー。ヒトノナハ ザウリア・ベルセル」

黒スーツの女、小柄な女、筋肉質な女が順に自己紹介しながら身体の一部を変化させて元の身体になるのを見てベリアはようやく納得した。

「確かにお前達の様だな。再びベリアル軍として働いてもらうぞ」

「ハッ！」

「戻るぞ。お前達、ついてこい」

こうして、ベリアは過去の部下と意外な形で再開し、再びベリアル軍へと迎え入れたのだった。

そして……

「なるほど……貴方達が私達の後輩になるのですね」

「ええ。ご指導の程、よろしくお願いいたします」

「お前たちもなかなか骨がありそうじゃねえか。よろしくな！」

「おう！ よろしく頼むぜ、アイアロン先輩！」

「……よろしく」

「オマエタチ……ナカナカツヨソウダナ」

「ギョポポ、そうであろうそうであー」「お主も中々に強いと見る。流石、我等の先輩であるな」

「はいはい！ 皆注目ー！ そろそろ目的地につくよー！」

「やつとか……待ちくたびれたぞ」

「まあまあそう言わずに〜♪」

「東博士。今回はいったい何を？」

「リツちゃん、それは今から説明するからね。とりあえず……皆の親睦会と力自慢も兼ねて……」

“ドイツのISをゼーんぶ回収しよっか！ お仕置きも込めてね♪”  
後ろの液晶には……黒い兎のエンブレムが浮かんでいた。

## 第十四話 襲来、四人目と戦士、それと……

「諸君、今日は君達に転校生を紹介する。お前達、入ってこい」

波乱のクラス対抗リーグマッチから早一月

IS学園は騒動の前と変わらぬまでに修理が成され、生徒達もまたリーグマッチ以前の様に平穏な生活を謳歌していた。

そしてこの日、担任の一言によつて生徒達の学生生活にちよつとした彩が増えることとなつた。

「皆さん、初めまして。フランス出身のシャルル・デュノアです。僕と同じ境遇の方々がいると聞いてこのクラスに転校する事となりました。よろしくお願いしますね」

一つ目の彩はまるで太陽の様な眩しい笑顔をしている線の細い男だつた。

彼の自己紹介が終わると、教室内から一斉に黄色い歓声が響き渡つた。

しかし、それはこの教室にいる2名を怒らせるだけだつた。

「静かにしろ！ そんなに元気があんなら外を走つてくるか？ ん？」

「朝から五月蠅いぞ……少しは静かにしろ」

一人は声を張り上げて周りを一喝し、もう一人は静かに……ただ静かに警告した。

二人の一声で教室内の歓声はぴたりと止み、視線はもう一人の銀髪の少女に集中した。

「ボーデヴィツヒ、次はお前の番だ」

「了解」

かつての教官から声をかけられた少女は短く返事をする<sup>と</sup>改めて姿勢を正し、口を開いた。

「初めまして諸君、私はラウラ・ボーデヴィツヒ。  
S e v e n s   S i n s   C o r p o r a t i o n  
 S・Cの開発部門に所属している。

こう見えても元代表候補生だったのでな、ISに関して気になる事があれば遠慮なく聞いて欲しい。

ただし、そこに居られる我が偉大なるベリア陛下ならびに関係者の方々に危害を与えようと言うのであれば……容赦はしないのでそこを理解して欲しい」

「では、改めてよろしく頼む」と自己紹介を終える元教え子にかつての教官こと千冬は少なくない衝撃を受けたと同時にベリアの方を見た。

『どういふことだ』

『見ての通りだ』

『これが終わり次第説明してもらおうぞ』

『…チツ、仕方ねえな。こっちも聞きたいことがあるからな』

『おおよそ、検討はつく。手間をとらせる』

この間、約二秒である。

「さて、諸君。一限は二組との合同実習だ。速やかに着替えてアリーナに集合。遅れた者はそうだな…夏場の戦場に向かう新聞部と美術部のサポートに向かつてもらおうとしようか」

「！！！！」＜対象部活外の皆さん

「（…：…なんで知ってるの!?!）」＜対象部活の皆さん

「話は既につけてある…両部長ともとても喜んでいただぞ。では、これで終了とする。すまないがボーデヴィツヒとベリアは私と一緒に来てもらおうぞ。ああ、遅刻扱いにはしないから安心しろ」

「了解」

「仕方ねえな」

こうして、新たな彩を加えて遠い日に想い出になる日常が始まった。

「では、自己紹介をお願いしますね」

「うむ。諸君、我はヴィターニラ・極きわみ・スラントと申す。気軽に極とかスラントとか好

きに呼んでくれ」

「(…肩のあの変なのは?)」

「(…ちいさいタイラントだ)」

「ちなみにこやつは相棒の『タイラン』だ、仲良くしてやってくれとありがたい」

「みんぎゃー」

「「喋った!?!」」

「(…仲間? それとも本物?)」

ちなみにヴィターニラことヴィラニアスは四組に転入となった。

## 第十五話 兎の群れは王に仕える

「さて、お前達…説明して貰おうか」

『この時間ならば』と、千冬はベリアとラウラを相談室に案内すると鍵を閉め、二人に説明を求めた。

「簡単な話だ。コイツがいた部隊を襲撃。で、俺達のモノにした。」

「その後、ベリア陛下の知り合いが経営しております『Seven's Sins Corporation』に部隊ごと雇用されました。

黒 兎 隊は解体、再編の後に黒 シユヴァルトエ・ケイニヒ・ミリテーア 王の軍となりました。

そこで、アイン隊長長として活動していましたがこの度、銅獄社長とベリア陛下からの御命により新型機のパイロットおよび護衛として編入いたしました。」

『こちらが名刺となります。』と言いながら差し出された元教え子から名刺を受け取りながらも千冬は自分の知る過去の彼女との違いに追いつけきれていなかった。

「そ…そうか。経緯は理解した。ボーデヴィツヒは授業に向かうといい。私はベリアにもう少し話がある。」

「了解しました。そういえば、クラリツサが織斑教諭に挨拶に伺うと言っておりました

よ。それでは」

そう言つてラウラは相談室を出て授業へと向かつた。

「いいいいつたい何をした!?! アイツがあんなにも社交的になるなんて私すら想像もつかなかつたぞ?!」 洗脳か? 洗脳だな! 洗脳したんだな!」

「落ち着け。洗脳はしてない。効率が悪いからな。」

「すまない。で、何故ドイツを襲撃した? そして、何故ドイツはそれを公表もしない?」

元教え子の変わりように多少混乱していたものの落ち着きを取り戻し、公表されてない事を疑問に思つた千冬の問いにベリアはリベリオンの拡張領域から一冊の冊子とメモリを取り出すとそのまま手渡した。

「そこに書いてある事が全てだ。メモリはその冊子の元データと束からの伝言だ。読むなら誰もいないところで読むんだな。」

「待て。お前も付き合え、授業に関しては公欠扱いにしてやる。束も絡んでいるんだ、嫌な予感しかしない。」

束の名前が出てきた事によって頭痛を覚えた千冬は直ぐに真耶へと連絡を取り、授業の進行を頼んだ。

「すまない。この礼は今度させてもらう。…さて、寮長室まで同行願おうか、束の伝言も

「気になるからな。」

「つたく、仕方ねえな。」

そうして、二人は相談室から寮長室に場所を変えることにした。

―寮長室―

「なに!?! V Tシステムだ?!? あれは国際的に開発禁止の筈だ!」

「表向きな。実際、アイツが使ったシユヴァルツェア・レーゲンの奥底の方に組み込まれていたぞ。」

千冬は冊子に書かれていた内容に思わず声を荒げてしまった。

「そうか。アイツを助けてくれた事、感謝する。」

「気にするな。システムに気付いた束に頼まれたからやってやっただけだ。ついでに、それをネタにドイツからあれだけの軍隊とI Sを手に入れた。いい稼ぎになった。」

冊子には顛末まで書かれており、冊子によると

『V Tシステム作成、内蔵に対する制裁としてドイツに配備されているI Sコアを全て没収。』

『ドイツ政府の猛抗議はどうでもよかつたがベリアの提案により黒<sup>シユヴァルツェ・ハルゼ</sup> 兎隊とI Sコア

## 3個を交換」

『交換した部隊の再編をした後に全員を雇用』

の3つが大きい事象として書かれていた。

「しかし、かなり派手にやったな。上はさぞ五月蠅かっただろうな。」

「知らん。VTシステムの話をすれば直ぐに静かになつたがな。」

「くくつ。私もその場に居合わせたかったものだ。」

互いに悪い笑みを浮かべながら千冬は冊子を閉じるとメモリの方を部屋のパソコンに差し込み、中にある『ちーちゃんへ♥愛しの兎さんから♥』と書かれたフォルダを開き、中身を見て溜め息をついていた。

「おい。俺の質問にも答えてもらうぞ。あのデュノア：小僧じゃなくて小娘だろ。」

「やはり分かるか。それくらい鋭さを弟にも備えて欲しいものだ。」

「無理だな。お前の弟は鈍感さだけは一流だからな。」

「否定出来るのが悲しい所だ。」

千冬は、鈍感過ぎる弟の事にも溜め息を吐きながら「口外はするな。」と釘を刺しながら一つのファイルを手渡した。

「シャルロット・デュノア：おいおい、もう少し名前を弄つたらどうなんだ。」

「あまりに違いすぎて反応できなかったり、ボクを出さない様にする為だろう。」

「だとしてもだろ。俺達がいるとしてもまだまだ数少ない男性操縦者…おまけに既に企業所属、注目され続ければ直ぐにでもバレるぞ。」

「そうなたらそうなたった時だ。場合によっては救いは差し伸べるさ。」

「その前にお前の弟にバレたりしてな。同室にするんだろ。案外、シャワー中に入ってバレたりしてな。」

「…流石にそれは無いだろ。弟が同性愛に目覚めてなければな。」

軽口を叩きつつも内心、少しだけ不安になりながら返されたファイルを受けとると丁度、授業の終わりを告げる鐘が鳴った。

「さて、時間を取らせて悪かったな。束の伝言の件も仕方はないが了承するとしよう。護衛官とは別に実技補佐等も依頼するかもしれないが構わないな？」

「奴等の返答次第だ。俺は授業に戻るぞ。」

ベリアは返事を返し、寮長室を後にした。

「先程のボーデヴィツヒの言葉はこういう意味だったか。」

一人、寮長室に残った千冬はパソコンに表示してあるデータを見ていた。

ー S. S. C 開発部門兼企業代表操縦者 ラウラ・ボーデヴィツヒ ー

専用機 シュヴァルツエア・シュタークレーゲン



## 第十五・三話 髪留と極

「諸君。私はクラリツサ・ハルフオーフ。

S. S. C所属整備士であると共に、企業代表パイロットになった二人ともう一人の男性パイロットの護衛を行う部隊の隊長である。

手すきの時に何か聞きたいことがあれば遠慮なく訪ねてもらって構わない。

無論、模擬戦の相手も希望があれば受け付けるぞ。」

「同じくS. S. Cから来ました、ストルム・デルストリアです。

たまに整備や開発に関する授業を行う以外はアリーナの管理や装備の試験運用の手伝いをさせてもらいます。

勿論、彼女と同じく個人専用機持ちですので… 模擬戦も受付ますよ。」

ラウラ及びシャルルの転入の翌日、全校生徒に外部からの二人の職員が紹介された。

それから、織斑一夏にシャルルがシャルロットであることがバレたり。

学年別トーナメントが前回の緊急事態を踏まえて、タッグでの開催になったり。

学年別上位3チームがそれぞれ、教員を選び対戦するエキシビジョンマッチを開催す

ることに決まったり。

等の日々から数日後。

「簪、『テリブル』のロックオンのプログラムデータの数値、直しておいたぞ。」

「ありがとう。ところで、ここの装甲の耐久値計算なだけけど。」

「どれ…ふむ。」

簪とスラントは整備室で一つのI Sを組み上げていた。

I Sの名は『打鉄二式』。簪の専用機である。

「簪の計算と私の計算にズレはあまり無いな。これで問題なさそうだな。」

「それなら、これでいく。ありがとう。」

「うむ。しかし、思いきったのう。手付かずを理由にコアと機体を個人専用にするとは。」

「スラントさんのお陰。『ブリュンヒルデ以下なら皆同じ。』あの言葉は私に取っては新鮮だったから。」

「気にせずともよい。事実だからな。」

「ふふ。なら、スラントはどちら側なの。」

「我とあの御方…それと奴らはブリュンヒルデより上であろう。」

会話をしながらも『打鉄二式』は形をより洗練させていく、それは一重に簪が天才側

に近い存在であることを証明している。

スラントは計算や資材調達、補助などにまわっており、頼まれてもしない限りは開発には手を貸していない。

「あ。今度の学年トーナメント、私と組んで」

「ああ、別に構わんが二式は間に合うのか？」

「残り10日…なら、3日で稼働実験まで済ませればいい。」

「デスマーチではないか。あまり良いとは思えんな。」

「問題ない。スラントがデルストリア先生と懇意なお陰でアリーナも抑えてくれるし、部品も手に入る。オフアールがあれば代表候補から企業所属に鞍替えしても構わないくらい感謝してる。」

「…むう。我が背中を押した手前、強くは言えんが…強かになったのう。」

スラントは少し困り顔をしつつも、楽しみに二式を組み上げていく簪を優しく見守っていた。

「ところで、簪よ。夕飯は食べたのか？」

「朝に倍食べれば実質二食。」

「そんなわけなからう！ ほれ、閉まる前に軽く食べにいくぞ。」

「待つて…ここのパーツ、ここだけでも」

「後で良い！ さては貴様、夜間使用届も出しておらん。

ここで寝るなら寝るで学園内でも外泊届がいたるといつも言っておろうが：我が毎回出すと思つて甘えおつてからに。

だいたいだな、本来は本人が出さねばならんものをデルストリアを挟んで毎回担任に出しているからこの前、我が注意されたのだぞ。聞いておるのか小娘」

「お母さん、うるさい」

「貴様の母になつた覚えはない！ ほら、さつさと食べに行くぞ。引きずられたくなければ立たんか。」

「…はーい。」

「デルストリアか。すまんが…：ああ。何時もの様に夜間使用届と外泊届を頼む。別に我は迷惑ではない、気にする必要はないぞ。」

「…やつぱり、お母さん。」

「違うと言うとらう！ すまない。では、後で向かわせてもらう。デルストリアも無茶はするでないぞ。」

この後、夜食を作つたスラントに簪が「母の味」と言つたとか言わなかつたとか。